

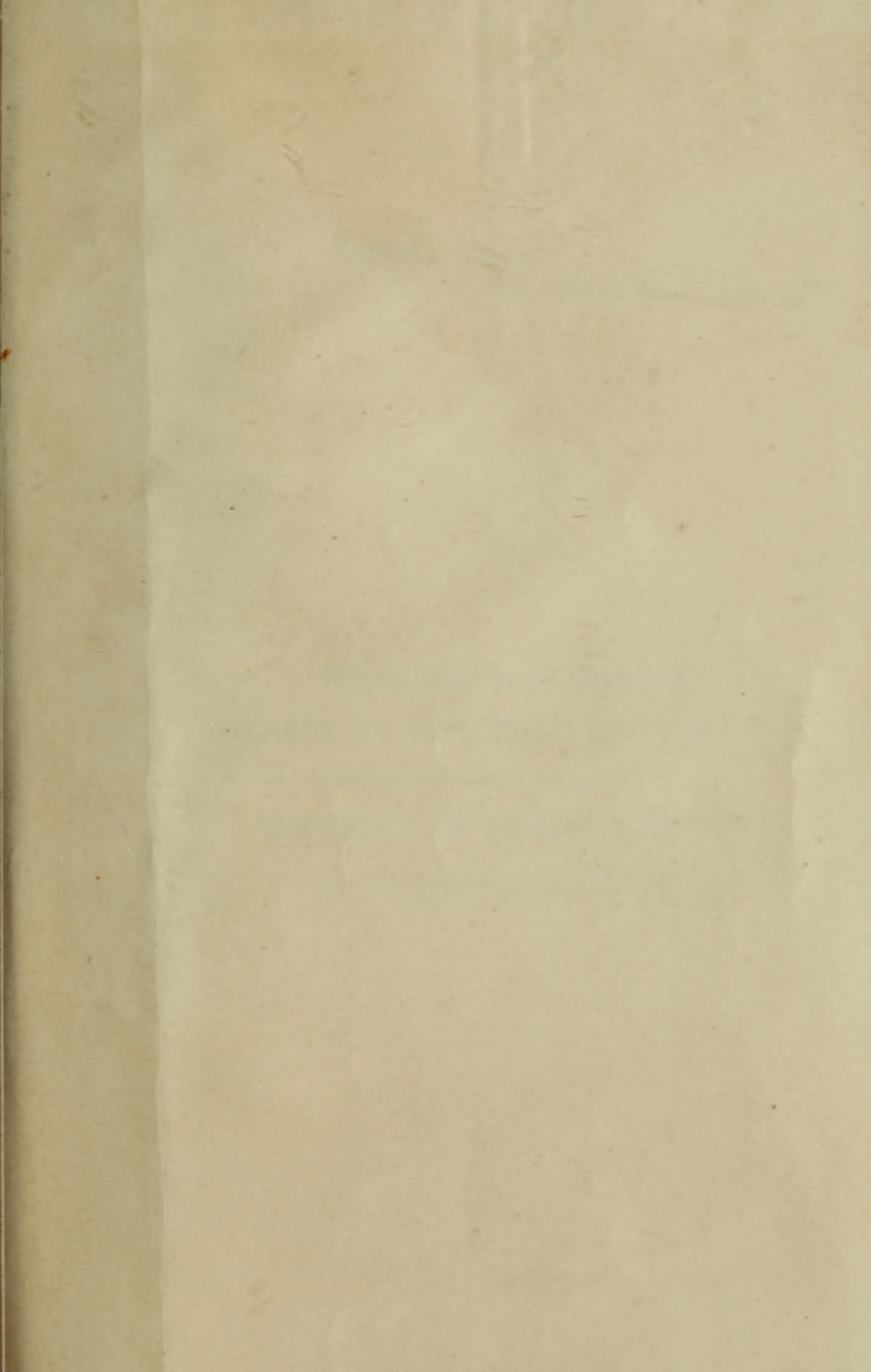
PL
726
.6
T38
1924

PL 16-9-68
Tayama, Katai
Kindai no shōsetsu 4th ed.

East
Asiatic
Studies

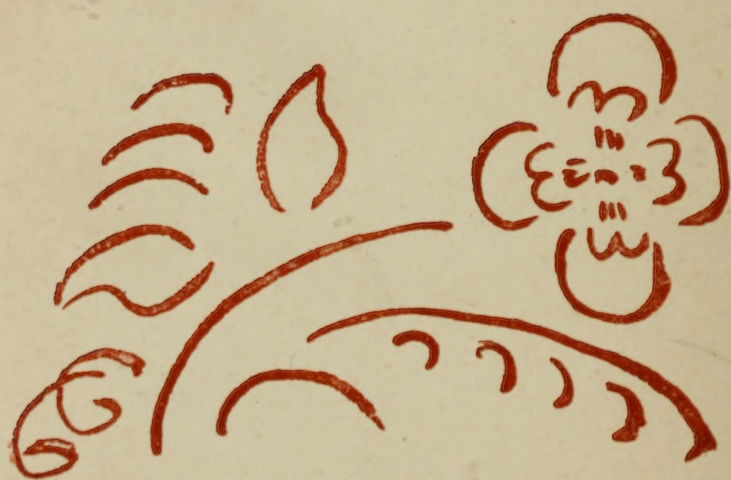
PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY



著 袋 花 山 田

說 小 の 代 近



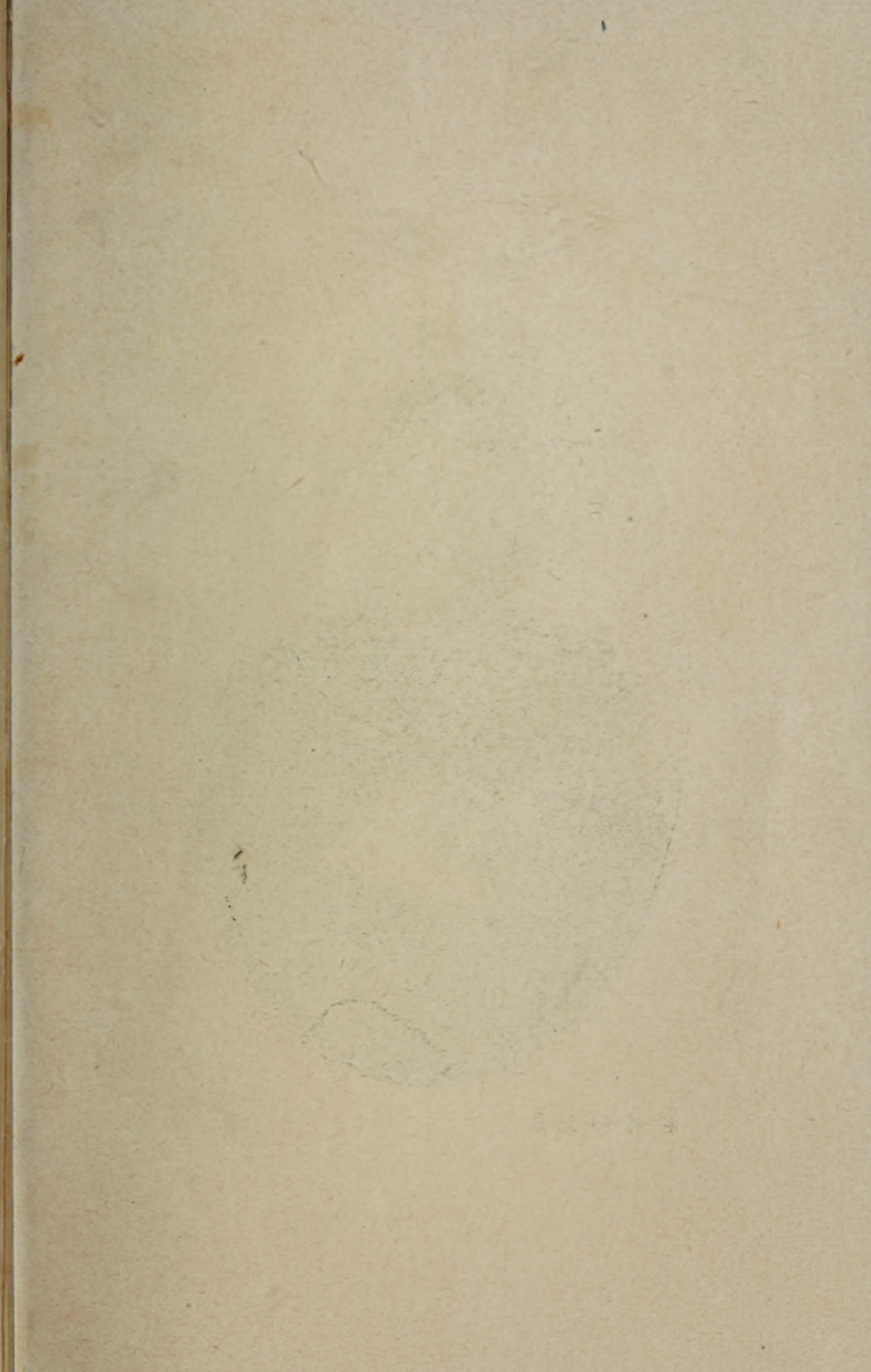
刊 社 明 文 代 近



PL
726
.6
T38
1924



者著の近最



自分が知つてゐなかつたために、または遠くに離れてゐたために、真相がほんやりしてゐたり、觀察が透徹してゐなかつたりしたところもあるかも知れません。また、さう思ひ込んで了つたために、間違つた斷定を下してゐるやうなところもないことはないでせう。しかし、これでも感じたことを本當に率直には書いて見たつもりです。そしてその中には私といふものも十分に入れて書いてゐるつもりです。どうか一讀して頂きたいと思ひます。

大正十二年立春の日に

花 袋 生

裝幀 中川紀元

目次

混沌とした時代	三
言文一致の運動	五
ツルゲーネフの最初の翻譯	七
ロシア文學の最初の影響	八
紅葉と美妙	九
西鶴の復活	一〇
「都の花」	一一
國文學の復活	一一
鷗外漁史の「文づかひ」	一三
書いた時だけが新しい	一五

紅葉と西鶴	一八
文章の巧拙	二五
文體の變遷	二六
樋口一葉の文體	二七
露伴の旅行記	二八
ゾラの最初の感化	三四
鷗外漁史の文章	三六
長谷川二葉亭の文章	三八
鷗外と二葉亭	四一
芽のやうな北村透谷	四四
透谷と「文學界」	四八
齋藤 綠 雨	五〇
綠雨の晩年	五五

縁雨の男女観	五八
硯友社の人達	五九
「早稲田文學」と「しがらみ草紙」	六〇
宙外の「紅葉論」	六〇
尾崎紅葉	六一
所謂新進作家	六五
「めざまし草」	六六
「めざまし草」の雲中語	六七
高山樗牛の出現	七〇
紅葉の「多情多恨」	七二
當時の寫實主義	七五
露伴の態度	七七
「ひげ男」	七八

「新小説」の新作家……………七八

樋口一葉……………七九

詩の發達……………八三

「若菜草」と「野邊の往來」……………八四

その時分の外國文學……………八五

大家と新作家……………八七

日光の僧房に於いての國木田獨歩……………八九

島村抱月の小説……………九八

小杉天外……………九九

ドイツ文學と大陸文學の影響……………一〇一

上田敏……………一〇二

鏡花、天外、風葉の時代……………一〇六

評論家としての高山樗牛……………一〇七

紅葉の死	一〇八
梶牛の死	一一〇
大橋乙羽の死	一一二
家庭小説、通俗小説の流行	一一六
獨歩の「酒中日記」	一一八
ニイテエとイブセンとトルストイ	一一九
鍍文學を排す	一二〇
小杉天外の「魔風戀風」	一二二
海外漁史の翻譯の感化	一二五
「明　　星」	一二八
上田敏の紹介した「海潮音」	一二九
日　露　戰　役	一三一
文壇の推移	一三四

文體から内容へ……………	一三六
箇人思想……………	一三七
其頃の新しい外國文學……………	三九
綠雨の死……………	一四三
『末流文壇』……………	一四四
小栗風葉……………	一四五
小諸に於いての島崎藤村……………	一四五
龍土會の濫觴……………	一四六
岩野泡鳴の「半獸主義」……………	一四八
大きな波濤……………	一五〇
島崎藤村の「破戒」……………	一五二
〔獨歩集〕……………	一五三
眉山の死……………	一五六

獨歩の死	一五六
二葉亭の死	一六二
徳田秋聲	一六三
性格描寫の流行	一六五
徳田秋聲の「春光」	一六七
獨歩の作品	一六八
獨歩の戀	一七二
モデル問題	一七九
「實行と藝術」	一八五
宙外と抱月	一八八
「早稻田文學」の再刊	一八九
正宗白鳥	一八九
自然主義——社會運動	一九一

鳥崎藤村の「春」	一九四
岩野泡鳴の「耽溺」	一九八
白鳥と泡鳴	一九九
夏目漱石	二〇一
「ほととぎす」の寫生文	二〇一
漱石と英文學	二〇四
漱石の作品	二〇九
徳富蘆花の『田園生活』	二一〇
早稻田と坪内逍遙	二一四
早稻田と島村抱月	二一六
抱月のやつた「實行と藝術」	二一七
抱月の戀	二一九
再び實行と藝術	二二〇

抱月と須磨子	二二三
永井荷風	二二三
白鳥の藝術	二二六
「二家族」と「毒」	二二九
つくる作家とあらはす作家	二三一
泡鳴の口語詩	二三五
泡鳴の一元描寫	二三八
明治四十二三年の自然派	二四一
上田敏の「うづまき」	二四七
徹底自然主義	二四九
平面描寫	二五〇
享樂派	二五二
近松秋江の「ある女の手紙」	二五七

中村星湖の「失はれた指環」	二五九
戀愛觀の種々相	二六〇
性慾と作品	二六一
性慾から見た作家別	二六三
女性描寫と諸家	二六五
島崎藤村と性慾	二六九
「新　　生」	二七二
最も新しい作家の群	二七七
若い人達とプロレタリア	二八〇
三つの作品	二八八
漱石門下の人達	二九一
「時」といふことと「空」といふこと	二九七
人道主義	三〇五

弱い藝術	三〇九
階級と箇人	三一三
早稻田と慶應	三二〇
前田晁の「曉霧」	三二五
自然派の渦潮の中から	三二七
歐陽修の「送徐無黨南歸序」	三二八



近代の小説

私が初めて新しい文學に接觸した時には、まだ明治の文化は全く渾沌としたものであつた。私などでも漢文や漢詩をつくることを學んだ。和歌を詠むことを學んだ。所謂發句といふものをつくることを學んだ。一方では新しい舞踏が物議を醸してゐるのに、一方では國家を憂ふるといふ志士が袴を裾短かに穿いて、犬殺しの持つやうな太いステツキを持つて街頭を往來した。維新の破壊の悲劇の跡が、まだあちこちに残つてゐて、大きな邸の立腐れになつてゐるやうなのをもそここに見かけた。私等の眼には何が何だかわからなかつた。何れが本當だか、何れがうそだか、全く見當がつかなかつた。

その時分には、『佳人の奇遇』といふ本が賣れてゐた。『雪中梅』といふ政治小説が賣れてゐた。そしてその一方には、春のや主人の『書生氣質』などがあつた。それもかなり評判であつた。その他にも維新時代を追想して書いたやうな作だの、外國の小説をわろく此方に翻譯して

書いたやうなものだの、支那の雜曲の感化を受けて出來たやうなものだのが混雜ミヤカクとあたりに満ちてゐた。この中から本當に價値のあるもの、本當に價値のある芽のやうなもの、それに纏つてつかまつて行きさへすれば大丈夫と言つたやうなものを搜し出すのは容易なことではなかつた。それに、外國から入つて來る文化は、丸で洪水か何ぞのやうであつた。唯、無闇に流れ込んで來た。流れ込みさへすれば好いといふやうにして流れ込んで來た。従つてその方面に於ても、本當のものを搜むのは容易なことではなかつた。否、皆なてんでに不知半解の語學の力で、或はその輪廓を、或はその片鱗を、或はまたその尾しほを攫まんで來て、そしてそれが本當の文化であると言つた。外國は皆なさういふ風であると言つた。いつまでも漢文學や和文學に取り纏つてぐさぐさしてゐては、とても、うたつのがあがりつこはないと言つた。従つて、その議論の多かつたことは？ その揚足取りの多かつたことは？ 是非の議論の喧さわしかつたことは？

言文一致の文章を書かうとした運動は、しかし何と言つても、一番新しい進んだものであらねばならなかつた。つまりさういふ運動は、英語から入つて行つて、向うの詩や小説などに接して、不知半解の譏は免れ得なかつたとはいへ、兎に角、それを眞似やうとしたものであることはたしかであつた。何うも今までの文章の書き方では面白くない。直寫が出来ない。細緻な描寫が出来ない。かうその人達は思つた。否、さうまではつきりと意識してはゐなかつたかも知れないが、その場合、外國の文學を模倣することが一番必要に感じられて來たのであつた。で、最初の外國からの影響——ビイコンスフィールド伯の政治小説などの影響から一步を進めて、山田、長谷川、矢崎三氏の言文一致の運動が始つた。

この三氏の中で、山田氏のは一番早くあり、また一番世の嗜好にも投じたらしく見えた。これの教化は全く英語から來た。その詩はミルトン、シエレイあたりを模倣した。小説はスコットあたりを讀んだらしかつた。讀賣新聞に出た『武藏野』といふ短篇は、かなり評判であつたけれども、その文體の變つてゐたことと、感じ方が當時にあつて清新に思はれたこととの外には、大してすぐれたものではなく、また『國民之友』の附録に出た『胡蝶』なども、唯、

ハイカラであつたために、一種のセンセイションを起したに過ぎなかつた。『いらつめ』といふ雑誌があるが、それは山田氏の經營してその本據としたものであつたが——今でも上野の圖書館に行けば見ることが出来ると思ふが、これなどでも大したものではないのが一見してすぐわかつた。しかし、それを馬鹿にすることは無論出来なかつた。何故と言ふのに、そこから明治大正の新しい文學がその芽を出し始めたのだから——。

山田氏の英語から出たのに對して、長谷川、矢崎の二氏が露語をその外國文學模倣の對照にしたといふことは、面白い興味の儘いことであつた。長谷川氏はフルゲネフの『あひびき』を『國民之友』の第一卷第五號に載せた。或は山田氏の『武藏野』よりも早かつたかも知れなかつた。そしてその翻譯が、その翻譯の言文一致が、いかに不思議な感じを當時の文學青年に與へたか？ いかにも珍奇と驚異との感じをその當時の知識階級に與へたか。現に、私などもそれを見て驚愕の目を睜つたものの一人であつた。『ふむ……かういふ文章も書けば書けるんだ。かういふ風に細かに、綿密に！ 正確に！』かう私は思はずにはゐられなかつた。想像してもわかることである。あの當時の漢文崩しの文章の中に、または近松張、簗村張と言つた、句讀も

何もないやうな、べらべらとのつべらほうに長く長くばかりつゞいてゐるやうな文章の中に、あの？や！や、——の多い文章が出たのであるから。また句讀の短かい、曲折の多い、天然を描いた文章が出たのであるから。

私達當時の文學青年は、何遍あれを繰返して讀んだか知れなかつた。母親にも讀んできかせれば、兄や弟にも讀んできかせた。ことに、あの最後の『あゝ秋だ！ 空車の音が虚空に響きわたつた……』といふあたりは、何とも言はれない感じを私に誘つた。否、かなり以後までも、野原に行きなどとすると、いつも私はそれを思ひ出した。

今日から考へれば、無論、それは大したことではない。ツルゲネフの『獵人日記』の一節の翻譯など、高が知れてゐることである。しかし、その時代にさうした翻譯が出たといふこと、そのことが貴いのであつた。その芽が何とも言はれず貴いのであつた。

それに、かういふことが言はれた。山田氏乃至坪内氏の英語から英文學が入つて來たと同じやうに、長谷川、矢崎二氏からロシア文學が入つて來た。他の文學——たとへばフランスとか、ドイツとか、スカンデナビアとか以上にロシア文學が明治大正の文壇に深い影響を及ぼしたと

いふことは、何うしても二氏の早い提唱にその功を歸さなければならなかつた。

矢崎氏に『初戀』といふ短篇があつた。それは『都の花』に出た。價値としては、さう大し
てすぐれたものではなかつたけれども、その時代に於て、氏がいかに早くツルゲネフの感化を
受けてゐたかといふことを知るには、好箇の材料であつた。長谷川氏の『浮雲』の中には、ゴ
ンチヤロフの描法がはつきりと指さされた。

三

思ふに、渾沌としたものの中から、いろいろなものが浮び上らうとしてゐたのであつた。い
や、そんなものはいけない。いや、そんなものは古い。かう互ひに批評し合つた。雅俗折衷と
いふことが言はれ、地の文と會話とはわかる方が好いと言はれ、また一方では地の文と會話と
が旨く雜り合つてゐる方が文章が旨いのだと言はれた。文體といふことが、まだはつきりきま
つてゐないのであつた。その時分の文壇では、簡人の文章のスタイルなどといふことは、まだ

口にさへ上らない時代であつた。

『さうだね。たしかにさういふところがあるね。全體の運動——言ひかへれば、メイン・カレント、それもあるが、それを貫いて箇人々々の性格といふことが活躍してゐるね。それが面白いね。山田があゝいふ風にわるくハイカラに外國の模倣ばかりをやり、評判の好いにつれて、『都の花』に入り、『いらつめ』を發行し、極端な進歩派を揮り廻したので、尾崎は山田以上に外國語も出來ながら、わざとさうしたバタ臭いものを却けて、やれ三馬、やれ西鶴といふ風に保守派になつて對抗して行くやうな形になつて行つたからね。矢張人間だね。矢張お互ひの箇の性格といふことだね？』かうその時分のことを知つてゐるある人が言つたが、實際それはその通りであつた。紅葉は美妙に對抗して、わざと『紅子戯語』と言つたやうなものや、『色懺悔』『王昭君』と言つたやうなものを書いた。

今日では、三馬や京傳を読むものは殆どなくなつて了つたが——その時代を研究するものでもなければ讀むものは全くなくなつて了つたが、その頃には、まださうした戯作ものをも文學青年達は讀まなければならぬのであつた。否、三馬や京傳ばかりではなかつた。すつとあと

の『八笑人』の鯉丈や、『釋迦八相記』の萬亭應賀なども読んで見なければならなかつた。假名垣魯文のものなども、社會ではまだある勢力を持つてゐた。で、私達は三馬や一九は勉強するつもりで讀んだのである。流石にそれを模倣するといふ氣にはならなかつたけれども、旨いものであると思つて讀み耽つたものである。

紅葉と露伴とが西鶴を掘り出して來たのは、それから一年ほど後であつたが、これなども矢張山田のバタ臭いのに對抗する形があつたのであつた。つゞいて吉岡書店から『新著百種』が出た。

この『新著百種』の二號に、簗庭篁村の『掘出し物』といふのが出た。つまり篁村張の文章——當時にあつては、先づ先づこれを一番中心の文體としなければならぬものであつた。最早古いものとされてはゐたけれども、それでも十卷の『むら竹』を讀むものは、まだまだ澤山にあつた。この文體は露伴から一葉に行つた。そしてそこで絶えた。つまり紅葉はその極右黨の小説を『新著百種』の二號に載せて、極左黨の山田に對抗させたつもりであつたに相違なかつた。

『さうかな？』

『それはさうさ……。』しかし、山田の聲價は長くつゞかなかつた。實力がなかつた。最新派を名告りながら、外國文學に於ける知識をさう大して豊富に持つてゐなかつた。それに、作としてもすぐれたものを出不なかつた。『都の花』に出た『いちご姫』は、かれに取つては、非常に努力したものであつたであらうけれども、しかし最早『武蔵野』時代のやうに文學青年を動かさなかつた。それに反して、紅葉は次第に頭を擡げた。

それに、一方に國文の運動が起つて來た。頻りに和文が流行した。落合、小中村などといふ人達が頻りに歴史ものや、小説に似たやうなものを書いた。そしてそれはかなり盛んな運動であつた。一時は全く外國文學の模倣か壓倒されると思はれるくらいであつた。『さうさね。あした運動の起つたといふのも、いかに社會や文壇が渾沌としてゐたかといふことを思はせる材料にはなるね。無論、その運動はバタ臭い外國文化派に對して起つたものには相違ないのだが、一方には、またいかに當時の文學に文體をいふものがきまつてゐなかつたかといふことを思はせるに足りるね。山田や長谷川の言文一致もあまり急進的で突飛すぎる。さうかと言つ

て、箕村張のあの文體も面白くない……。西鶴だつて今の用には足りない。それよりは、古に復さうぢやないか。中世時代以來、文章は亂れて來てゐるけれども、現に、日本にも、大鏡とか、平家とか、源氏とかいふものがあるぢやないか。あれに復へすのが正當だ……。さうすれば、純粹な日本文學が生れる。かういふ風に、あの落合や小中村の連中は思つたんだね？しかし、あんな古文で小説は書けないよ』こんなことを誰かが言つたことを私は覚えてゐた。たしか、『國民之友』の正月附録にも、さうした復古文で書いた小説の掲載されてゐたことがあつた。

ある日、あるところで、私はその話をした。そして言つた。

『いや、あの復古文の影響は、かなりに大きく且つ廣かつたね』

と、それをきいてゐたB君は傍から言つた。

『一時はあれになると思つたものもあつたと見えるね？』

『さうかな……。しかし、僕はさうは思はなかつた』

『何しろ、あの復古文で小説を書く時代が二年くらゐあつたよ。現に、それを修業したのもの

あるよ』

かう言つてB君は考へるやうにした。やがて言葉をついで、『現に好い例がある。そら、鷗外漁史に「文つかひ」といふのがある。あれなんか丸で復古文だからな。何せ、あれは、一度落合に見て貰つたつていふからね?』

『さうだつてな』

『それに、「うたかたの記」だつて、矢張さうだよ。つまり、あの時分には、和、漢、洋を一つに丸めることが一番肝心だつたんだね。』

『それはさうだ——』

『のんきなもんさな——』

『でも、かういふことはあると思ふね。何と言つても、文學はその時代の反響だ……。その時代の反響を受けずには何うしたつてゐられない。つまり、外に模倣から保守主義、保守主義と國家主義との接觸、さういふ空氣からあの復古文の運動は起つたんだね。日本もさう馬鹿にしたもんではない。現にかういふものがある。かういふ好いものがある。かういふ風に思つた

んだね。あの時分ほど昔のものの翻刻された時代はなかつた。』

『本當だ……』

B 君もその時分を思ひ浮べるやうにした。

たしかそれは明治二十五年頃であつたと思ふが、その時分には、私にはそれまで學んだ漢文や漢詩が全く不必要になつたやうな氣がした。今まで馬鹿なことをやつてゐたやうな氣がした。これから先、漢文や漢詩を作つたつて、それがいくら上手になつたからとて、それが何うなるものかと思はれた。で、私は長い間母や兄から貰つた小遣で買ひためた韓文公文集だの、蘇東坡詩集だのを古木屋へ一束三文で賣つて、そしてその錢で近松や西鶴の十錢本を買つた。源氏物語なども買つた。私が歌を本式に松浦辰男先生について習つたのもその頃からであつた。

今日讀んで見ると、昔、面白かつたものがすべてつまらなくなつてゐる。『オヤ、こんなものだつたかしら？ あんなに感動を受けた作が？』これは私ばかりではない。誰でも皆なさういふ感じを抱かぬものはあるまい。

現に、私の書いたものなどでも、さうである。今、全集を編みかけてゐるので、昔書いたものをほつほつ見てゐるが、何うも拙ちうくつて讀めない。何うしてこんなに拙いものが、あゝいふ風に世間に迎へられたらう？ 『蒲團』などが何うしてあんなにセンセイションを起したらう？ かういふ風に思ふと、非常に耻かしくなる。そして全く一種の深い深い幻滅を感じずにはゐられなかつた。私は考へた。『藝術といふものも、矢張、その書いた時だけが新しいのではないか。作者の筆から離れて來た時だけが新しくつて、すぐ古くなつて了ふものではないか。何んなに好いものでも古くなつて了ふのではないか……』私は答へを待つた。答は來なかつた。しかしその思考の中にも、一塵の眞理は含まれてゐるやうに思はれた。

私はそれから暫くしてある人に言つた。

『何うも、矢張、一度埋もれて了はなくては駄目だね。完全に埋もれて了はなくなつては？』そ

して再び生き返へる。それが、本當なんだね。さうでなければ、決して本當のものとは言へないんだね？」

『それはさうかも知れませんな』

『何しろ、僕が経験したのでも、皆なさうだもの。時がドシドシ作品を古くして了ふもの……。何んなに感動を受けた作でも、五六年経てば、もう古くなつてゐるんだもの……。それを思ふと、はかないですな……。』

『でも、クラシツクとして残つてゐるものもあるんですからな』

『いや、シエクスピイアでも、ゲエテでも、今日から見ればさう大して面白くもえらくもありませんよ。唯、クラシツクだから、雷同して濠いと思つてゐるんですよ。矢張、その利那だけが新しくつてすぐれてゐると言ふべきですな』

『でも……？』

『何ういふのが残つて、何ういふものが亡びるか、それもわからんですもの。さういふことも矢張、運、不運があるんですからな』

『それはさういふことはありませんな』

『何うも何が何だか、考へると、丸でわからなくなつて了ふ！』

私はいろいろな作をそこに持ち出して見た。『胡蝶』を。『舞姫』を。『色懺悔』を。『浮雲』を。

『濁江』を。『伽羅枕』を。『多情多恨』を。『かくれんぼ』を。『たけくらべ』を。『風流佛』を。『泥水清水』を。『初戀』を。『無花果』を。『不如歸』を。それ等はすべて傑作として、褒められもし賣れもしたものであつたが、しかも、今日、それを讀んで、猶ほその新しさを、その面白さをその諸篇の上に感ずることが出来るか何うか。それは決して決して出来ないことであつた。すべて皆な過ぎ去つたつまらない作品であるやうな氣がした。しかしそれは藝術といふものが刹那だけ新しく價値があるといふためではなくて、それ等の作品が根本からすぐれてゐる作でないためではないか。すぐれた作ならば、いつ讀んで見ても感動されるものではないか。今度は私は外國の作品について一考した。矢張、さういふ氣がした。昔、讀んだシェクスピアの脚本や、ゲエテの小説や、ユウゴオの稗史や、さういふものはすべて感じが薄かつた。寫生を主にしたゾラの作品なども、餘りに煩瑣に過ぎ、退屈に過ぎてゐるやうに思はれた。トルストイ

の作品だつて、初めて讀んだ時のやうにフレッシュに感ずることは出来なかつた。あらゆるものを古くして行く恐ろしい時の力ではないか。

でも、木質的のものならば、いつまでも残つてゐるのではないか。忘られずに残つてゐるのではないか。例へて見れば、紅葉の『伽羅枕』は西鶴の感化の下に書いたものであるが——それの出た時には、西鶴以上にすら盛め立てられたものであつたが、今日比べて考へて見ると、西鶴の『一代女』の深く人間の髓にまで入つてゐるのに引かへて、『伽羅枕』はある女から身上話を聞いて、そしてそれを補綴したにとどまつてゐるやうなところがある。一つは飽までも本質的なのに、一つは要するに好加減な叙述だといふ風に考へられる。これが西鶴のいつまでも亡びない理由ではないか。世間並の紅葉の作品の竟に忘れられて行く理由ではないか。しかし、さうばかり簡單に言つて了ふことの出来ないやうな氣がした。私はそれからそれへと考へた。近松の戯曲や、昔から傳つて来た芝居が、たとへば累とか四谷怪談とか言ふやうなものが、今でも飽かれない所以を考へて見た。

人間の心の底まで入つて行くやうなもの、人間の魂をも^く挿かさに置かないやうなもの、い

くら年月が経つても、人間が矢張やつてゐるやうなもの、もつと詳しく言へば、不易なもの――その時だけ流行つて、時が経てば、すぐ變つて行つて了ふやうなものでないもの、例へて見れば、男女のこととか、心理的のこととか、その作品の中にその時代が見えるばかりでなしに、生きた人間が覗かれて見えるやうなことだとか、さういふものをつかんで書いた傑作は、いつまで経つても古くならないのではないか。そのため、作者は第一義的でなくてはならないといふのではないか。その時代をすら超越するものでなくてはならないといふのではないか。社会に捉はれてゐては、社会の表面で行はれてゐることだけに興味を向けてゐては、到底第一流の作家になることは出来ないとは言ふのではないか。

五

長谷川二葉亭は、それでもその『浮雲』に於て明治二十三年代の日本の家庭を描き出さうと試みてゐたことは、それは事實であつた。つまりかれはゴンチャロフの『通常人の一生』だの、

『オプロモフ』だの、『斷崖』だのの手法、描法を日本の家庭生活にあてはめて見るには見たのであつた。昇でも、文三でも、お勢でも、お勢の母でも、恐らくは皆なあの時代の標式的の人達であつたに相違なかつた。お勢の母だの、昇だのは殊によく出来てゐた。あれで、もう少し深く入つて行く觀察と、力と、表現の方法とを持つてゐたならば、あの『浮雲』は日本の『斷崖』となる事が出来たであらうが、惜しいことには、模倣が過ぎて、書くべきところが十分に書けてゐず、入つて行くべきところが十分に入つて行けてゐなかつた。それに、作者の年齢もああいふものを書くのにはやゝ若過ぎた。

それに、一方では、長谷川氏のやうな新しい人達でも、時代といふものの影響を受けないわけには行かなかつた。かれでも矢張、漢學を學んだ。戯作的小説を讀んだ。かれに取つては何の必要もなかつたであらうと思はれる三馬や一九のものにも讀耽つた。そしてその影響がかくされずにその『浮雲』や『あひびき』や『めぐり合』に出て來てゐた。かれも矢張當時の通とかいきとか江戸子とかいふことに重きを置きすぎる風潮に餘りに多く浸り過ぎてゐた。しかしそれは何うも止むを得なかつた。その時代の中にあるて、その時代の好尚や、思想や、考へ方や、

氣分やに觸れずにゐるといふことは、餘程すぐれた天才でもなければ、それはとても出来ないことであつた。かれの残した翻譯を今日讀んで見ると、さうした弱點がことにはつきりと指さされて見えた。

若い人達は言つた。『あんな翻譯よりも、今の人のやつたものの方が、何んなにうまく、また何んなに自由でもあるか知れない。それに、本當の意味から言つても原書に近いか知れない。何うしてあんな無駄な努力をやつたのだらうな』つまり翻譯者が骨折つて、非常に骨折つて、體がわるくなるくらゐ骨折つて、日本の文章に、氣分に近寄せやうとしたことが、今では丸で無駄な努力になつて了つてゐるといふのである。何うしてあんなことに馬鹿骨を折つたかと言ふのである。そしてそれはある程度まで眞理である！ 實際、二葉亭にしろ、紅葉にしろ、骨を折るべきところに骨を折らずに、骨を折らなくとも好いところに馬鹿に力を盡したのである。しかし、これは誰を咎めやう？ これも皆時代の感化ではないか。時代の影響ではないか。さういふ時代に——さうした馬鹿骨を折らなければ通用しなかつた時代に生れた災害わざはひではないか。つまりその時代には、何から何まですつかり日本のものにしてはなければ、翻譯は人が

読んで呉れないのであつた。『何んだ！　こんなわからない文章！　日本にはこんな文章はない！』かう言つてすぐ傍わらにやつて了ふのであつた。

山田氏、坪内氏の英文學、それに『國民之友』一派の基督教から入つて行つた外國趣味——むしろイギリス文學趣味、さういふものが混雜と巴渦を卷いてゐたのに對して、忽ち起つて來たのは、詩の方でのS、S社の『おも影』と、しがらみ草紙のドイツ文學の鼓吹とであつた。森鷗外氏は躍然として明治の文壇にその頭角をあらはし出した。

殊に、私が異様に感じたのは、その頭角のあらはし方が、美妙とか、紅葉とか、露伴とか言ふ人達と丸で違つてゐたことであつた。そこには一種他と違つた外國文學がその背景を成してゐた。褒めて好いのか、わる口を言つて好いのか、ちよつとわからないやうなところがあつた。『舞姫』の出た時には、ことに、その毀譽褒貶が區々であつた。あるものは、『何だ！　あんなもの！』と言つた。あるものは、『文章が丸でなつてゐないぢやないか』と言つた。またあるものは、『あれは翻譯だ！』と言つた。しかし、兎に角、今までになかつたものが突然そこにあらはれ出したのは事實であつた。同じ『國民之友』附録に出た紅葉の『枯華微笑』は全くこれがた

めに壓倒されて了つた。

それに、鷗外が學者であるといふことが、次第に世間に知れわたつて行つた。かれは軍事衛生を研究するために陸軍からドイツに留學させられたが、その間かれは盛に外國の新しい文學を研究して來たのであつた。かれはロシア文學をも研究した。スカンデナビア文學をも研究した。フランス文學をも研究した。否そればかりではなかつた、かれは西班牙のカルデロンをさへ讀んだ。つゞいて美學哲學にも及んだ。であるから、かれが日本に歸つて來た時には、その方面にかけては誰もかれに双向うものはないと言つても好いくらゐであつた。それにかれは論難に長じてゐた。かれは漢文崩しに翻譯口調を交ぜたやうな文章で、四角八面に切つて廻した。實際、當時の文壇でかれに相手にされないものはないと言つても好いくらゐであつた。かれは外山正一博士と畫論を闘はした。當時の有名な批評家石橋忍月氏と幽玄を論じた。そして最後には、一方に霸を唱へてゐた早稻田の坪内氏と例の有名な没理想戦をやつた。

妙くとも私はしがらみ草紙を愛讀した當時の文學青年の一人であつた。私はそこからいろいろなものを教へられた。ゾラの實驗寫生説も、ハルトマンの假象説も、印象派や外光派の畫の

話も何も彼も、皆なそこで教へられた。何でもその時分、博覽會があつて、その美術館に陳列された油畫の部分で、鷗外氏が國民新聞で批評してゐたことがあつたが、それを私は毎日毎日切抜いて置いて、それを持つて、一々その繪に比べて見て歩いたことがあつた。『えらい人だな！何でも出来るんだな！』こんな風に私は思つた。

しかし、今日考へて見ると、あの森氏のやうな新歸朝者——新しい外國の知識を澤山に持つてそして歸朝して來たものは滿更ないではなかつたのであつた。私の知つてゐるだけでも、尠くとも二三人はゐた。しかし、さういふ人達には、惜しいことには、それを振廻す和漢學の力がなかつた。文章がなかつた。またあの何でも出来るといふ才能がなかつた。

六

尠くともその頃には、文章といふことが一番重きを置かれた。『あいつはまだ文章が拙いな！駄目だな』とか、『もう少し何うかなりさうなもんだ。丸で句讀さへ本當に打てないぢやない

か』とか、さういふ言葉は到るところできかれた。一人前の作家になるといふことは、何うやら彼うやら人に認められるだけに文章が書けるといふことであつた。それと言ふのも、文體がまたそれとはつきりきまつてゐないからであつた。

私の記憶してゐるだけでも、随分いろいろな文體があつた。先づ第一に雅俗折衷、それは近松、西鶴あたりから換骨脱胎して來たやうなもので、その中にも篁村派、露伴派、紅葉派といふ別があつた。これに對して、漢文崩しの文章が、もはやその時分には大分その勢力を失ひかけて來てはゐるけれども、それでもまだかなりに書かれてゐた。森田思軒などがその牛耳を執つてゐた。そしてその一方に、言文一致が、もう少し伸びなければならぬのに、いつまでもぐずぐずと同じレベルに留つてゐるといふ風で書かれてあつた。私の考へでは、和文が急に流行し出したために、そのために、山田氏や長谷川氏の創めた言文一致が、その出るところにも出られずに、長い間押しつけられてゐたやうな形勢になつたと思ふが、何うか。しかし、誰でも少しわかつたものは、將來はその言文一致に一致されて了はなければならぬものであることを——尠くとも小説だけでもさうならなければならぬものであることを暗々裡に氣附いて

るないものはないのであつた。前には紅葉が『二人女房』にそれを試み、後には鷗外がその翻譯の二つ三つにそれを試みたのも、さうした氣運の潜んでゐたことをはつきりと裏書するやうなものであつた。

紅葉は中でも殊にそれについていろいろに考へて見たらしかつた。『言文一致も好いけれども、どうも物足らんね？ 丸で言はうとする調子が出て來ないからな。馬鹿に軽いからな』こんなことを言つたこともあれば、『ひとつ今度は地の文だけ文章でやつて見やうと思ふんだ……』會話は何うしたつて眞に迫らなければならぬ約束があるんだからね』などと言つたこともあつた。『紫』『冷熱』などといふ作には、その苦心した形が歴々と指すことが出來た。

私などでも、固い文章を澤山に書いた。漢文崩しなども書いた。近松西鶴張も書いた。地の文を文章にし會話だけをそのまゝにしたやうなものだつて五つや六つ書いたことがある。それにしては何と言ふ混亂した文體だつたらう？ それが明治三十七八年の言文一致までになるのは、いろいろな犠牲も拂はれれば、いろいろな人知れない踏臺になつたものもあつたのであつた。決してすらすらと樂にそこに行つたのではなかつた。

露伴——あの最後まで雅俗折衷體を書いてゐた露伴すら、『天うつ浪』に行つて、何うしても言文一致を書かなければならなくなつたのなども、暗々裏に時勢が推移して行つたのを語るものでなくて何であらう？

さう言へば、此頃『一葉全集』が縮冊になつた。私はそれをもう一度読んで見た。かの女などは、近松、西鶴、それからすつとつゞいた雅俗折衷體の最後のものであるやうな感じがした。あそこであゝした文章を書くものは絶えた。さう思ふと、一葉女史その人が、はつきりあいつ代の——明治二十七八年頃の女を代表してゐるやうな氣がした。『たけくらべ』『行く雲』『濁江』などを『めざまし草』の大家の連中の中で、露伴が一番多く推稱したのも成ほどと點頭かされた。ことに、あの日記を和文で書いてゐるのなども、十分にその人の教養の何物であるかを示すに足りると私は思ふ。

露伴はしかし私に取つては忘れられない作家であつた。あの眞面目さ、あのねばりの強さ、またあの輪廓の大きさ——それは書いたものには大したものはないかも知れない。またその位置としても、常に新派から押されるやうな形になつてゐたかも知れなかつた。しかしそれでもかれは私にはなつかしかつた。

かれに『枕頭山水』といふ一冊の旅行記がある。それを私は今でも愛讀してゐる。『突貫紀行』などは中でも殊に忘れられないものであつた。そこにははつきりとかれが出てゐた。若い強いかれが出てゐた。北海道の電信技手の職を捨て、本だの着物だのを賣つて、それを旅費にして、徒歩旅行で東京へと歸つて來たさまは、今でもはつきりと私の眼に残つてゐた。あの人跡の稀な七戸あたりで、やたらに食はせる葺に當てられて、腹が痛んで終夜眠られなかつたことや、野蒜ノアサから松島に來て、鹽竈で一文なしになつたさまや、仙臺でやつと少しばかりの金を工面して、夜通し歩いて、その時分やつと出來たばかりの郡山から汽車に乗つて歸つて來たさまや、その福島から二本松に來る並木松の下で、月の明るい光の中に仰向に倒れて人生を思つたさまなど、今思つてもはつきりと私の眼の前に浮んで來る。それに、始めて書いた『露園

『團』が賣れて、その原稿料で、大晦日から正月にかけて下野から碓氷、木曾の方まで旅行して、名古屋に出て歸つて來た『醉興記』などにも、いかにも若々しい活氣が充滿してゐて、何とも言はれないなつかしさを感じた。木曾の須原の花漬賣、それを何ういふ風にかれがその作の中に用ゐたかといふことなども、私にある靜かな藝術家らしい感じを與へずには置かなかつた。龜山から四日市に來る途中で、知らない旅客と駈けくらをしたあたりなども、いかにも露伴らしい感じがした。

『地獄溪日記』あれも忘れられないものの一つであつた。それは例の『國民之友』の夏期附録に出た『一口劍』を赤城の山の中に書きに行つた日記であつたが、それを讀むと、若い作家がさびしい敗屋の中にひとりゐて、雲のかゝつたり晴れたりするのをじつと眺めてゐるさまだの、殊なランプもなしに、油煙で鼻の穴の黒くなるやうな夜を送つたりするさまだのがはつきりと私の眼の前に浮んで來て、それと同時に、お蘭のやうな女をあゝした主人公に配した作者の心境がいろいろに思ひやられた。『蝶一つわれに添寢の山家かな』いかにも靜かな藝術家の心の境ではなかつたか。

しかしその旅行記も、『易心後語』『まき筆日記』と段々流行作家になつて行けば行くほど、さうしたさびしさや静かさがなくなつて、慌だしいものになつて行つたのが何となく惜しいやうに私には感じられた。

『地獄溪日記』あたりの静けさは、あの芭蕉の静かな心持と共通してゐるはしないか。あゝいふ境が藝術家としては最も貴いのではないか。あゝいふ心境が長くつゞくといふことは、それはむづかしいことであらうけれども、しかしそれが続けば、立派なすぐれた作品が出来て行くのではないか。こんなことを私は今でも考へた。ずつと後に、志賀直哉氏が矢張あそこに行つて、短かい文を書いてゐるが、それも旨いものであつたが、それ以上に私はあの『地獄溪日記』を愛讀した。

私はある日ある友達と次のやうな話をした。

『何うも、矢張、若い時のあの心持が好いんですな。露伴ばかりぢやない。私でもさうだ。此間、古い反古を整理すると、その中から、若い時、旅に持つて歩いた手帳が出て來た。それにも一面に歌が書いてある。つまり、歌を考へ考へ歩いたのをそのままそこに書きつけて置いたの

だ……。でも、その中におもしろい純な歌があるからね。今ではとてもあんな無邪氣な心の境にゐることは出来ないといふやうな純な歌があるからね。……つまり、あまり世の中に染まりすぎるからいけないんだね？　そのために、折角持つてゐたものを失つて了ふんだね？」

『さうですかね？』

『ちよつときくと、君などでも可怪しいやうに思ふでせうけども、何うもさうだ……。それは社會に觸れることも肝心だ。社會ばかりではない、人間の心の火と水の中に入つて行くことも肝心だ。しかし、大抵なものは、そこに入つて行つただけでなしに、すぐそれに染まつて了ふからね。染まつても好いけれど、さうすると、すぐそこから出て來られないからね。そこが恐ろしいね？』

『でも、その純な心持ばかりでゐるわけにも行かないでせう？』

『それはさうだ……。小説家などにはことにさうだ。しかし染つて了つて、その心を失くして了つては駄目ですな……。何處までもその藝術家の静けさを保持してゐなくつては——？』

『……………』

友達は何か言はうとして、しかもそのまゝ口を噤んだ。

『それで、あの芭蕉の晩年の心持が尊いんです』私はつゞけた。『曾て私はかういふ提唱をしたことがある。無自覺——自覺——無自覺。つまりその芭蕉の心持といふのは、あとの無自覺、つまり自覺を経て來た無自覺ではないでせうか。何も彼も考へて見た。何も彼もやつて見た。そしてその上で靜かになつた。それが尊いのではないでせうか。』

『さうかも知れませんな』

私もそのまゝ黙つた。私はいろいろなことを考へた。その藝術家の靜けさといふことについては、ことに猶ほ深く考へ續けた。(流行作家になるからいけないのだ。そのために、段々さうした氣持がなくなつて行つて了ふのだ……。社會的になるのだ……。社會に適應する心持が出來て行くのだ……。さうすると、心が汚れる。白くして置かなければならない心が黒く染まる。心が騒がしくなる。それでいけなくなるのではないか)

しかし、何が恐ろしいと言つて、時ほど恐ろしいものはなかつた。私はことにそれを痛感した。社會はまだ出て來ることが出來た。世間はまだ離れて來ることは出來た。しかし時は？
時は？

私は私の姿をそこゝに見た。草鞋を穿いて、着莫産を着て、さびしく並木松の中を歩いてゐる私を見た。山の中の一つ屋で、家も倒れるばかりの地震に逢つて、慌てゝ飛び出して來た自分を見た。また都會のあわたゞしい空氣の中に、將來の成功を夢みつゝ、小さな机を暗い窓の下に据ゑてゐる私を見た。(何でも好い、何でも好い、私は私のするだけのことをする。小詩人であらうが、無名作家であらうが、何でも構はない。自分は自分だけの天分を完うすれば好い)かう言つて机に嘔りついてゐる自分を見た。さうかと思ふと、初めて紅葉を訪ねて、いろいろ話をきかせて貰つて喜んで歸つて來てゐる自分を見た。

『さうだね、何と言つたつて、しまひには言文一致だね。外國の作品のやうになるにきまつてゐるね』

かうかれは言つて、傍に置いてある一冊の本を私に見せた。『これはね、アメリカの友達が送つて呉れたんだがね？ 面白いもんだよ。今、フランスで有名な作家だよ』

忘れもしない、それはゾラの『アベ、ムウレの罪』であつた。

かれは續けた。

『ちよつと読んで見たがね。面白いね。非常に細緻な、レアリスチックなもんだ。さうだね——たとへて見れば』かう言つて、そこにあつた扇を取つて、少し開けて見せて、『かうした鬘つづ、細かい鬘つづの濃淡を一つ一つ書いて見せたやうなものだね……。何とも言はれないね。とても此方では眞似は出来ないね』

私はそれ以前に、ゾラの『コンケスト、デュ、ブラッサン』を讀んでゐたので、それほど驚きもしなかつたけれども、それでもかうしてかれが新しい外國の本に親しんでゐることを面白いと思つた。私はその時分は英文學に一層多く親んでゐて、デッケンスやサツカレイのものな

どに讀み耽つてゐた。私は『ヴァニチイ・フェア』の女主人公の話などをした。やゝ下つてウィルキイ・コリンズのものなども讀んでゐた。

それは忘れもしない、明治二十四年の五月の二十四日であつた。晴れた日で、新緑が美しく、その二階の欄干からは、富士の姿が手に取るやうに見えた。その二階は六疊と八疊の間で、本だの、籐椅子だの、座蒲團だのが混雑ごたごたと置かれてあつた。その時、走りのそら豆の茹でたのを御馳走になつたのを覚えてゐる。そして玄關には泉鏡花氏がゐたことを覚えてゐる。それに、居間には、若い美しい細君がゐた。それもはつきりと覚えてゐる。

しかし當時の大家であつた紅葉山人に取つては、私などは殆ど眼中に置かれてゐなかつたに相違ないのであつた。その後、私はよく玄關拂を食つた。

私はその時分から、そろそろ英文學に離れて、大陸文學の方へと來るやうになつてゐた。よく日本橋や神田の古本屋の店の前に立つて、外國人でなければ新歸朝者の賣拂つたらしい古本を搜した。私の書物に對する考へはまた一變した。漢文・漢詩を賣拂つた金で買つた國文物を今度は外國の小説に代へた。私は段々丸善の二階に行くやうになつた。さうした私の心持の中

にも、絶えず時代が推し移りつゝあるのがわかつた。

時勢の潮流は迅かつた。いつの間にかいろいろなものが出て行つた。山田美妙など、いふ人と共に、その提唱した英文學や言文一致も流れて行つた。それに、政治、軍事などの上でも次第にドイツ派の感化が多く目に立つやうになつて行つた。そしてその間に日清戦争が起つた。今までその門戸をのみ經て入つて來たイギリス風の感化は、そのため、いくらか傍に寄せられたやうになりつゝあつた。鷗外氏のドイツ文學の提唱も、それにつれて、次第に根強く當時の文學青年の頭に入つて行つた。

「矢張、鷗外だね。鷗外はえらいね。しかし、書くといふ方から言へば——小説を書くといふ上から言へば、あの文章ではいかんね？　それはあの文章は旨いさ。漢文學者をも點頭させることが出来るし、和文學者をも點頭させることが出来る。それでゐて、今の若い文學青年をも服させることの出来る外國の新しいトオンを持つてゐる。えらいものさ——しかし、君、小説を書くにはあれでは駄目だよ。とてもあゝいふべダンチックな文章が長持ちするわけではないよ……」かうある時、私の知つてゐる、文壇のことにもよく通じてゐる、後には鷗外氏を正

面に廻して盛に論陣を張つたことなどのあるT君が言つた。

『ぢや、誰だね？』

私は訊いて見た。

『さア誰かね？』かう言つてT君はあたりを見廻すやうにして、『ちよつと見當がつかんね。僕の考では、いづれその中、文體が一致すると思ふが——いつまでも、こんな、今のやうな混亂した形ではゐないと思ふが、それが何ういふ風にまた誰のもとに一致されるか、それはちよつと見當がつかんね……？　しかし面白い問題には問題だ……』

『紅葉は何うだね？』

『さ、あれも賢いからな。さういふところには常に目をつけてゐる。『紫』を見たまへ。『冷熱』を見たまへ。唯の鼠ぢやないよ。しかし、彼奴は惜しいことには、才が邪魔をしてゐる。それに、薄つぺらだ。面白半分だ……。あれがいけない？』

『ぢや、誰だね？もつと若い人達かね？　それとも露伴一葉あたりかね？』

『あんな古い文體が何うなるものかね。露伴も賢いから、いつかはあれをかい捨てゝ了ふだら』

うがね……………。一葉はあれだけだよ。とても延びないよ」

『さうだな。あの文體が將來勝を占めやうとは思へんな？』

かう私も言はずにはゐられなかつた。

『さうだらう？ 君だつて、さう思ふだらう？』T君は考深く、『長谷川があれで、もう少し何うかすると好いんだらうけれど……………』

『うむ、さうだ。二葉亭がゐる！』

私も膝を拍つた。

『彼奴なら、何うにでも出て行かれるんだけれども……………。文體でも、思想でも、學問でも何でも新しいんだからね。ヘツケル、デアウキンあたりまで深く入つて讀んで行つてゐるんだからね……………。さう言へば、此間逢つたら、ロシアの新しい運動の話をしてたよ。先生はあれで中々大きいところに目をつけてゐるんだからな。文學など、いふ小さな區域の中にはじつとしてゐられない男なんだからな。いつでも日露の東方同盟といふことについて立派な畫策をしてゐるんだからな……………。だから、文學の方にもつと出て來たまへつて頼りに勤めて見るけれど

も、何うも駄目だよ。あれが惜しいね……………」

『本當だね』

『この間も、さう言つてゐたつけ……………。トルストイの懷疑は矢張自分の懷疑だなんて。小説なんて、一體書くべきものぢやない。有益どころか、却つて社會に毒を流すよなんて言つてゐたよ。藝術家つて、そんなにえらいものかね！　なんて言つてゐるんだからね。だから困つて了ふよ』

『本當だね』

『それに、絶えず實人生に對して煩悶してゐるからね。他の人達のやうに戲談半分ではないかな。眞劍だからな。それから比べると、硯友社の人達の藝術に對する態度なんか樂なものさ——』

『本當だね。あゝいふ人が本氣になつてやつて呉れると好いんだがね？』

私は本郷にあつたそのT君の下宿を夜遅く暇を告げてお茶の水の方へと出て來たことを思ひ起した。何うして二葉亭なんか本當になつて呉れないんだらう？　あゝいふ作家が出てこそ

明治の文壇は革新されるであらうのに……。駄洒落と軽口と不眞面目とから教はれるであらうに……。しかし、さういふ風に正面に出て来ないといふ心持、藝術をすら疑ふといふ心持、もつと眞面目に人間のしなければならぬものが深山にあるといふ心持、日本は今はそのどころではない、まごまごすれば、亡國の憂目を見なければならぬといふやうな心持、さういふ心持もはつきり理解が出来るやうな気がした。二葉亭の心の煩悶が自分達の考へてゐるよりも、もつともつと深いところに行つてゐることを繰返さずにはゐられなかつた。私はお茶の水に溢つた坂を水道橋の方へと下りた。そして橋をわたつて三崎町の方へと行つた。その時分は、そこはやつと三菱で開き始めたばかりで、まだその半はさびしい原になつてゐた。私は、深い考へに満たされてそこを歩いて行つた。

實行と藝術——それは新興文學に於て、最も深い、最も眞面目な、最も考慮を要する題目であつたが、現に今でもそれがいろいろな人の口によつてゐるが、それが、その眞面目な題目が、二葉亭あたりからその最初の芽を出したことを考へると、不思議な気がせずにはゐられなかつた。二葉亭は作物としてはさう大したものを出してゐるとは言へなかつた。『浮雲』にしても口

シア文學の模倣と言つたやうな缺點があるし、『其面影』だつて、『平凡』だつて、かれの力を、心を、心血を十分にそゝぎ得たものとは言ふことは出来なかつた。その多い翻譯だつて、今日から見れば、明治大正の文學の踏臺として役立つた以上に大したものとは言へなかつた。しかし實行と藝術といふやうな眞面目な問題を日本の文學に提供したといふ形は、後に繼いで起つた人達に取つて忘るゝことの出来ないものであつた。尠くとも當時の文學青年は、かれあたりから眞面目な人生と藝術との交錯した心持を鼓吹された。

否、そればかりではなかつた、かれのインド洋上の死は、さうしたかれの思想の裏書をした。十九世紀から二十世紀の初期にわたつた懷疑思想の純然とした犠牲となつてあらはれた。明治のルウジンと言ふことも出来れば、日本のバザロフといふことも出来た。

九

鷗外と二葉亭の翻譯が當時の文學青年を益したことは一通りではなかつたが、苟も新しい文

學に志すものは、皆なそれに向つて走つて行つた形であつたが、しかしその影響に於ては、兩者各々異るところを持つてゐた。

鵬外の態度には、學者らしいところがあつた。かれはいろいろなことを知つてゐた。當時の文壇には過寛の衣であると言はれるほどそれほどいろいろな知識に富んでゐた。水沫集一卷を見て、いかにかれが學者であつたかといふことがわかるくらいである。かれは寫實主義の文學を紹介すると同時に、理想主義の文學をも紹介した。一方にゾラの實驗小説の理を示すと共に、一方にアンデルセンの作品を翻譯した。レツシングもあれば、クライストもある。オシユツプ・シユヒンもある。アルフォンス・ドオデエもある。ハルトマンの美學の翻譯があれば、フォルケルトの新しい審美説もある。すべてあらゆるものが取入れられてゐる。新しい作者で、めづらしくさへあれば、そのまま持つて來てそれをわが文壇に示して見せると言つた形もある。つまり紹介の爲方が客觀的でそして外面的である。だから、かれの翻譯からかれの主義主張を發見することは出来なかつたと言つて好かつた。かれの翻譯だけ見たのでは、かれが理想主義者であるか、寫實主義者であるか、はたまた自然主義者であるか、それともまた象徴主義者で

あるかはつきりわからなかつた。あれも好いし、これも好いといふ風であつた。何處にも長所があり弱點があるといふ風だつた。恐らくこれがかれのかれたる所以で、又かれの飽まで學者らしい態度を最後まで持した所以であらう。更に言ひ換へれば、それがかれの性格で、教養で、また學問であつたであらう。かれは決して二葉亭のやうに實行と藝術とを考へるやうなことはなかつたであらう。藝術に行かうか、實行に行かうかと煩悶したりなどしなかつたであらう。飽まで客觀的な學者らしい態度を持することを好いとしたであらう。そこに、かれの翻譯の影響と二葉亭の翻譯の影響との差違がある。截然としてある。

従つて鷗外の方からは、知識を得ることは出來たが、深い主觀的方面の感想を得ることは出來なかつた。それに反して、二葉亭からは、ひろくいろいろなことを知ることが出來なかつたけれども、深く入つて行くある氣分を得ることが出來た。鷗外からはさういふ思潮は得られなかつたが、それが何ういふ風に實際と觸れてゐるかといふ點までは、深く入つて行くことが出來なかつた。

であるから、二葉亭に取つては、明治の文壇に馳驅するといふことなどは、丸で念頭に置い

てゐなかつたに相違なかつた。そんなことは何うでも好かつた。もつともつと大切なことがあつた。鷗外が『しがらみ草紙』や『めざまし草』でやつたやうなことには、二葉亭は振向いて見やうともしなかつた。

十

北村透谷のことも、此處等で少しく言はれなければならなかつた。私はかれにもずつと前から注意してゐた。彗星的に現れて、そして彗星的に去つたかれ、かれは作家としては別に大したものも残してゐなかつたが、また作家としてはそれほど大きいとは思はないが、兎に角、一味の眞面目さと眞剣さとを當時の文壇に與へたことは事實であつた。

透谷の蓬萊曲、それと略々同時に高安月郊の『犧牲』といふのが多少の評判になつたことを私は覚えてゐる。それは單行本で、プレインな表装で、自費出版か何かで世に出たものであつたが、當時にあつては、バタ臭いものとして讀書社會からぢき葬り去られた。透谷のものも、

それに近いものとして餘り多くの注意を拂はれなかつた。

透谷は國民派の作家達に近かつたが、しかしそれとはまた違つてゐるところがあつた。議論などはことに旨く、堂々としてゐた。國民派の山路愛山と『人生に涉るとは何の故ぞ』といふことを論じたが、たしかに、そこでは、かれの方が一枚役者が上であつた。新しいものゝ言ひ方をしてゐた。

暫くしてかれの小説が國民之友の春期附録に出た。

私もそれを第一に讀んで見たひとりであつた。それは『宿魂鏡』と呼ばれたものだつた。無論大したものではなかつた。硯友社あたりでは、殆んどそれを問題にしてゐなかつた。『あゝいふ風に西洋かぶれになるから駄目だ！ ちつとも人間が書けてゐはしない！ それに、何うだ？ あの記事の拙さは？ 丸で論文か何か書く氣で小説を書いてゐる！』かういふ風に誰も彼も言つた。技巧の拙つたなさといふ意味では、現に私もさう思つてゐた。

しかし拙いと言つても、何等かの努力と、何等かの暗示と、何等かの新しさを私はそこに認めないわけには行かなかつた。少くともそこには、あゝでもない、かうでもないといふ若い作

家の苦悶があらはれてゐた。否、これから明治文學の出て行かうとする道を示したといふやうな若い作家の矜持があらはれてゐた。

しかし透谷の持つた教養は、さう大したものではなかつた。かれはあらゆるものをイギリス又はアメリカから得た。従つてエマソンなどが主としてその哲學の基礎を成してゐた。大陸文學の影響は何處にも認められなかつた。

それから比べると、前に言つた『犠牲』などの方が一層新しさを持つてゐたやうに私には思はれた。

しかし、何を措いても、かういふことだけは言はれた。透谷にしる、月郊にしる、何うかして新しい文學を打建てたい、今までのやうなものでないものを打ち建てたい……。たとへ、それは失敗に終つても、さういふ風に微かな芽のやうなものでも出して置きさへすれば、あとからつゞくものがある。蛇度ある。かういふ風に意氣込んでゐた形が面白い。その後、私は『透谷全集』を手にした。そしてそのかれの残した日記を見た。私はいろいろな感に打たれずにはなかつた。

その日記に書いてあるさまざまな着想、計畫、暗示、それを見たゞけでも、その文壇の渾沌時代に生れていかにかれが苦しんだかを知ることが出来た。またいかに懊惱憂悶を重ねたかを知ることが出来た。またいかにかれが奇思縦横な若い詩人であるかを知ることが出来た。またさうした空想に富み、發想に富み、計畫に富んだかれが、いかにその時代の文壇に不釣合であり、不恰好であつたかを知ることが出来た。尠くとも十年後であつたなら、かれも必ず文壇に認められたであらう。あのサンボリカルな奇想をも世にあらはすことが出来たであらう。惜しい才であつたと言はなければならなかつた。

それから宮崎湖處子といふ作家があつた。これは國民派のひとりで、『國民之友』や『國民新聞』に據つて、八面樓主人の名で、後には批評の筆を揮つたりしたが、この人も透行と懇意で、よくそのことを私に話した。かれは言つた。『だつて、あの男は、とても現世の才ではないよ。現世で容れらるるのには、もう少し濁つてゐなくつてはね……。あんまり綺麗すぎるからね。たとへて見れば、金かプラチナのやうなもんだからね。銅や鐵とは一所にはゐられないよ』

『それにしても、鷗外や二葉亭なんかは、透谷に對しては、何う思つたもんだらうね』

ある時、Kは私に言つた。

『さ、矢張、あまり面白いとは思はなかつたらしいね……。何でもわる口を言つてゐたやうだつたね？』

『しかし、さうした芽だけでも認めさうなものだがな——』

『いや——あとから考へれば、さういふ風に思はれるけれど、鷗外だつて、二葉亭だつて、その當時にあつては、さうはつきり文壇の前途を見てゐたといふわけでもないんだからね。矢張、あの人達だつて、親友社の創作をわるくは思つてゐなかつたんだからね』

『さうかね』

『それに、透谷は二葉亭や鷗外とは、丸で教養が違つてゐるからね。一人はロシア文學、一人は大陸文學だからね。それに引かへて、透谷はクリスチャンの方面から來たイギリス——むしろアメリカ風な教養だからね？』

『同じ新派でも、派が違つてゐるわけだね？』

『さうさう……』

『文學界の連中がその影響を受けてゐるのかね?』

『さ、それもちよつと考へもんだね。島崎君は透谷の影響を受けたやうに言つてゐるけれども、それは態度などのことで、内容は丸で違つてゐるやうだね?』

『他には——』

『外にも、文學界の連中には、誰も透谷の脈を引いてゐるといふものもないやうだね?』

『馬場君は?』

『あの人は何方かと言へば、大陸文學のチャキチャキだつたからね。新しい方へ、新しい方へ
と行つた方だよ。エマソンの哲學なんか持つてゐるやしないよ』

『平田君は?』

『あの人や戸川君は、今では英文學の權威だから、まア血統がつゞいてゐるといふかも知れな
いけども、透谷とは違ふやうだよ。内部に於ては、別に透谷の感化を受けてはゐないやうだ
ね?』

私はかう言つたが、『しかし、眞面目な態度とか若い新しい態度といふやうなところは、皆な受け繼いだといへば受繼いだわけだらうね？ 兎に角、北村透谷は明治の文壇では忘れることの出来ない人だね。たしかに本當の芽を蒔いたものゝひとりだね？』

十一

かういふ *"Stimm und Druck"* の中に、齋藤綠雨のやうな人のゐたことも、特記しなければならぬことであつた。

それは透谷などに比べて丸で正反對の方面に立つてゐると言つても好いやうな人であつた。かれは假名垣魯文の弟子であつたか何うか知らないけれども、兎に角、さうした前世紀の作者の群の中の一人で、明治十九年頃に、江東みどりの名で今日新聞といふ新聞にその小説を掲げてゐた。

しかし、さうした閱歴を持つた人としては、随分才子でもあり、また辣腕家でもありして、

比較的後までも文壇的聲名を保持してゐることが出来た。明治二十七八年頃には、『何と言つても、緑雨は大家だよ。もう紅葉や露伴にもひけは取りはしないよ』こんな風に言はれてゐた。

しかしかれは新しい教養の何物をも持つてゐなかつた。外國語の知識も殆ど皆無と言つて好かつた。唯、かれは文壇を游泳することに熟してゐた。かれは關外の處へも行けば、露伴のところへも行つた。紅葉のところへは、餘り歓迎されなかつたけれども、それでも一度や二度は行つたことがあるに相違なかつた。かれと一葉とのことは、一葉の日記を見れば、はつきりとわかつた。

江戸子氣質の面白い人だといふものもあれば、あんな道聽途説家はない、減多なことは言はれない、此方でそんな氣でなしに言つたことがすぐ向うに行つて何んな形になつてあらはれるか知れやしないなどいふものもあつた。毀譽區々で、何れが本當だかわからなかつたけれども、尠くとも何方かと言へば、こゝも、てのする方であつた。正太夫と言へば、判るところで警戒された。ことに、硯友社方面では、かれに對して非常な悪意をすら抱いてゐた。『一體、たちがわるいやね！ 何しろ教養が教養だからね』こんな風に紅葉なども言つた。

かれは車であちこちを訪問することを毎日の業のやうにしてゐた。それは一葉の日記を見てもわかるが、さういふ風に人を訪問して、三時間も五時間も、場合に由つては一日も車を待たせて、長く長く話し込んで行くのであつた。そしてやれ紅葉が何うの、露伴が何うの、千駄木が何うの、早稲田が何うのと言つては、此方で得たところのものを向うで話し、向うで得て来たものを此方で話すといふ風で、滅多に人の知らないやうなことをもよく知つてゐるばかりでなく、雑誌や新聞などの消息もよく知つてゐて、今度の夏は誰が『國民之友』に書くとか、あんな奴が書くなら、俺のところにも頼みに来たけれども俺は書かぬとか、やれ何うしたとか、かうしたとか、いろいろなことを言つてゐた。それに、よく人の文章や歌や詩の口眞似などをやつて、場當りを取つて、そして喜んでゐた。たしか關根正直の歌に、『松原をつはらつはらに見つゝ、行けば松原かくれ桃の花さく』といふのがあつて、それが落合直文だの小中村義象だの、歌と並んで新聞の歌壇に出たのを、それをちぐつて、『金つばをつばらつばらに見つゝ、食へば、金つばがくれあんの香ぞする』とやつたりした。新體詩見本など、言つて、新詩人の詩を罵倒したりした。

かれが死んでから、五六年も経つた後で、私は生前かれと親しくしてゐたHに訊いた。

『一體、何ういふんだね？ あの人は？ あの人のいろいろな言はれる人はないがね？』

『君も逢つたことがあるかえ？』

『あるにはある』

『何んな感じだつた——？』

私は却つてHから反問された。

『さア、何んな感じつて、別にわるくもなかつたがね？』

『何ういふ場合だつたね？』

『それはね、不思議なことがあるんだよ。僕と先生と合作で、僕の書いた小説を北海道の新聞に出したことがあるんだよ』

『ふむ、それはめづらしいね？ 花袋緑雨合作？ それはめづらしい？』かう思ひもかけないことをきいたといふやうにして、『向うから來たのかね？』

『逢つたのは、僕が本郷のあの登岐殿坂上の下宿に訪ねて行つたと覚えてゐるね。佐々醒雪が

中に入つてね。六十回ぐらゐ出たよ』

『ふむ、題は何と言つたね?』

『朝月夜』

『ふむ、そいつは面白い……。それで金は呉れたかね?』

『呉れたよ』

『ふむ——』と言つてHは考へて、『なアに、先生だつて、そんなにわるい男ぢやないよ』

『それはさうだと思ふんだがね?』

『先生、矢張、孤獨でさびしかつたんだな? 兎に角、書くものだつて旨いし、あの當時では一流だアね。それに、世の中のことも知つてゐる。世間にも深く浸つてゐる。だから、紅葉や硯友社の書くものなんか甘く見えて爲方がなかつたんだね。紅葉が「三人妻」で藝者や妾を書く、大に笑つたもんだアね。眉山のものだつて、あんな時に小唄なんかと出るもんかかつてゐたことがあつたよ。そしてそれをツケツケ言ふから、自然皆ながら嫌はれるやうになつたよ。それはね、ある人に言はせると、悪辣なところがあるやうに言ふけれども、それはひど

い目に逢つたからで、小説家と言はれるほどの人だもの、聰明は聰明だつたからね。馬鹿々々しいことを人がやつてゐると、ついからかふ氣になると見えるんだね。しかし、先生の得意の時代は、さう長くなかつたね。國會新聞に入つてゐた時分が、あれで一番得意だつたんだらうね?』

『何でも、縁雨をつれて、柳橋あたりを遊んで廻つた人があつたんで、それで、いくらかあつた社會のことも書けるやうになつたんだつてね?』

『さうだよ。先生をとり巻きにつれて歩く金持が居たんだよ。先生、自腹で遊んだわけぢやないよ。先生の家はね、藤堂家の家來でね。本所の縁町に居たんだよ。貧乏士族で、金なんかありやしなかつたからね』

『さうかね』

『晩年は氣の毒だつたよ。小田原に行つて、小杉天外を對手にして、自から先生振つたのなどは、考へれば可哀相なところもあるけれども、兒戯に類するよ。天外もまたわるいんだ。その時分、金があると言つて、何も見せびらかすには當らないんだよ。天外を拾ひ上げてあれまで

にしてやつたのは緑雨だからね。』

『それはさうだ……。「改良若殿」でも、「蝶ちゃん」でも、皆な緑雨の奨励に由つて書くやうになつたんだからな。何でも合作もあつた筈だ』

『まあ、しかしかういふ氣はするね。あの人以後にもう再びあゝいふ人はこの世に出て來ないといふ氣はするね』且は深く考へるやうにして、『矢張、江戸時代の生んだ最後の一人といふわけかな。前川に行つて、財布から一兩出して、「姐さん、鰻をこれだけ焼いて呉れ」と言つた話は、有名な話だが、あゝいふところは、江戸子の特徴として、ちよつと面白いね。でも、晩年はもう衰れだつたよ、吉原の小店にまで入つて行くやうになつたからね……。たしかに江戸の最後の一人だよ』

『ふむ、面白い——』

私がかう言はずには居られなかつた。

『それで、先生、自分の作で何が得意だつたね?』

『「かくれんぼ」が得意だつたね。それに、一番終ひに書いた「門三味線」——』

『門三味線』なんか大したもんぢやないね。それにあれは未完だ……』

『あんまりこりすぎて、書けなくなつちやつたんだ。何アに、書けば書けるがね、それよりも短文でも書いて居る方が樂で、そしてお先さまでも喜んでその方が好いつて言つて下さるんだからね……なんて皮肉を言つてたことがあるよ』

『面白いな』

兎に角、新しい芽がこれから出て行かうとして居る時代に——若い才能がそれからそれへと頭を出しかけて居る時代に、次第にその巴渦の中に、またはきほひの中にその影が薄くなつて行つたやうなかれが面白かつた。ドイツのハイネが巴里で死んだ時のことなどがそれとなしに思ひ出された。

しかし、あの緑雨にしても、時代があゝでなかつたならば——まだ文體すら碌々きまらないやうな、または和洋漢の三つの文化が何方に行つて好いかわからないやうな交錯をつゞけて居るやうな混沌とした時代でなかつたならば、もうすこしその持つたものを世に残して死んで行くことが出来たであらうと思はれた。かれも矢張、透谷、二葉亭などゝ同じやうに、その持つ

たものを一分に發揮することが出来ずに死んで行つたひとりであつた。

それは何うしてわかるかと言ふのに、晩年に『新著月刊』といふ雑誌の求めに應じて、戀愛といふことについて話しをしてゐる。その話がいかに面白い。深く且つ辛辣である。かれもあそこまで行つたのかと思はれるやうなところがある。あれでもう少し落附けば——文壇の外に流されるなど、いふことを氣にせずに落附いて書けば、西鶴とは形がちがつても、あの壘を摩すほどのものが屹度出来たらうと思はれる。かれに比べては、紅葉の戀愛觀などは甘いものであつた。成ほどあれではかれが笑つたのも理由があると思はれた。

少くともかれは男女のことにかけては、餘程深く入つて行つて居たところがある。あれを言ふには、さぞいろいろな經驗をしたらうと思はれるやうなところがある。皮肉ではあるが、千古不易の男女の悲劇に深く入つて行つてゐる。あの頭で、何うしてあんな『かくれんぼ』や『門三味線』などを得意にしてゐたらうと思はれた。また、『みだれ箱』にある輕口か落語のやうなものを書く氣になつたであらうと思はれた。矢張、それは時代の罪ではなかつたか。あゝいふものを喜ぶ時代の罪ではなかつたか。否、さうした時代や社會にあまり重きを置きすぎたかれ

の過誤ではなかつたか。

十二

その時分に於いての小説の中心は、何んと言つても紅葉を盟主にした硯友社であつた。柳浪、水蔭、小波、眉山——中でも眉山と水蔭とが望みを囁かれて居た。柳浪は何方かと言へば、硯友社の正系ではなく、客分と言つたやうな形であつた。『黒蜥蜴』『變目傳』など、いふ、何方かと言へば暗い感じのするものを書いた。紅葉もかれには一目を置いて居るといふ風であつた。『廣津はあれで藝が枯れて居るからね。役者で言へば、ちよつと團藏といふところだね。ちよつと眞似は出来ないよ』こんなことを言つたのを私は聞いたことがあつた。眉山も美しい、派手なものを書いた。『白藤』『賤機』などを書く時分には、かれも中々評判が好かつた。

水蔭は一種獨特の調子を持つて居た。短かいものが巧かつた。尠くともかれの集中には、今日讀んでも面白いものが五六はあるであらうと思はれる。惜しいことには、かれには芝居氣が

あつた。あまりに草双紙風な誇張と叙述とがあつた。それに、社會との接觸が次第にこれを低級にして行つた。『泥水清水』あたりから、次第にかれば下り阪になつた。

それに、硯友社の強味は、出版業者との堅い結托であらねばならなかつた。當時、出版界に於て有力者と言はれた春陽堂、博文館、すべて硯友社の自由になつた。紅葉が頭を横に振れば、何んなにすぐれた作家も、本を出版することが出来ないやうになつてゐた。従つて當時の文學青年は、その實に於て、またその氣分に於て、甚だ硯友社と相容れないものまでも、皆な紅葉の幕下に赴くやうになつて行つた。

この時分に於ては、早稻田ももうかなりに發展してゐた。その持つた『早稲田文學』は、千駄木の『しがらみ草紙』と優に相對抗した。坪内氏も決してその沒理想の疊を徹しなかつた。英文學とドイツ文學の對抗を私達ははつきりそこに見たやうな氣がした。

早稻田では、第一期に金子馬治が出て天才論を書いた。第二期には島村抱月と後藤宙外とが出た。宙外はその卒業論文に『紅葉論』を草した。これがかれの後になつて硯友社に近寄つて行く動機のひとつとなつたのであつた。

紅葉はその時分は『紫』だの、『冷熱』だのを書いてゐた。かれは尠くとも『三人妻』に行つて一轉した。とても、こんなものを書いてゐては駄目だ……といふやうにかれは考へたらしかつた。次第に時代は移りつゝあつた。新しい芽はそこにも此處にも萌え出した。聰明なかれは、逸早く新機軸を出さうと心懸けた。

かれはこの時分、ゾラからモウパッサンのものなどを讀んでゐたらしかつた。それは無論、何の點まで深く讀み入つてゐたかは知れなかつたけれども、よく『ピエル、エ、ジャン』の話をしたことなどを覚えてゐる。また次のやうなことをも言つた。

『あゝいふライト、タツチで書くやうになれば、それはもう大したもんだけれども、そこまで行くのが中々大變だからね——。ちよつと眞似は出來ないよ』

しかし、文壇の中心になつてゐるグルヴは、決して新しい芽を多分に持つてはゐなかつた。多くはコンエンシヨナルであつた。文章とか文體とかでなければ配合とか色彩とかに力を集中して、決して深い人間性の中まで飛び込んで行かうとはしなかつた。さういふ方面に入つて行くのは、却つて藝術の神聖を冒瀆するものであるとさへ思はれた。それに、今日と比べては、

黨をつくるといふ風が盛であつた。硯友社、早稻田派、千駄木派、根岸派、國民派など、いふ區別があつて、皆なてんでに、雜誌や新聞かに據つて頼りに氣焰を擧げてゐた。

十三

〇氏の子息の結婚披露會に出かけて行つた私は、思ひもかけず大橋乙羽氏の未亡人に出會した。

『おや！』

『や…………おめづらしい』

かう言つて私は椅子から立ち上つた。私は昔の眉と眼と特色ある口とをそこに發見した。そのやさしく心勞深いやうな笑顔を發見した。しかしその間には、既に二十五年近い月日が流れてゐた。

『本當にお久振りでした……………』

『本當ですな……、しかしいつもお變りなくて結構ですな——』

『いゝえ、もう年を取つて了ひましてねえ！』

『それはもうお互ひですよ』

こんな話を取り交したが、しかしそれ以上に、何を言つて好いか、何を話して好いかわからなかつた。

私は小石川の植物園と坂を一つ隔てたずつと中に奥深く入つて行つたやうな二階屋の一室を思ひ出した。私はそこでよく乙羽氏と話したし、この未亡人とも話したのであつた。

『尾崎さんには、滅多にはお逢ひになりませんか？』

『え、滅多に——』

『お變りはないんでせうね？』

『別にお變りは——』

私は紅葉の未亡人からつゞいて構牛の未亡人を思ひ出した。

私はその時分を思ひ出さずにはゐられなかつた。そこに、その大橋乙羽の二階に泉鏡花がゐ

た。太田玉若がゐた。西村眞次がゐた。乙羽氏はよくさうした文學青年を世話してゐた。

作といふものゝ上から、また藝術といふものゝ上から考へて、乙羽氏などはさう大して立派な業績を残したといふほどではなかつたけれども、しかも文壇と出版書肆との間に立つて、ある圓滿な理解者として役立つことは争はれない事實であつた。それに、且館の理事となつてから、一層かれの勢力は加つてゐた。當時の文壇の人達は皆なかれのもとに原稿を持つて行つた。

私は乙羽氏のことから、樋口一葉のことなどを思ひ出した。一葉のゐた福山町は、そこから遠くなかつた。乙羽もよく一葉のことを話した。

乙羽氏などが今生きてゐたら………と思ひながら、私は多勢の人の中にその姿を没して行く未亡人の姿を見送つた。

紅葉の名を擧げたのが、明治二十四年、それから全盛時代が明治二十七八年、二十九年から三十年になると、社會の狀態と共に文壇も一變して、所謂『新しい時代』が次第に頭を擡げ出して來てゐた。

この間に、日本が世界的になるについて非常に有効であつた日清戰役があつた。その戰爭は、最後に三國干涉などがあつて、何方かと言へば、結果は思はしくなかつたやうな形もないではなかつたけれども、兎に角、それを境界線にして、いろいろな草がそこそこ、に芽を吹き出した。もはや日本は以前のやうにいつまでも島國的ではゐられなかつた。もつと深く外國の文化の精神に觸れなければならなかつた。本當の覺醒が必要になつた。

紅葉が、否、かればかりではない、露伴も、綠雨も、鷗外も、そのあとに新しい時代が靜かに巴渦を巻きつゝあるのに氣のつき始めたのは、尠くとも明治二十九年頃であつたであらう。かれ等は次第に暗々裏にその新しい時代の壓迫を感じ出して來た。

『新しい作家が出て來たね。しかし、その重立つたものは、家のものか、家に始終出入りするものだからね』

かれはある日こんなことを私に言つた。

『早稲田の方からも出やしませんか？』

『いや、早稲田は、作家が出るには、ちよつとあひ間がある。あそこは作家気分ではないからな。文學を學ぶには好いところだけでも、作者になるには、ちよつと具合がわるい……。現に、坪内君もさう言つてゐた。君の方は、筆の立つものがゐるで羨しいつて……。』

『宙外が書くでせう？』

『後藤はまア、いくらか書くには書くが、何うもまだ磨きが出来てゐないからな』

紅葉の腹では、何と言つても、自分の弟子の泉鏡花や小栗風葉や柳川春葉の方が、それは本式の學問はないが、筆の方ではすぐれてゐると思つてゐたのであつた。

新進作家といふ名目が出来て、鏡花や一葉が躍然としてその頭を擡げたのは、たしか二十九年の春の國民之友附録あたりからだと思ふが、それと殆ど時を同うして、千駄ヶ谷から、例の『めざまし草』が生れ出した。

尠くともこの『めざまし草』は、大家達の新しい時代に對する防禦運動であつたに相違なか

つた。

『さうかね？ あれがさういふ運動かね？ 成ほどさう取れば取れないこともないね？』

K氏は言つた。

『少くとも——その當時には、意識してゐたかゝるないか、それははつきりわからないけれども、兎に角、それに近い一種の壓迫を感じて、そしてあの雑誌を出すことになつたんだね？』

『さう言へば、成ほど、『めざまし草』は、馬鹿に新進作家を目の敵にしてゐた形はあるにはあるね？』

『あるところぢやないよ。あの「三人冗語」とか、「雲中語」とかいふものは、皆な對新進作家ぢやないか？』

『さうだね？』

いろいろなことが私には思ひ出されて來た。樗牛、桂月などの新運動も、千駄木派に取つては、恐ろしい新しい芽であらねばならないのであつた。

私は言つた。

『でも、不思議なもんだね。ある時代はある時代と通じないやうなところがあるんだね。新しい時代は新しい時代でなければいけないんだね。前の時代の作家や批評家では通用しないといふやうなわけだね？』

『そこが面白いね。それがあつて、新時代つていふことも成り立つて行くんだね。さうでなくつては——いつまでも前の時代がついて行つてゐるのでは、あとの時代のものがたまらなからね。うだつがあがらないからね？』

『本當だよ……。それに、前の時代とあとの時代とでは、丸つきり通じ合はないやうなところがあるね。あれはわざとあゝしてゐるのか何うか知れないけれども、新時代の作者や批評家は、決して前の時代の大家を眼中に置かないからね？』

『不思議なもんさな』

Kはさもさも深く感じたやうにして言つた。

『矢張、暗々裏に、利害の觀念が働いてゐて、自分達の時代は自分達で同盟しなければならぬ。同盟して、一刻も早く自分達の時代にしなければならぬ。かういふ風に思つてゐるんだ』

ね……？　そしてかれこれ言つて、自分達の時代にする。もうすっかり自分達の時代だ……。かう思つてほつと呼吸をついてみると、もうあとから自分等に取つて代るべき新しい時代がそろそろ首を出しかけてゐるんだからね。何うも爲方がないね？　何しろ、『めざまし草』だつて、新しい時代は何うすることも出来なかつたんだからな？』

『あのあとは、何んな風になつて、おしまひになつたつけね？』

Kは訊いた。

『何んなつて、何でもないさ……。連中がいくらやつても効がないので、しまひには倦きてやめて了つたアね。つまり、新時代には、何うしたつて對抗出来ないことを、あの雑誌が裏書したやうなもんだよ』

『さうかね』

Kは手を拱くやうにした。

それにしても、あの『めざまし草』の合評といふものは見事なものであつた。今日あれを見ても、よくあれまでやつたものだと思はれた。苟くも新進作家といふ作家はすべてやられた。

何んなものでもやられた。褒め立てられたのは、樋口一葉ひとりぐらゐなものだつた。中でも私などは、最も多くその槍玉に擧げられたものであつた。今でもその時代のことを知つてゐる人達は、『しかし、君はよく忍耐しましたね。大抵なら、怒つて、筆なんか焼いて了つたでせうね！』こんなことを私に言ふものもないではなかつた。

橋牛は明治二十八年頃から斬然としてその頭角を擡げ出した。たしかにかれは天才であつた。立派な筆をも持つてゐた。かれは大膽にあらゆるものに向つて批評を試みた。最初は文壇の事情に通じてゐなかつたために、大分わきに外れたやうなことを言つては笑はれたが、次第にさうした弱點は除れて行つて、後には、誰も抵抗の出来ないものとした鷗外にさへ向つて行つた。ハルトマンの美學をも攻撃した。早稻田の坪内氏とも、歴史について争つた。

かれも新しい芽の一つであつたには相違ないが、二葉亭や透谷のやうに、深く精神の奥にまで入つて行つたものではなかつた。ロンアやフランスの藝術觀とはかなりに遠い距離を持つてゐた。何方かと言へば、通俗にわづかに一步を進めたほどのものであつた。

しかし、さういふ程度のものゝ方が却つて辯難攻撃には便利であつた。かれは『太陽』を舞

臺にして、いろいろなものに喰つてかゝつた。ことに、紅葉に向つての非難は、かなりに手厳しいものであつたのであつた。

それといふのも、いろいろなことがあつたらしかつた。紅葉の家に牒牛が出かけて行つたら居留守を使つて逢はなかつたとか、何處かで逢つたらえらく侮辱されたとか何とかいふ噂があつたが、それはかりでなしに、紅葉はあちこちから攻撃されるやうな形になつてゐた。『國民之友』の批評家八面樓主人なども毎號のやうにかれのわる口を言つた。

『もう紅葉でもあるまい』かういふものもあれば、『紅葉はもう想が枯れた。材料がなくなつた。その證據には、此頃書くものは、皆な外國の通俗小説から翻案して來たものばかりぢやないか』こんなことを言ふものもあつた。大家が當然受けなければならぬ攻撃の矢は、今やかれの身の周圍に蝟毛のやうに集つて來たのであつた。

實際、今日から考へて見れば、それも無理はないのであつた。紅葉の作品——それもかなりにあるが、それは多くはその努力が第二義的のものにのみ集中されてゐるのを私達も見遁すことは出来なかつた。かれの小説は、文章の巧いのと、筋の巧みなのと、人情的なのと、場當り

の多いのと、色彩の濃かなのとで、多くの人に愛讀されたけれども、もつと骨を折らなければならぬところ、即ち深い心理とか、魂の動搖するやうなところが、さういふ本當の、第一義的のところには、決して指を染めなかつたのである。否、その深く入つて行かずに、低級に人情的に留つてゐたところにかれの評判はあつたと言つても好いくらゐであつたのである。

しかしかれはそこに氣がついてゐるのではなかつた。また次第に時代の移りつゝあるのも心を痛めてゐるのではなかつた。で、かれはもう一度、いちかばちかの運試めしをやらうと思つた。かれは全力を擧げて『多情多恨』を書いた。

十五

『多情多恨』は失敗の作ではなかつたけれども、またその大きな努力は、今でも多少は買はれるべきものであつたけれども、しかも當時の新しい空氣を満足させるには足らなかつた。

此處に、私は寫實といふことに就いて、少しく言つて見なければならぬ。寫實は明治文學

の最初の旗幟と言つても好いものであつた。そしてその影響は、日本的に三馬西鶴あたりからも來てゐれば、ロシアのゴンチヤロフあたりからも來てゐた。フランスのゾラあたりからも入つて來てゐた。何でも實際から題材を得て、そしてそれを小説にまとめなければ駄目であるといふ風に思はれてゐた。

しかし、その寫實といふことにも、非常に變遷があつた。程度があつた。小説といふことに拘泥しすぎてゐたために、眞に迫るといふことが重きを置かれてゐたにしても、あとで言はれたやうな第一義的には思はれてはゐなかつた。寫實でも面白くなければいけないといふ風に思はれてゐた。

何と言つても書くものは小説である。いくら本當のことが好いと言つても、いくら寫生でなくてはならないと言つても、面白くないものでは、それを筆にしたところで効がない。面白ければこそ寫生も生きて來るのである。人を惹きつける興味があればこそ寫實も寫實の興味を成すのである。かういふ風に誰も彼も思つてゐた。従つて寫實と言つても、皮を一枚も二枚も被つたものであつたのである。

『多情多恨』を見ると、さういふところがよくわかる。自家の米の飯だと言つて、生一本の寫實主義を標榜して居ながら、面白く書いたために、または面白く人に見せるために、骨を折つて作者は書いてゐるのである。却つてさうしない方が好いものを、自然に近く見えるものを、わざわざ骨折つて、それに遠く且つ疎くしてゐるのである。つまり寫實主義と言つても、本當のものでなく、三馬京傳あたりから脈を引いてゐる軽い寫實の弊に陥ちて了つてゐるのである。

例を挙げれば、あの柳之助が葉山に伴れられて、待合に行く條があるが——あそこなどいかに作者が讀者を喜ばせるために腕を振つてゐるか、わかるが、また實際から言つてもあれだけ書くのは並大抵では出来ないとは思はれるけれど、しかし、本當から言へば、あんなことは何うでも好いのである。それほど重きを置くには足りないのである。またあゝいふ風に書いた、めに、却つて眞を失つて了つたやうな形になつてゐるのである。そこを録雨などはキザだとも、甘いとも言つてゐるのである。

それに、柳之助にしても、葉山にしても、わるく誇張してある。面白くするために誇張してある。實際に柳之助のやうな人間や煩悶があらうとは思はれない。また葉山のやうな人物があ

つたにしても、あれだけではあるまい。もう少し眞面目なところが、何處かに、何んらかの形を以てあらはれて出て來てゐなければならぬ。あれではあまりに作者が人物をおもちやにしてゐる。

それはしかし『多情多恨』に限らなかつた。他の人達の作品にも、さういふものが澤山にあつた。水蔭のには無論それが多い。眉山のにもある。柳浪のにもある。二葉亭のにも、それがないとは言はれない。つまりその當時の文壇では、寫實主義といふものは、あゝいふものだと思つてゐたのである。

それから思ふと、フランスのレアリズムなどは非常に趣を異にしてゐる。もつと根本から出立してゐる。全く客觀的にすらなつてゐる。

であるから、それにあきたらない正岡子規の連中が、外國から歸つて來た畫家のデッサンやスケッチの手法を文章の方に移して、あの「ほととぎす」の寫生文を始めたのである。そして本當の寫生は此處から入つて行かなければ駄目であると言つてその例を示したのである。

しかし、寫實主義といふことも中々難かしい。いろいろに言へる。全く主觀の色を持たない

のが本當だとも言へれば、主観がなくては成立しないとも言へる。ゾラのやうに、それを爬羅剔抉の方に持つて行つたものもあれば、ゴンクウルのやうに全く純に、無数の材料を積み上げたやうなものもある。かと思ふと、そのくらゐの迫眞の度数では満足が出来ないで、あのドイツの徹底自然主義あたりまで行つたものもある。その主義に由ると、音をも響をも色彩や心と同時に、つきりと描き出さうといふのである。

それに、同じレアリズムでも、國に由つて非常に差違があるやうである。現に、ロシアのレアリズムは、フランスやドイツと非常に違つてゐる。それはゴンチャロフとゾラを比べて見ればわかる。ドストイェフスキイとアルノオ・ホルツとを比べて見ればわかる。また、イギリスあたりでも、寫實主義と言ふことを言つてゐるが、これも亦非常に違つてゐる。トオマス・ハアデイの作とゾラの作とを比べて見れば、その違ひはひとり手にわかる。であるから、日本に紅葉のやうな初期のリアリストがあるのも、文學史的には面白くないことのないのである。

硯友社の中では、柳浪が一番深味のあるレアリスチックテンデンシイを見せてゐたが、名聲が高くなつて行くにつれて、段々それがわるくなつて、後には會話で筋を運ぶやうになつた。

否、その形だけが寫生で、實は少しも寫生でないことが段々讀者に看破されて來た。

しかし、かうした寫實に對して、一方理想主義を標榜したものはないでもなかつた。それは誰かといふに、露伴が即ちそれである。かれは『新浦島』など、いふわからぬものを書き、つゞいて『風流微塵藏』を五六冊出し、最後に、『天うつ波』を書いた。『夜の雪』など、いふ寫實派に近いものもあるにはあつたけれども、概して理想派と言はるゝやうなものが多かつた。かれの作中の主人公は、多くは天才か、名人か、でなければのつそり十兵衛のやうなものが多かつた。つまり顯村を實人生から取つて來るといふよりも、作者の胸中に先づ人物が出來て、そしていろいろなものをあたりから集めて來るといふ風であつた。硯友社の人達のやり方とは全く違つてゐた。さういふ意味から言へば、その『五重塔』は紅葉の『多情多恨』と好い對照をなしてゐると言つて好かつた。

それにしても思ひ起されるのは、紅葉と露伴と並んで文壇にその名聲を馳せた時分のことであつた。たしか明治二十三年のこと、思ふが、讀賣新聞がこの二大流行作家の作品を同時にその紙上に掲載する旨の廣告を出したことがあつた。それは紅葉は『伽羅枕』を書き、露伴は『ひ

『ひけ男』を書くといふ廣告であつた。満都の人氣は湧き立つた。誰れも彼も皆な讀賣新聞を購讀した。

その時分、私はまだ若かつた。二十一か二であつた。その廣告を見て、何んなにそれにあこがれたであらうか。何んなにそれを期待したであらうか。やがて『伽羅枕』と『ひけ男』とが並んで出た。

『伽羅枕』も面白かつたが、それ以上に『ひけ男』が面白かつた。満都の評判になつた。矢張、露伴の方がえらいといふ聲が高かつた。しかし暫くすると、露伴は赤城の山中にかくれて、全くその稿を絶つて了つた。世間では何んなにそれを惜しんだであらうか。何でもそれを促す手紙が毎日數百通も新聞社の記者の机上にやつて來たといふ話であつた。後年、露伴はその『ひけ男』を完成して、單行本として博文館から出した。武田の長篠役を取扱つたもので、ちよつと特色に富んだものであつた。

紅葉が『多情多恨』を書く時分には、露伴はもう多く書かなかつた。かれは春陽堂の『新小説』に入つて、それに新進作家を迎へることにつとめた。水谷不倒の『鏑刃』を第一編として、

いろいろな作家のものが出て行つた。小栗風葉の名の世間に知られて行つたのも、そこに出した『龜甲鶴』の評判が好かつたからであつた。

十六

一葉の短かい一生も、明治文壇では特異なこと、しなければならなかつた。私は幸にしてか、不幸にしてか、一葉には逢つたことはなかつた。しかし、あながち縁故のないことはないのであつた。私が一番始めに『都の花』に「新櫻川」といふ作を發表した時、かの女も「うもれ木」といふ作を花圃女史の紹介つきで始めてそこに出してゐた。『都の花』の當時の編輯人であつた藤本藤陰を私が始めて神田の仲猿樂町に訪ねた時、藤陰氏が、『面白い女の作家が生まれましたな……田邊さんからの紹介ですが、めづらしく男らしい作家です……。女とは思へないくらゐしつかりした文章です』と言つたことを今でも私は覚えてゐる。

當時の新興文藝の芽としては、かの女は決して新しいとは言ふことは出来なかつた。その教

養も全くお嬢さん風と言つて好かつた。かの女は矢張歌の會に出て老人などに交つて歌を詠んだりしたものの、一人であつた。恐らくかの女にして、もう少しその周圍に新しいグルウブを持つてゐたならば、もう少し新しい方に出て來ることも出來たであらうが、桃水などをその師にしたゝめか、それともまた、あゝした古い文體に興味を持つやうな氣分であつたのか、あゝした若い心をあの不自由な文體の中に埋め盡して了つたのは惜しいやうな氣がした。

かの女が文壇に知られたのは、明治二十七八年の頃で、『濁江』だの、『たけくらべ』だのを出してから、急にその文名は高くなつて行つた。何方かと言へば、『めざまし草』の大家連に持上られたゝめ、そのため一層名高くなつたといふ形があつた。それに、『めざまし草』の褒め方も、何か他に原因があつたやうに私は聞いてゐた。

それに、不思議なことには、あの時代になつても、あゝした雅俗折衷の文體がかなりに當時に勢力を持つてゐたといふことであつた。それはまさかにあの文體が將來の文體になるとは思ひもしなかつたであらうけれども、露伴が書き、一葉が書き、綠雨が書き、後には、鷗外すら物好きにあの眞似をして、『染ちがへ』などゝいふのを書いたくらゐであるから、あゝした文體

もかなり、同時に持て囃されたには相違なかつた。しかし國木田獨歩などは、その頃からさうした文體の不自由なのを説き、何うしてあの若い一葉があゝした文體に頼つたかと訝つてゐた。

私は『濁江』ではさう感心しなかつたが、『ゆく雲』あたりに行つて、次第にそつちへとへ寄せられて行つた。あの『ゆく雲』の結末などは、今でもはつきりと覚えてゐるからである。『われから』『たけくらべ』などにも感心した。

あの一葉の日記にも書いてある福山町の零團氣は、當時にあつても、かなり評判の高かつたものであつた。『何うだ、行つて見ないか？』かう私は何遍も誘はれた。現に、その近くの富坂にゐた眉山などに誘はれたことなどもあつた。しかし何となく氣味がわるいやうな氣がした。此方で向うを見るといふことよりも向うから此方を見られるのが恐しいやうな氣がした。私はたうとうそこに足踏をしなかつた。

『めざまし草』の大家達があゝして條件なしに褒めたのは、それは一面本當に作そのものがすぐれてゐたといふこともあつたであらうけれども、一方、他の新進作家——たとへば鏡花とか、

天外とか、宙外とか、風葉とかいふものに對して、一種の面當つらあてといふやうな氣分が醸されてあつた、めではなかつたらうか？ 新進作家の壓迫に對する一種の防禦運動のために、かれ等に大した邪魔にならない一葉をあゝいふ風に持ち上げたのではなかつたらうか？

十七

丁度この時分に、小説と共に詩が文壇の勢力になりつゝあつた。矢田部、外山——それはあまりに遠い。またあまりに物足らない。ずさんでもある。私が覺えてからは、中西梅花といふ人がゐて、それに、梅花詩集と言ふのがあつた。

美妙、嵯峨の屋、これなども古い人である。嵯峨の屋は北邙散士と言つて、散文詩を書いたことなどもある。岩野泡鳴なども、その時分から詩をつくつて、國民新聞に載せてゐたことあつたのを覺えてゐる。

詩の感化は多くはイギリスから來た。グレイ、カウパー、ミルトン、近代ではテニスンなど

から來た。ウオルズウオルスを唱道したものに、宮崎湖處子があつた。

湖處子は當年に於ては、ハイカラで、バタ臭いのできこえてゐた。『歸省』はその處女作で、つゞいて『まほろし』といふ小説を春陽堂から出した。漢學の素養は多少はあつたけれど、和文には全く通じてゐなかつたので、その時分にはまだ大きなものにされてゐたてにはや假名遣などであちこちからえらく攻撃された。千駄木のSSSあたりからも攻撃された。で、かれは國語を研究する氣になつた。和歌を學ぶやうになつた。

かれの詩集を研究すると、だから、次第に漢文調から和文調になつて來つゝある。後には、ウオルズウオルスの詩を全くその和文調で譯したりなどした。

ウオルズウオルスの評論などもかれは書いた。

しかし「文學界」の連中が出て來るまでは、詩はまだその本當の基礎を固め得たとは言へなかつた。同じイギリスの影響にしても、透谷や藤村の規つたものには及ばなかつた。

『抒情詩』の中の國男、玉若、獨歩なども、まだしつかりした『詩』をつかんでゐたとは言へなかつた。天遊、天來などいふ人達もゐるけれども、これとて大したものではなかつた。

・藤村が出て、始めて今の新しい詩がその基礎をつくつたと言つても決して過言ではなかつた。しかし、戀の歌としては、『野邊の往來』の作者が一番すぐれてゐたといふことは、争はれない事實であつた。それに、藤村の教養が全くイギリス風であつたのに比して、『野邊の往來』の作者は、それとは丸で違つた道を通つてゐた。そこにはドイツの影響が著しかつた。ハイネのあの戀の詩は、その時に至つて、始めて東洋の一人の若い作者の胸に生き返つたのであつた。惜しいことには、その作者は長くその詩を保持してゐなかつた。

十八

その時分のことは、私には忘れられない印象を残してゐる。恐らく今でもさういふ文學青年があるであらう。さういふ藝術の徒があるであらう。胸には熱い血が燃え、感激が常に心に溢れるといふやうなさういふ若い人達が――？

私達の眼には、戸山の原だの、大久保の林だの、新井の薬師の方へ行く道だの、牛込のさひ

しい町だの、赤城から石切橋を越して小石川の臺地へ登つて行く坂だの、久世ヶ原だの、本郷の西片町の榎の樹の傍にある下宿だの、不忍池の向うをぐるりと廻つて行く路だの、上野の圖書館に行く路だの、さういふものがはつきりと見えると共に、ハイネのフロレンチン・ナイトだとか、ゲエテのヘルマン・ドロテアだとか、ケルケルの村のロメオとジュリエットだとか、ラマルチイヌのグラシユエラだとか、更に新しくアルフォンス・ドオデエのジャックだとか、タアタリン・ドュ・タラスコンだとか、フロモン・エ・リスリイだとか、またはエミール・ゾラのテレセ・ラカンだとか、ナ、だとか、トルストイのコサツクだとか、ツルゲネフの『親々と子供』だとか、ドストイエフスキイの『罪と罰』だとか、さういふものが絶えずその念頭に往つたり來たりしてゐた。

その時分には、私達は最早『めざまし草』の月評だの、文壇の道聽途説だの、大家の贅澤な生活だの、羨しい原稿料の話だの、さういふ痛い^{つら}辛い刺戟物から離れて、靜かに自己の本當の藝術の基礎を決定しなければならぬと思つてゐた。何んな小さなものでも好い。他に比して取るに足りないやうなものでも好い。兎に角自分の持つたものでさへあれば——？ 自分の築

き上げたものでありさへすれば——？ かういふ勇しい雄々しい心を抱いて、常に机に對し、または野に彷徨ひ、林の中の道を逍遙した。

それは丁度明治三十年から三十一二年の頃であつた。最早私達は他に凭り頼む必要を感じてゐなかつた。また黨派の中に入つて、つまらぬ盲動をやつてゐる氣にもなれなかつた。千駄木や、早稲田から學ばなくとも、自分で勝手に自分の好きなものをさがして研究することが出来るやうな強味と力とを持つて來てゐた。私にしても、國木田君にしても、または島崎君にしても、要するに、はつきりとその行くべき道をその前に見出したのである。最早以前のやうに、意味なしに動搖するやうなことはなくなつて行つたのである。

この心持、それは力強いものであつたと思ふ。恐らく、今の世にも、さうした若い心が澤山にあるであらう。今まで崇拜もし、尊敬をもし、また場合に由つては、それに従つて事を成さうとした大家から離れて、大家の眞價をも嚴密に批判すると共に、自己の價値をも正しく解剖することの出来る心持！ つまりこの世に出て始めて染々と感じて來た獨立の心持！ それはさびしいものであるけれども、そこから本當の自己は生れて行くのであつた。さうなると、最

早押しも押されもしなかつた。千の『めざまし草』があつても、びくともしやうとはしなかつた。

何うです、さういふ孤獨な、しかし強い決定を得た時には、時は已にいつとも知らずに暗々裏に移つて行つてゐるのであつた。つまり、『めざまし草』の大家連が、寄つてたかつて、新進作家をこき下して、その作物を罵倒して、好い氣になつてゐる中に、いつとも知らずに、かれ等の時代は過ぎ去つて行きつゝあつたのであつた。

いくら言つて見たところで、またいくら防いで見たところで、かれ等はその大勢を如何ともすることが出来なかつた。来るべき新しい時代はひとり手にやつて来た。そしていつの間にかかれ等は傍に寄らなければならなくなつた。

かれ等は次第に徒勞を感じて来た。空しい努力の馬鹿々々しさを感じて来た。否、それより先に、いつまでも同じことをやつてゐる愚しさを痛感した。五人は三人になり、三人は二人になつた。次第に、千駄木の主人公だけがその批評をやるやうになつた。後には段々さうした作品を、おもしろくもない作品を、わる口を言はなければならぬやうな作品を毎月十も二十も

讀まなければならぬ苦しきを感じて來た。ひとへ手にやめて了はなければならぬやうな形になつて行つた。

否、それは『めざまし草』ばかりではなかつた。『多情多恨』を書いた後の紅葉も、『新小説』の編輯を石橋忍月に譲るべく餘義なくされた露伴も、さうした時代の幻滅を感じずにはゐられなかつたに相違なかつた。最早かれ等は正面にはゐらなかつた。次第に傍へ傍へと寄せられて行つた。

十九

『それで君は何うするんだ——そんなことで小説は書けるか？』

これは國木田だ。

『だつて、しやうがない——』

『しやうがないですましてゐられるもんか。ぐずぐずしてゐるくらゐなら、自殺でもして了ふ

方が好い——』

『自殺すべき時が来れば、ひとりでやるよ。君の世話にはならんよ』

私も激した。

『だつて、君のやうに、さういふ風に女性崇拜ばかりしてゐるのは、それは君、性慾だよ。たしかに性慾だよ。だつて、女をそんなに美しく見たり、尊んで見たりする必要は何處にもありませんもの——』

『君にはわからんよ。君のやうに女を弄んだものには、男のバアジンの心持なんかわかりやせんよ。』

『僕はいつ女を弄んだ？』

國木田は聞捨てには出来ないといふやうな激しい調子で、返答の如何に由つては、今にもつかみかゝらうとするやうな態度を見せた。

『だつて、さうぢやないか？』

『いつ弄んだ？ いつ？』國木田は私の胸のところのにぎり拳を出した。

『弄んだも同じやうなもんだ……』私も蒼青になつてゐたに相違なかつた。私は園木田のお信さん事件に對して多少の反感を持つてゐた。

『何？　くそ？』

拳を押しつけるやうにしたが、いくらか思ひ返したといふ風で、『勝手にするが好いさ。美しい女の夢なんぞばかり見てゐるんだもの……』。女は、君の考へてゐるやうなもんぢやないよ』
『それは、君がさういふ眼で女を見てゐるからさ。女は男の對照になるもの、相手になるものと言ふ風にばかり見てゐるからサ。僕はきらひだ——』

『だつて、さうぢやないか。女は男の相手ぢやないか？』

『でも、君の言ふやうに、さういふ風に相手ぢやないよ』

『もつと尊敬して相手にするつていふのかね？　それも好いだらう？　女といふものを君は知らないんだから駄目だよ。それで小説がよく書けるな——』

『……？』

むつとして私は黙つてゐた。暫く経つた。

『ぢや、君は、男が女と關係すれば男が女を弄んだとすぐ言つて了ふのかね？ え？ それほどモラリストだと君を思つてゐなかつたがな……』

『……』

『弄ぶ？ 僕なんか、そんなこと言はれる段か、段でないか考へて見たまへ。それは君、大眞面目だつたんだからな。眞剣だつたんだからな。女の方で、僕の眞剣さに堪へなかつたくらゐだつたんだから——』

『……』

私はまだ黙つてゐた。

國木田は次第に聲を和けて、『本當だよ。それは君の童貞も貴ばないことはないさ。君はまだ女といふものを知らないから、それでさういふ風に女を買ひ被つてゐる。女は好いものだと思つてゐる。あらゆる幸福が、美が、享樂がそこにあると思つてゐる！ それも好いさ。しかし、僕のやうな苦い經驗を嘗めたものもあるにはあるんだからな。いくらこつちで珠玉のやうな心を與へても、女はそれを平氣で、泥土に蹂躪して了ふのだからな……』

『それはわかるサ』

『わかりや、それで好いよ。君のやうに考へる詩人だつて、あつたつて好いわけにはわけだからな……………』

かうした對話がそれからそれへとつゞいた。容易に盡きやうとはしなかつた。下には池の水に櫻の花が繪のやうに散つて、谷を揺かすやうな水の音がきこえて來てゐた。

そこではいろいろなことが論ぜられた。ロシアの文學の話も出れば、紅葉露伴の話も出た。二葉亭や鷗外の話も出た。國木田は、紅葉の作品などに重きを置いてゐなかつた。

『矢張、皆な踏臺だよ。紅葉や露伴がいくら豪さうなことを言つたつて、皆な踏臺になつて了ふんだよ……………ね、君、大きな意味から言へば、皆な踏臺になるんサ。今に、國木田や田山の書いたものは、拙くつて讀めないつていふやうな時代が來るよ』

『それはさうだな……………』

『何が何だかわかりやしないよ』

私に取つては、さうして國木田と二人で日光の僧房にゐたといふことは、大きなことであつ

た。私がかれからいろいろなものを得た。かれの持つてゐた眞面目ないろいろなものに觸れることが出来た。それはかれは私に取つてスイートな友達と言ふことは出来なかつたけれども、世間に對することとか、人間の世間に對する形とか、男女のこととか、さういふことについてはかれは確かに一日の長を持つてゐた。文壇のことをあまり氣にしなくなつたのも、かれの感化が與つて力があつたと私は思はずにはゐられない。

『そんなこと、何うだつて好いちやないか？』

そのことになる、かれはきまつてかう喝破して、

『世の中だもの。向うにゐる奴等なんだもの。何とでも言ふが好いさ。人の口に戸は立てられやしないよ』

『それはさうだけでも——』

『君は一體、さういふことを氣にかけすぎるよ。さうでなくつてさへ短かい五十年の一生ぢやないか。そんなことをぐすぐす言つてゐる場合ではないぢやないか。人は何と言はうと、誰が大家にならうが、そんなこと何うだつて好いちやないか。自分さへ自分のことをしつかりつか

んでやつてゐれば好いぢやないか。』

『それはわかつてゐるけれど……』

『一體、日本の文壇ほど小舅の多いところはありやしないからな。やれ、誰が何うしたとか、彼がかうしたとか、つまらないことを氣にして饒舌つて廻つてゐる奴がゐるんだからな。日本の文壇は、一番先にさういふ形を改めなければ駄目だよ。さうでなくつては、煩さくつて、しやうがありやしないよ……何をしたつて好いぢやないか？』

『本當だとも——』

『中でも、あの縁雨なんか、そのおせつかいの張本人だよ。やれ一葉が何うしたとか、かうしたとか、一葉に逢つたのをかくして置いたのを誰か饒舌つたとか、つまらないことを氣にしてゐるぢやないか……』

かういふ話をするかと思ふと、悠久な人生の話などがつゞいて出て行つた。國木田は話が目かつた。誰でもそれに耳を傾けずにはゐなかつた。かれは豊後の佐伯の話をした。また周防の田布施の話をした。岩國の話をした。村の少女の美しさなども話した。

私達は將來の文壇の話などをもした。さういふ時には、屹度文體の話が出た。かれは遠からぬ中に、外國風の言文一致になつて行くに相違ないと言つた。一葉や露伴のやつてゐるやうな文體は、とても長つゞきはしないと言つた。そして私の固苦しい紀行文などに對しても、何うしてそんな文章を書くのだらうと思つた。

それに、文字のつかひ方などについても、つとめて新しい、外國の文章を翻譯したやうな文字を使つた。何うせ生硬なら、外國の方の文章を模した生硬の方がまた取得があると言つた。

『外國のものを讀むと、つくづく羨しいと思ふね。好い文字があるね。とても日本になどはない好い字があるね。例へば、スウイト、メランコリー、トウワイライトといふ字があるね。あれなんか、とても日本の字には譯せないね。スウイト、メランコリー、それが言へないね。君は何と譯すね?』

『さうさな………僕なら』私は考へて、『僕なら、物思はしき夕暮の光とでも譯すかな』

『物思はしき夕暮の光——何うもそれぢや十分に譯し得たとは言へないね。スウイト、メランコリー、トウワイライトの方が好いね、ぐつと好いね。何うしたつて、日本語は言葉に乏しい

よ。將來の文章を書くには、さういふことも考へて見なければならぬ……』

『それはさうだね』

私は日先の僧房に於ての二月を思ひ出さずにはゐられなかつた。私達は銘々に一つ々空を占領して、そして筆に勞れると、その中央にある廢寮の置いてある一室へと行つて寝たり、スタツキを持つて、そことも定めぬ散歩したりした。國木田は散歩に出かけて行つては、いつもいろいろな面白い話の種を持つて來た。

その時分の文壇では、新進作家の群が既に明かにその位置を占め出して來てゐた。「文學界」の連中も、そのグルウブの中ではばかり働いてゐるずに、詩を書くものは詩壇に、議論や批評を書くものは評壇に、小説を書くものは小説壇へと次第に出て行つてゐた。戸川秋骨氏などはその時分、讀賣の評壇を受持つてゐた。

國木田と私とは、時にはさうした新しい時代について話した。かれの説では、今の新進作家には、到底重きを置くに足る者はないといふことであつた。鏡花でも、風葉でも、乃至は天外でも、抱月でも、宙外でも、旨いには旨いが、ことに風葉など旨いが、人生に對しての深い體

驗がないから、とても本當の藝術をつくり出すことは出来ないといふことであつた。誰が人生をツルゲネフやトルストイのやうに見たか。また誰が人生をドストイエフスキイやゾラやモウパッサンのやうに見たか。誰が深い男女の苦闘を嘗めたか。誰が人間の矛盾性のあさましさを解剖したか。また誰がこの悠々とした自然を見たか。さういふものがはつきりしてゐるに、何うして本當のものが書けるか。土臺が本當に出来てゐないで、何うしてすぐれた藝術が出来るか。かれは言つた。『それは新しい時代が古い時代よりも増しであることは、それは無論である。言ふを待たないことであるけれども、しかもそれは僅かに一步を進めたくらゐなもので、到底多くを期待することは出来ないね』

早く死ぬだけあつて、かれの頭腦ははつきりしてゐた。思想も老成してゐた。かれはまだ三十にもなりもしないのに、既に苦しい男女の活闘の洗禮を受けて、生でなければ死といふやうな苦しみを十分に嘗めてゐた。

抱月は後には全く小説を書かなかつたけれど、その時分に十篇や十五篇の作を公にした。一葉や綠雨とは違つてゐたけれども、文體は雅俗折衷體で、何處か近松の感化を多分に受けたやうなところがあつた。『夫婦波』などといふ心中を書いたものゝあつたのを私は覺えてゐる。

かれは少くともその時代に於ての新しいチャンピオンを以て目ざされた一人であつた。同年に出た宙外の方が世間的にはもてゝもゐたし、小説壇にも認められてゐたけれども、心ある若い人達は、誰でも抱月の方に重きを置いた。かれの書いたものはいかにも眞面目であつた。そしてまたいかにもロマンチックであつた。一種、戀にあくがれる情操といふやうなものを持つてゐて、今日考へて見ると、あの晩年の實行は、既にその頃の作の中にほのかにあらはれてゐるといふことが出來た。宙外とかれとでは、金と銀との相違があるやうに誰にも言はれた。

透谷や、二葉亭に由つて萌え出した新しい芽は、いつとなしに、若い人達の心の中にその位

置を発見した。最早かれ等は單にバタ臭いとして笑はれもせず、また外國の贗案だとして却けられもせず、そんなものをいくら書いたつてしやうがありはしないと書はれもしなかつた。讀書社會も種々な變遷を経て段々に進んで行つた。江戸時代の駄洒落と輕口と通とは、日増にその影が薄くなつて行つた。

天外は縁雨から柳浪の方へと出て行つたやうな作家であつたが——何方かと言へば、年も老つてゐたし、新派の方に屬すべき作家ではなかつたかも知れなかつたが、しかも聰明なかれは千駄木あたりの感化を土臺として、ゾラを背景にした寫實主義といふことを唱道して、次第にその位置を高めて行つた。

恐らくかれは巧に新進作家の列の中をくゞつて、そのまゝ一時先頭へと出て行つたやうな作家ではなかつたか。大家達のあきたのと、新進作家達のほつと溜息をついたやうな際に乗じて、自分の位置を鮮明にして行つたやうな作家ではなかつたか。明治三十二年頃からかれの寫實を標榜した作品は續々として世間に出て行つた。中でも『はやり唄』あたりが最もその頂點に達した作だと言はれてゐた。

渺くともかれは紅葉の文と手法とから、または柳浪の單純な客觀化から、その自己の文體を發見して行つたに相違なかつた。それは別に他の奇もなく——ゾラを標榜して居りながらしかも少しもその綿密と精緻とを持つてゐないやうな、何方かと言へば白湯でも飲んだやうな特色のない文體であつたが、しかも、それが將來の文體を一致させることについて、風葉、春葉あたりと共に一大貢獻を明治文學に及ぼしたことは、争ふことの出来ない事實であつた。それにして不思議なのは、以前は天外はあゝした文體とは全く違つたものを書いてゐたといふことであつた。かれは綠雨の感化のもとに、雅俗折衷體の文章も書けば、皮肉交りの譬喩に近い文章をも書いた。さうかと思ふと、丸で外國の童話の翻案と言つたやうな作をも公にした。何うしてもあゝいふ風なところに出て行く作家とは思はれなかつたのであつた。

何でもその頃の道徳途説では、かれは千駄木あたりで、これからの文藝は何うしても寫實でなければ駄目だといふやうなことを聞いて、それからそつちの方へ出て行つたとのことであつた。かれは次第に『戀と戀』といふやうな作を出すやうになつて行つた。『魔風戀風』あたりに行つては、かれはもはや當代の流行兒になつてゐた。

この時分に、外國文學が何ういふ風に入つて來てゐたかといふことを調べて見るのも決して
 不必要なことではないと思ふ。

千駄木からは、主としてドイツ文學と大陸文學とが入つて來てゐた。『めざまし草』では、そ
 の時分はもはや例の『雲中語』は振はなくなつて、鷗外が頻りに『即興詩人』の翻譯をやつて
 ゐた。そして寫實主義もわるくはないが、かうした理想主義の作品も美しくつてまた好いなど
 と言つてゐた。一方では二葉亭が彗星のやうに、ツルゲネフの『片戀』などを公にしてゐた。
 『ルウジン』の譯も太陽に連載された。

早稻田では、坪内氏が頻りにシエクスピエアを鼓吹すると同時に、大陸文學の方にも徐々と
 して目をつけ出して來てゐた。

外國文學に對する全體の氣分が、最早明治二十五六年代とは違つて、單にその皮相に留らず

に、深くその眞髓まで入つて行かうとしてゐた。それに、その頃では、イギリスやアメリカばかりからでなしに、ドイツ、フランス、ロシア、スカンディナヴィア、スペインあたりの文學迄も入つて來てゐた。ドイツの影響は中でも殊に著しかつた。軍事に、醫學に、機械に、工場に、すべてドイツの風が潮の様に入つて來ると同時に、國民の思想にまでその影響が及んで來た。

私達時代で、一番多く、外國の文學を世間に紹介したのは、鷗外に次いで、無論、上田敏であつた。それによつては馬場孤蝶であつた。敏氏は私などよりも年は若かつたけれども、非常な秀才で、フランス語もドイツ語も出來て、いろいろめづらしいものを帝國文學で翻譯して見せた。イタリイのダンメンチオの作などは、敏氏が一番先に日本に紹介した。

高山樗牛は評論壇の雄で、一方に鷗外、一方に逍遙といふ強敵を廻して盛に論陣を張るといふことにこれ日も足りないといふ風であつたが、外國文學に就いては、さう深くは知つてゐなかつた。とても上田敏のやうに博く通じてゐるといふ風ではなかつた。

この頃では、ロシアの文學もかなり廣く且つ深くわかつて來てゐた。英語に譯されたツルダネフの全集ももうやつて來てゐた。レルモントフの『ペチョリン』は鷗外の手を経て、ドイツ

譯から既に早く入つて來てゐるが、英譯の『現時の英雄』と題したのも、既に丸善の二階に來てゐた。ドストイエフスキイの『罪と罰』は内田氏に半分以上譯され、『虐けられた人人』もその一部を『國民之友』に掲けられてあつたのを私は覺えてゐる。

トルストイのものは、『アンナ・カレニナ』を始めとして、『少年時代』や、『コザツクス』や『ホウコリニチカ』や、『二時代』や、後には小西増太郎と紅葉との合譯で、『クロイツェル・ソナタ』が出た。その出た時には、流石に當時の人達を驚かさすには置かなかつた。

『えらいもんだな！』

『あれでも小説かな』

『でも、よく思切つて書いたもんだ……あそこまで書く勇氣がえらい』

『我々だつて、あゝいふものを書かなくつては駄目だ！』

『でもあれでは藝術でない。藝術の境を越えてゐる！ あそこまで入つて行く必要はない』

こんなことを誰も彼も言つた。現に、私達もそれに目を睜つたひとりで、さうしたトルストイあたりの態度から比べて、いかに自分等が意氣地がないかといふことを翻つて考へさせられ

中にはゐられなかつた。『實際、人生の事實だからな。好いとか、いけないとか言つたつて、事實だからしやうがないよ』國木田も興奮してこんなことを言つた。

ある時は、かうした寫實がゾラの寫實に比べて話された。『何うも違ふね、何方が好いんだらうね？』ゾラには、寫實と言つても、見て書いたといふやうなところがあるね。クロイツェル・ソナタなんかには、それはないな……。寫實には相違ないが、寫實以上だな』こんなことを互ひに言つたのを覚えてゐる。

フランス文學では、ゾラが一番讀まれ、つゞいてドオデエが讀まれた。モウパッサンは、上田敏氏がアメリカ版の『オツド・ナンバア』といふ、何方かと言へば、家庭で讀んでも差支ないやうな、比較的ひどくないものを選んだ短篇集を持つて來て、その中から一つ二つ譯して帝國文學に載せたのが始めてであるが、段々その評判が高くなつて、私も後には、『ピエル・エ・ジャン』の英譯を日光の古木屋から買つて來た。ラマルティヌ、シャトウブリアンなども饒らかは讀まれた。併し、フロオベルの『マダム・ボヴァリー』あたりはまだ本當に讀まれてはゐなかつた。

ドイツでは、ゲーテのエルナル、ハイネの詩、スビーイルハアゲンの小説、レッツシングの戯曲

——新しいところでは、千駄木の『めざまし草』がパウル・ハイゼなどを譯してゐた。ズウダマンやハウプトマンはまだ世にきこえてゐなかつた。否、きこえてゐても、日本まではまだ入つて來なかつた。

イギリス文學は、早稻田あたりで頻りに鼓吹されてゐたのにも拘らず、さう大した影響を若い人達に與へなかつた。デッケンスやサツカリイの面白さは、その頃の人達にはわからなかつた。比較的讀まれてゐたのは、アラン・ポウとブレット・ハートとであつた。

かういふ形であつたので、明治二十五年代とは餘程好くなつて來てゐたけれども、それでも外國文學とレベルを同じうするといふことは出來なかつたのである。當時の文學青年達がやつと人生問題などを考へるやうになつたくらゐのものであつたのである。

二十二

新進作家は何の彼のと言はれつゝも——大家連からその弱點を盛に指摘されつゝも、次第に

その地歩を占めて行つた。鏡花、天外、風葉、一葉などの名がいつとなしにずらりとそこに並んだ。そしてそのまた一段下に、私だの、國木田だの、島崎だの、徳富蘆花などがゐたのであつた。勿論、さういふ人達にしても、決して鏡花や風葉に一步を譲つてゐるとは思はなかつたけれども、世間では、さういふ風にはつきり區別を置いて見たのであつた。

明治三十年、三十一年、三十二年、——かう経過した後には、あたりの状態の變つて行きつゝあつたさまが著るしく目についた。もはや大家達は互ひに集つたり何かしなかつた。露伴は向島にかくれた。綠雨も小田原の方へ行つた。紅葉も寫眞機を携へて旅行などをしてゐた。鷗外はそれでもひとりで頻りに頑張つてゐたけれども、いつか牝牛や桂月や抱月を相手にすることの徒勞であることを悟りでもしたやうに、評論の筆よりはむしろ翻譯の筆の方を一層より多く取るやうになつてゐた。

小説壇では、一葉が死んだ後は、鏡花、風葉、天外などが當時の流行兒となつてゐた。

この頃になつて、若い人達は、皆な家庭を持つた。私は三十二年の春に結婚した。國木田もそれから一月か二月か後れて、今の未亡人と婚した。島崎も新しい細君を伴れて信州小諸の方

へと行つた。風葉も、鏡花も家庭をつくつた。

尠くともさういふ風に妻を持ち、家庭をつくり、やがては兒を持つといふやうになつて行つたといふことは、若い時代の人達の頭の向きを變へずには置かなかつた。かれ等はいつか人生の巴渦の唯中に入つて行つた。かれ等はかれ等の思つてゐることの忽ち氷の解けるやうに解け去つて行つて了つたのを見た。實際と理想との非常に違つて行つてゐるのを見た。ひろい人生の中に渺としてかれ唯ひとりあるのを見た。

かれ等は最早無責任なことを言つてはゐられなかつた。現實の波に溺れずに働まで浮んで行かなければならなかつた。何も知らずに言つてゐた太平樂や大言壯語を繰返してゐるわけには行かなかつた。皆な一齊に口を噤んだ。そしててんでに自分自分の領分に閉ぢ籠つた。で、文壇は一時靜かになつた。しんとして了つた。

唯、高山樗牛がひとり大刀たんびを振翳してゐるぐらゐなものであつた。

そしてそれと同時に、紅葉の死が來た。乙羽の死が來た。樗牛の死が來た。

人生では、先輩または大家の死が、今までわるく塞がれてゐた溝の通りをよくするのに役立つ

つやうな場合がよくあるものだが——それは親と子との肉身の間柄でもさういふ感じがするものだが、紅葉、樗牛、乃至乙羽の死がいかにか文壇の空氣の疎通を好くしたかは、恐らく當時の
人達の皆な暗に感じたところのものであつたらうと思はれる。紅葉の死は尠くとも江戸乃至元
祿の盤を括てさせることに於て役立つた。また黨をつくり閥を構へて、一大組合の勢力をつく
るのを碍けることに於て役立つた。更に一層それよりも、大きいことは、例の通とか、俠とか、
乃至は昔の古い道徳的教養の感化とか、輕口、洒落、地口の跋扈とか、師弟の關係のいやに堅
苦いのとか、世話をもするかはりに恩もさせるといふやうな舊式な慣習とか、さういふものか
ら空氣を自由にするに於て役立つた。かれの死後は、比較的人の顔を見い見い物を言つた
り、言ひたくもないお世辭を言つたりしなくともよくなつた。思つたことは、ドシドシ言つて
差支ないやうな空氣が出来て行つた。文壇ではいくらかほつとしたといふやうな感じがしたに相
違なかつた。

しかし、それは一面で、一面では日本文學に於いてのかれの功蹟が特筆大書しなければなら
ないのは勿論であつた。かれは文體が今の文體になるについての第一の功勞者と言つて好かつ

た。かれはそれについて一番苦勞した。かれの一生の業績には、そのあとがはつきりと残つてゐた。『多情多恨』が今の言文一致の機運を促したものといふことを、後藤宙外が後になつて言つてゐるが、それなどは決して過褒と言ふことは出来なかつた。山田、長谷川、それ以上に、かれは文體に於ての功勞者であつた。それに、その作品も、その時代のものとして考へて見れば、決して平凡なものではなかつた。

それに、いろいろな人達がその周圍にゐたがために、またはその朋黨門弟が多かつたために、その死はまことに花々しい、一文人の死としては空前絶後と言つても好いくらゐなセンセイオンを當時に惹き起したのは、特筆しなければならぬ事實であつた。かれの葬を送る行列は五町も六町も續いた。先頭が神樂坂の通りに行つても、そのあとがまだ横寺町のかれの寓居を出切らないといふほどの光景であつた。青山の齋場では坪内氏が卒倒し、墓地では抱一庵が慟哭した。

私に取つても、その時の印象は忘れられないもののひとつであつた。私は箇人思想の次第に横溢しつゝある一方に、かうしたコンベンショナルな光景があるといふことを悲しまずにはゐ

られなかつた。また師弟とか朋黨とか言ふものの慣習の、これを最後にしてあとを絶つてあらうといふことを考へずにはゐられなかつた。私はその後も度々青山の墓地に行つて、そして野菊の花などを手向けた。

擣牛の死も悲しいものであつた。花々しい文壇的活躍、その前に、さうした暗い影が横つてゐるやうとは誰とて想像したものはなかつた。否、かれはこれから海外に洋行しやうといふその準備最中に、突然その暗い影に襲はれたのであつた。その時分の話では、餘りに得意になつたために、餘りに圖に乗つて酒など澤山飲んだために、そのためにあゝいふ病氣に取憑かれたのであると言ふものもあつたけれど、そればかりでなしに、さういふ不運は、かれが生れた時から、遺傳的にかれの身の周圍に憑き添つてゐたのであつた。かれの弟の齋藤野の人も矢張同じ病に斃れた。

かれはその病に取憑かれたために、海外に赴くことをやめて、駿河の海岸に、または相模の海岸にその病を養はなければならぬ身となつた。さうでなくてすら多情多感で、『思ひ出の肥』や、『平家雜感』にそのセンチメンタルなロマンチックな思ひを寄せたかれは、病んでから

一層感情的になり宗教的になつて、後には全く日蓮の教義にその全心を寄せるやうになつた。私はかれが大磯に病を養つてゐる頃に、長谷川誠也君と一緒にそこを見舞つたことがあつたが、まだその時分は、病氣と言ひながらも元氣で、いろいろなことを話しも論じもしたが、その翌年そこから鎌倉に轉地してからは、次第にわるくなつて、遂にそこでその一生を終ることゝなつたのである。

年が若かつたために、その書いたものは、さう大して立派なものもなかつたであらうけれども、その才能は今でも若い人達の心を惹いて、あの龍華寺の墓畔には、香花の絶えることはな
いといふことを私は聞いた。

かれは晩年にその友登張竹風と共にニイチエを紹介した。美的生活といふ言葉は、その時代には、文壇ばかりではなく、世間にも喧傳されて、何ぞと言つては、『美的生活』をやるかなど、言つた。後年自然主義といふ言葉が變な意味に使はれたのと同じわけである。しかし私の考では、かれはニイチエを傳へるのに相應しい人物とは思はれなかつた。ニイチエはもつと強かつた。もつと男性的であつた。もつと自我的であつた。樗牛の持つたやうな、あゝしたセン

チメンタルな、ロマンチックなところをニイチエは少しも持つてゐなかつた。見やうに由つては、樗牛は全くニイチエの反對に立つてゐると言つても好いくらゐるであつた。鵜外は曾て一度それを二六新報紙上の『心頭語』で指摘して、牙のないニイチエ、齒のないニイチエだと言つて笑つた。

さういふ意味から言ふと、樗牛はロマンチシストの最後のものと言つて好かつた。かれの歿後、もはや再びかれのやうなものは生れなかつた。

大橋乙羽の死も亦文壇的にかなりに大きな影響を興へた。しかしかれの惜しまれたのは、作家としてゝはなかつた。かれは渡邊姓から時の大出版業者である大橋氏に入婿になつて行つた。そしてかれは文壇と出版業者との間に立つて働いた。今日では——今日のやうに出版の自由になつた世の中では、さうしたことはちよつと考へられないけれども、大橋乙羽と言へば、文壇の人達に取つてなくてはならないもの、若い人達に取つてもなくてはならないものであつた。誰もかれも皆なそこに原稿を持つて行つた。かれもまた出来るかぎりいろいろな人達の持餘した原稿を買つてやつた。かれの教養は大したものでなく、硯友社の人達と同じやうに、駄洒落、

輕口、地口を得意にするやうな人であつたけれども、何處かその性格にか、それとも亦艱難を
經來つたためにさうなつたのか、世話すきな、やさしい、親切なところがあつて、新進作家ば
かりではなく、小説の原稿を二三抱いてゐるやうな若い人達は皆なその周圍へと集つて行つた。
鐘花もかれの世話になつた一人であつた。一葉もさうであつた。風華も春葉も皆すべてさうで
あつた。綠雨などでさへ、よくかれに無心を言つた。

従つてかれは文壇に勢力があつた。乙羽！ 乙羽！ と言はれた。今の中央公論の瀧田榜陰
——あゝ、した位置であつたけれども、それよりもつともつと勢力があつた。かれは雜誌ばか
りではなしに、書物の方にも手を出した。寫眞機を携へてよくあちこちを旅行した。

ところが、これもその活躍の最中、全盛の最中、出版業を研究にヨオロッパを視察して歸つ
て來たその翌年の四月か五月かにチブスのやうなものを病んで、そして忽ち死んで行つて了つ
たのである。私は今でもあの大學病院の一室に横つて全く意識を失つて了つてゐたかれを忘れ
ることが出来なかつた。また雨の凄じく降り傾る日に、社會のあらゆる階級の人達に見送られ
て、新緑の影の中にその銘旗を白く隠見させつゝ、谷中日暮里の寺に葬られたさまを忘れるこ

とが出来なかつた。

他の人は何うであつたか知らないが、私に取つては、この三つの死は、極めて大きな事實であつた。私は無常をまざまざと目の前に見せつけられたやうな氣がした。他の榮華を羨んだり、自分の不運を嘆いたりしてゐた自分の愚しさを痛感した。私はしんとした殿堂の中にでも作はれて行かれたやうな嚴肅さを感じた。自分が眞面目になるより他、自分で自分を打ち立てる他、それより他には行く道はないやうに私には思はれた。

それは明治三十四、五、六、この三年間くらの出來事であつた。文壇はしんとなつて了つた。大家達もてんでに自分の領分に引込み、新進作家達も眞面目にその作に熱中した。

鏡花、宙外、風葉、天外などが頻りにその作を發表した。文壇は全く新進作家の世界となつた。梶牛の死んだあとの『太陽』の時評を大町桂月が代つて書いた。

鏡花の文壇に於いての位置も、かなり花々しいものであつた。尠くともかれの小説があらゆる階級に讀まれた時代が二三年續いた。その時分、『新小説』の編輯をしてかなり文壇に勢力を持つてゐた後藤宙外などは、寫實派の立派な標本として、かれの『湯島詣』を挙げた。

しかし、鏡花のものは、決して寫實と言ふことは出来なかつた。また何等新しい外國の影響をも受けてゐなかつた。次第にそのロマンチックな態度がその源を昔の江戸の草双紙あたりに發してゐることなどを看破されるやうになつて行つた。その頃、外國では、モダン・ミスチズムなどいふことが言はれて、例のメイテルリンクのものなどが世間に認められて來てゐる時代だつたので、ある批評家は、鏡花の作品をそれにあてはめて論じたことなどもあつたけれど、その過誤であつたことは、時を移さずして暴露されて行つた。

しかしその頃の文壇は靜かであつた。聲を荒らけて物を言ふやうなものは少なかつた。徳田秋聲氏なども次第に世に認められて行つた。

それに、その時分であつたか、それともまたその二三年あとであつたか、草村北星のものだの、田口掬汀のものだのが一時流行した。無論、それは大したものではなく、何方かと言へば、

通俗小説に近いものであつたが、さうしたものの流行は、たしかに文壇の一時の沈滞と墮落とを示してゐたやうなものであつた。

しかし、さうしてゐる中にも、暗々裏に芽は發達しつゝあつた。もう少し本當のものが出て來なければならぬといふやうに誰も彼も思つた。島崎君が『新小説』に寄せた『常盤樹の歌』などは、當時の若い作家達に、いろいろな意味に於いて、深い刺戟と影響とを與へたものであると私は思ふ。

それに、大陸の思想界にも驚くべき變遷があつた。一方にニイチエがあり、一方にトルストイがあり、更にイブセンやビョルンソンや、ストリンデルベルヒの人生觀藝術觀が一代の思潮を風靡した。ロマンチスト、アイデヤリストの代りに、箇人の藝術、箇人の思想といふことが高調された。この東洋の文壇にも波の打つやうに頻りにそれが強い反響を傳へて來た。

青山の練兵場の向うに、霞丘町かすみがはらといふところがあつた。それは全く世間から閑却されたやうな町で、かなり東京に通じたものでも、『え？ 霞丘町！かすみがはら そんな町があるかね？』かう言つて首を傾げるやうなところであつた。一方は野に接した林で、一方は千駄ヶ谷の街道の方へと通じてゐた。社會に失敗したものが、人生に置いて行かれたものか、でなければ昔の老いた士族の零落したものなどが、微かにそこに朝夕の烟を擧げてゐるといふやうなところで、入つて行つた横町に草が生えてゐたり、大きな門が無造作に倒れかけてゐたりした。四日垣の中に山茶花の咲いた小さな庭などが見えた。

その町の西に向つたところには、幅七八間ほどある川が流れて、淡竹の籬の中に水車が頻りに廻つて軋つてゐた。國木田獨歩の『武藏野』の中に、『郊外』といふ作があるが、それはそれらのことを書いたもので、かれはその時分、そこから橋をわたつて、すつと入つて行つたやうなところに住んでゐた。

かれは何處へ行つても窮してゐたが、その窮するのがあたり前のやうに自分も思ひ他ほかからも思はれてゐたが、この霞丘町かすみがはらに引込んだ時は、中でもことに窮してゐた時代であつた。かれの

作に『酒中日記』といふのがあるが、それはかれの作品の中でもすぐれてゐるものであるが、その中の窮状は、全くその霞丘町時代のかれの生活そのままの描寫であつた。かれはある時私に話した。『昨夜おそく練兵場を通つて歸つて來たがね。何とも言はれなかつたよ。つくづく悲觀しちやつた。情けないぢやないか、君、そこに一萬圓落ちてゐたらつていふやうな空想をすゝるほどになつて了つた！』

それほどかれは困つてゐた。ある時はかれは言つた。

『君、何うして人間はかう苦まなければならぬのかね？　もう少しお互ひに助け合つても好いと思ふけどもね？　一人が要りもしない金をウンと持つて、それを數へるにさへ困つてゐるのに、他の一人が一文もなしに、明日の食ふものもなしに苦しんでゐるといふことは、あまりに甚しい矛盾ぢやないかな？』

『労働しさへすれば、食へないことはないと思ふがな？』

『だつて、この僕に車も曳けないぢやないか』

かう言つてかれは黯然としてゐた。恐らくかれはそこで人間窮乏の最も烈しいものを嘗めた

に相違なかつた。かれはよく餓えるといふことを論じた。『それや、酒屋や、米屋を拂はないのは、それはわるいにきまつてゐるさ。しかし、人間の一人餓えるといふことは、もつとわるいことぢやないかね。人間が餓えるといふことに比べたら、酒屋や米屋が拂はれなくらゐる何でもないと思ふがな？ 米屋だつて、さうと知れば、そんなに催促しないだらうと思ふがな』こんなことをかれはよく言つた。その時代の私達は、もはやトルストイの皮相やゾラの外面をのみ學んでゐるやうなものではなかつた。實際の問題が深く私達に觸れて來てゐた。好い加減の、中途半端の、まアさういふ慣習だからそれに従つて行かうといふやうな心持では、もう何うしてもゐることが出來なかつた。『本當にさうだとも——ぐずぐずしてゐられるもんか』こんな風に私達は言つた。

本當に人生に觸れたものでなければ、本當の藝術はつくることは出來ない。さういふことを私達は常に論じた。私はその時分、ニイチエとイブセンとトルストイとゾラとを讀んでゐた。私はニイチエの價值顛倒のことをよく話した。

『ふむ——面白い』

かう深く耳を傾けるやうにしてかれは言つた。

『何しろ徹底してゐるぢやないか。』私は言葉をつゞけて、『自分でやるより他に爲方がない！それでいけなければ、何うでもしろ。我々人間はあまりに自惚れすぎてゐる。あまりに神にならすぎてゐる。あまりに理想から甘やかされすぎてゐる。もつと元にもどれ！ 原始状態に戻れ！ したいことはどしどしやれ！ 人に氣がねをしてゐる必要はない。あとについて來るものがなくとも構はない。何處までも一人で行くところまで行く。ちつとも滯滞したところがないからな』

『賛成だ……』

『だから、もつと本當のことを書くことが我々には必要だ……。今までの人達はあまりに氣取りすぎてゐる。あまりに綺麗に人間を見すぎてゐる。見たまへ、今では、ドイツあたりでは、盛にそれを言つてゐるのだから……。鉄？ さうだ、鍛された文學は、もはやこの世の中に存在する必要はないと言はれてゐるんだからな……。パウル・ハイゼなんかでももはや鍛された文學者の方に打ち込まれて行つてゐるんだからな？』

『面白いな』

『要するに、生々いきくとしてゐなくつてはいけない。實際の中から、血みどろになつてつかんで来たものでなくつてはいけない……。つまり、我々の空想の夢、理想の夢はすべて覺めた！』

こんなことが盡きずに私達の間に出た。時には私達は、そこから出て、橋の上に行つて水車を眺めたり、川の下流に添つてずつと長く歩いて行つたり、林の中の路を歩いたり、白楊の樹の並んでゐる呼道を通つたり、それからずつと今の明治神宮の表門の方まで何か話しながら歩いて行つたりした。

二十五

『帝國文學』で、片山孤村だの、櫻井天壇だのといふ人達が次第に大陸文學とドイツ文學の新しい消息を紹介するやうになつた。何處でも彼處でも時代は移りつゝあつた。新しい人達が表面へ表面へと浮び出して來た。

『鷗外漁史』はまだ『めざまし草』をやめはしなかつたけれども、唯、やめないといふだけで、頗る影の薄いものになつてゐた。新しい論客では、高須梅溪などが頻りに『新聲』にその自由な筆を揮つてゐた。

天外が『魔風懸風』を書き出したのは、何でもその時分であつた。かなり評判が高かつた。一時はかれが文壇の正面に立つかとすら思はれた。しかし、惜しいことには、かれは新しいヨオロッパの藝術運動にその注意を向けてゐなかつた。性慾のことなども書くには書いたけれども――かなり露骨に、現代式に書くには書いたけれども、何處かにまだ妥協的なところがあつた。鋭あきをしたやうなところが燒つてゐた。寫實は寫實でも、深く突込んだものではなく、とてもロシア文學に見るやうな、あゝした心も目も震はせずには置かないやうな寫實をかれに望むことは出来なかつた。『魔風懸風』ですら、後半になるに従つて、次第に以前に柳浪が陥つたと同じやうな、對話で筋を運ぶ弊に陥つて行つてゐた。

當時の流行見の中では、それでも風潮が一番さういふことには注意を拂つてゐた。かれは『帝國文學』の片山孤村の紹介を注意して讀んだり、ニイチエの思想に觸れやうと努力したり、そ

の時分の文壇の合言葉である『新しい思想』といふことに全心を向けやうとしてゐたりした。次第に、文壇は文章や文體中心の空氣から離れて、内容中心になりつゝあつた。今では誰でもちよつとした言葉の通や、文章の綾や、言ひ廻しの妙や、さういふものに重きを置いてゐなかつた。全體の感じとか氣分とかテイマとかに眼をつけるやうになつて行つた。

風葉はその時分、『青春』といふ作を『讀賣』に載せてゐた。従つて暫くの間は、天外とその雌雄を戦はしてゐるかのやうに見えた。私の考へでは、この天外と風葉との努力は、文體のいつとなしにきめられて行つたことについて非常に功蹟がありはしなかつたかと思ふ。この頃から、段々小説は言文一致でなくてはならないものゝやうに言はれて來た。

それにしても思ひ出されて來るのは、政府——文部省でやつてゐることのくだらなさといふことであつた。そこでは、國語調査會といふものを設けたり、また時には假名づかひを一致させる會合のやうなものを開いたり、漢字の數を制限させる議決をしたりしてゐるが、さういふこと以上に、自然がそれを解釋して行つてゐるはしないであらうか。文體が今のやうになつて行つたのも、長谷川、尾崎、小杉、小栗などの諸家の努力に待つことが多かつたのではないであ

らうか。否、さうしたことは、傍でくだらなく讀決などするよりも、自然にまかせて置く方が、その方がぐつと有効ではないのであらうか。さういふ文部省あたりの小さな讀決は、百害あつて一利なしといふ結果には到達しほしないか。鷗外氏が死んで、あの官僚風の文藝院などが出来なくなつたのは、却つて幸福であつたのではないか。

さう言へば、最近に鷗外氏が死んだ……。それについて、此處に少し氏のことを言つて見るのも面白いことだと思ふ。

それは鷗外氏は日本の文學には非常にいろいろな貢獻をした人である。現に、私などでもそのためには大に目を明けて貰つたやうなところがある。それは鷗外氏があなくとも、あのくらの翻譯や紹介なら、他にも出来る人があつたとは言ふことは出来る。あの翻譯など當時にあつてこそめつらしく且つ有益であつたけれども、今ではあんなものなんでもない。もつとあれより旨くやる若い人達がいくらかもある。かうも言へるには言へる。だから、鷗外氏が翻譯を褒められると不愉快な顔をしたといはれる理由もそこにある。しかし、何と言つても、あの人のお蔭は被つたので、その恩は忘れることは出来ないのである。

しかし、鷗外氏の翻譯の感化は、二葉亭氏などに比しては、いくらか外面的ではなかつたかと私は思ふ。廣くは知らせて貰つたが、深くは教へて貰ふことが出来なかつたといふ形がありはしなかつたであらうか。二葉亭氏の方では、「藝術と實行」といふやうな方面まで入つて行く道を教へられたのに引かへて、鷗外氏の方では、本當の藝術と彼の藝術の區別をさへ知ることが出来なかつたではなかつたか。つまりもつと詳しく言つて見れば、かれは藝術家としてよりも、學者としての素質の方がより一層多かつたのではなかつたか。内部の煩悶や苦痛は比較的に多く感じないやうな人ではなかつたか。それは境遇も好かつたし、物質にも不自由をしなかつたから、何うしてもさういふ風になつたであらうと思はれるが、しかしかに富んでゐるやうとも、不足がなからうとも、その性質で苦しい人は矢張苦しかるべきものではなかつたか。

さういふのは、しかし間違つたことかも知れないが、かれの特質として、いやに官僚風なところのあるのは私の取らないものの一つであつた。かれは山縣公などに近寄つたためか、それとも心からさういふ風に權力といふものが好きであつたのか、帝國美術院の院長になつたり、または文藝院を立て、自分がその院長にならうとしたり、いやに反對に立つた若い人達を馬

鹿にしたり、また自分一人が日本の文學を背負つて立つたやうな顔をしたり、いやに神經に過ぎるやうなところがあるのは、非常に惜しいことと言はなければならなかつた。

かれは現代主義者で、そして古典主義者であるといふ。しかし、私などの考へたところでは、かれは現代を紹介するにはしたが、しかし本當は現代以外に立つてもゐたのではないか。現代を傍觀して立つてゐたのではないか。學者として冷かに笑つて見て立つてゐたのではないか。だから、寫實主義のものも、理想主義のものも、乃至は近代の表象主義のものも、同じやうに見て、そしてそれを紹介することが出来たのではないか。その證據には、かれの作品に何ういふものがあるか。全心全力を打込んで書いたやうなものがあるか。これが私のすべてだといふやうなものがあるか。否、否、否。その反對に、俺だつてこのくらゐのものは書けるといふやうな作品が多くはありはしないか。あの有名な『ピタ、セキシリアス』だつて、若い者が皆な書くから、俺も書いて見るくらゐな調子で書いたのではないか。

しかし、かれとて眞面目になつた時はないではなかつた。かれは晩年になつて、自分のやつたことを振返つて見たに相違なかつた。翻譯と紹介と議論とに徒勞むだに費された自分を振返つて

見たに相違なかつた。それに、その時にはかれは軍職から離れて來てゐた。比較的閑散な身にもなつてゐた。かれは『伊澤蘭軒』だの、『澁江抽齋』だのを書き出した。

『鷗外全集』には、それは史傳の中に入られてあるが、さういふ風に鷗外自身が分類して置いたか何うかは私は知らないが、私はあの諸作を立派な小説として置きたいと思ふ。私はあそこに行つて、はじめてかれの本當の心持に觸れたやうな氣がした。

『北條霞亭』は、中でもことにおもしろかつた。そこに私は人生を見た。いかに深くかれがじつと見入つてゐるかといふやうな人生を見た。またその中に笑つたり泣いたり感傷したりしてゐるかれを見た。そこに行つて、始めてかれは純な藝術家として物を書いてゐるのを私は見た。かれは自傳を書いてゐるやうな心持で『北條霞亭』を書いたに相違なかつた。

それに、スタイルとしても、小説とする方が本當であつた。あゝした獨特の、外國にも何處にもない獨特の小説を書いたとしても面白かつた。

奥野野寛の『明星』が捲き起した運動も、當時の文學青年を魅し去るには十分であつた。一時、そこにも此處にも四六二倍の判の大きい『明星』を手にしてゐる人達を見た。

かれは詩人としては、かなり名高かつた。最初に『東西南北』を出した時分には、虎の鐵幹などと言はれて、齋藤綠雨などにすら鼻持のならないやうに言はれたものだつたが、次第に世間に認められて、『明星』を出したり、例の晶子と一緒になつたりした時分から、確乎とした位置を占めるやうになつた。晶子の歌もその時分には非常に評判で、例の『みだれ髪』などの賣行きは、一時市價を高からしめたくらゐのものであつた。

この時分には、詩壇も一變遷を來してゐた。もはや『若菜集』の時代ではなかつた。藤村の『落梅集』は、決して評判はわるくはなかつたけれども、またその内容もすぐれて居たけれども、それは最早詩壇の先頭に立つたものとは言ふことは出来なかつた。薄田泣菫、河井醉茗、

それから蒲原有明が頻りに『獨絃哀歌』の高調を唱へてゐた。

『明星』のやつた仕事の中で、一番すぐれてゐるのは、何と言つても上田敏氏の西詩の紹介であつた。今でも『海潮音』のあくがれを記憶するものはかなり多い。

しかし上田氏の紹介は、やつぱり鷗外氏のやり方で——否、それよりも一層、キザで、人の知らない新種を披露して、そして喜んでゐるといふ風であつた。もはやあの時代は、ヨオロッパでも、あゝした『詩』をあゝいふ風に紹介したりする時代ではなかつた。もつと實際に深く深く入り込んでゐた。ボオドレイルとか、マラルメとか、ベルレーヌとか言ふ人達の詩だと言つても、決してあゝいふ風に、單に新聲とか新律とか言ふだけのものではなかつた。そこには現代の思潮と深く相觸れてゐたデカダンの苦痛が深くその中に織り込まれてあつた。

しかし『明星』の執つた藝術至上主義が、時代の趨勢をわきまへないものであつたにも拘らず、かなり當時の文壇を動かして、一時、小説が光を失つて、詩がこれに代つたやうに見えるのは、面白い現象と言はなければならなかつた。

そしてこの時分から、信州の小諸の島崎藤村が、詩から小説へと移つて行つたのである。か

これは『新小説』に『舊主人』を出し、つゞいて『明星』に『椰子の蔭』と『薬草履』とを出した。私もモウパッサンの一短篇をそこに譯した。

蒲原有明は『明星』の同人としては、かなり深い関係を持つてゐたらしかつた。そこに出した『獨絃哀歌』は、『若菜集』『暮笛集』などにつゞいて、長く詩壇に記憶されるべきものであらうと思ふ。

丁度、その時分、『明星』の社は、千駄ヶ谷にあつた。ある日、私は蒲原君と一緒にその近くの林の陰に生田葵山を訪うたが、つい誘はれて、その社を訪問したことがあつた。私は初めてその時寛氏と晶子女史とに逢つたのであつた。

ところが、此の時に際して、日本に取つて一大危険であつた日露戦役が勃發した。

世間は俄かに騒がしくなつた。もはや文藝などを言つてゐる時代ではなくなつた。舉國一致といふ聲の下に誰も彼も應分の力を盡さなければならなかつた。二月にはロシアの艦隊が日本の商船を陸奥の釧作崎で撃沈した。つゞいて旅順閉塞隊の壯烈な戦死があつた。都會も田舎もすべて熱病にでも取つかれたやうになつて、萬歳の聲が到るところできこえた。

私は博文館から寫眞班の一員として四月に従軍したので、その年のことはよくは知らないが、文壇では別に變つた現象もないらしかつた。唯、早稻田の島村抱月がその前年に外國から歸朝して、その新しく持つて來た知識を『早稻田文學』の復興に利用する運動があつた。それのものであつた。抱月はその第一號に『囚はれたる文藝』といふ文章を載せた。昔のロマンチックな感じはまだすつかり取りきれてはゐなかつたけれども、それでも何處かに新しい心持が動いてゐるのを誰も彼も認めた。

二十七

『何うも戦争といふものが、いつも文壇に一時代を劃して行くやうな氣がしますね』
かうBは言つた。

『さうですね』

『さういふと少し斷定にすぎるかも知れないけれども、日清戦争のあとに、鏡花だの、天外だ

の、風潮だのが出て来て、そしてそれが十年つゞいて、今度は日露戦争になつて、また新しい文學が起つて来たといふ形がありますね』

『それはさうですね。戦争がさうさせるわけでもあるまいけれど、矢張、國家的に大事件だからね？ 戦争は？ すべてのもものが、その境目にして發展するといふ形もあるんでせうね。ちようどしきりをして見せてくれるやうなものでせうね？』

『ちや、戦争がさういふ風に影響するといふわけではないんでせうか？』

『さ、戦争もいくらか影響するかも知れないけれど——それはするに違ひないけれども、さうでなくつても、新時代といふものは、あとからあとと出て来るものだからね。日清戦争以後にしても、日露戦争以後にしても、もう新時代が芽を出しかけてゐたために、さういふ風になつて行つたんですね』私は考へるやうにして、『十年一昔といふことがあります、あれがさうですね……』十年に一變する。十年毎にいろいろなものが變る。新しい時代の出来て来るといふことでせうね。箇人から言つても、お互ひにわかるのは、十年違ひぐらゐるもので、それ以上になると、お互ひに没交渉になるやうですわね？』

『それは人と人との關係ですか？』

『さう——だから、文壇だつて、十年経てば變る。新しい芽が出て來るといふやうなもんです。戦争があれば、いくらかそれを早く促すといふ形はあるでせうけれども、三十八九年から四十年にかけては新興文藝の意氣込があたりには満ちてゐましたからな……』

『さうするとつまり、日清戦争以前が紅葉、露伴、鷗外、綠雨時代で、その以後の十年が天外、鏡花、一葉などの時代といふわけですかね？』

かうBは話を一纏めにするやうにして言つた。

『さうきつぱりきめて了はなくつても好いけれども、さう言へば言へないことはないでせうね？ 三十五六年には、所謂新進作家であつた人達も、いやに元氣がなくなつてゐましたからね。相互の黙闘、暗闘に勞れて、田園生活論などが皆なの上に上つてゐましたからね？』

『さう、さう、さういふことがありましたね？』

かう言つたが、Bは考へて、『しかし、あれはトルストイの感化などがあつたためではありませんか？』

『それもあつてせうね？ 例の蘆花の田園生活などさうでせうね。しかし、そのトルストイの感化の奥には、矢張争闘に勞れた形があつたんぢやないでせうか。こんなにして都會に出て、互ひに牙を磨いて争つてゐては、とても落附いて作などは出来ない。それよりは、田舎に引込んでじつと落附く方が好い。主として後藤宙外などの唱へた議論です。そしてかれはそれを實行して、岩代の猪苗代湖畔に家を構へましたね』

『さう、さう——』

『しかし、そんなことを考へ出したといふことは、既にその時代の過ぎ去りつゝあつたことを表白したやうなものだつたんですね。その一期前には、『めざまし草』が新進作家退治をやつたが、その形は違つても、その心持は同じだつたんですね』

『さうですか』

『時代の推移を無意識に感じて來ると、何うしても、さういふ風になつて行きますからな。つまり何うかして流されたくないと思ふんですな？』

『さうですか？ そしてそれは、その潮流は何うしても避けることは出来ないんですな？』

『何うしたつて駄目ですな。誰だつて流されずにはゐられませんか。文壇はかりぢやない、あらゆることがさうですもの……。つまり盛衰の理ですかね？ さうなつて來ると、何んなにもがいたつて、何んなにあせつたつて、ドシドシ流されて了ひますよ』

『情けないもんですな』

『何うも仕方がない。平家の亡びて行くさま——大きい小さい區別はあるけれども、すべてあの通りですよ。外國の文壇などでも絶えずそれが行はれてゐるさうですからね。十年目ぐらゐに、文章の感じだの、氣分だのも變つて行くさうですからね。フランスのナチュラリズムなども、ユイスマンスあたりに行つて、全く一變して了つたさうですからな』

『では、かういふことですね。盛りになつたら、もう下りかけてゐるといふことですね？』

『それはさうですな……』

私はそれを自分に引當て、考へずにはゐられなかつた。

『それを流されずに、留つてゐることは出來ないでせうか？ 努力さへすれば——？』

私はそれを避つて、

『駄目ですな……』。とても人間の力では駄目ですな。努力で踏留ることの出来るといふのは、それはその大きな潮流の方ではないですな。その岸を流れてゐる小さな流の方ですな』
『情ないもんですな』

私達は目には見えないけれども、かうしてゐる中にも絶えず流れてゐるその大きな『時』の潮流を心に浮べないわけには行かなかつた。

二十八

最早その時には、文章とか文體とかいふことではなかつた。通とか意氣とかいふことでもなかつた。それは今日から見れば、さう大したものでもないやうに見えるかも知れないけれども、しかもその運動は全く内部的であつた。舊式な日本の慣習や、道徳や、形式や、思想や、趣味や——さういふものに對する破壊を含んだやうな運動であつた。

更に言ひかへれば、價値の顛倒であると同時に、徹底的に根本に入つて行かうとする運動で

あつた。そしてその影響は主として何處から來たかといふのに、言ふまでもなく、それはヨオロッパの世紀末の思潮の反映であつたと言つて差支なかつた。ニイチエにつゞいて、イブセンが入つて來た。ピョルンソンが入つて來た。中でも、ストリンデルベルヒの『ユリイ嬢』とその戯曲論、並びに『父』などは最も強く私達の魂を揺ぶつたものであつた。

『我』といふ思想、箇人を一番最初に知らなければならぬといふ思想、つゞいて人間を知らなければならぬといふ思想、飽までも強者であらねばならぬといふ思想、弱いといふことは罪惡であるといふ思想、父と子との争闘、夫と妻との争闘、新思想と舊思想との衝突、さうした種類の題目は無限にその前に展開されて來た。そしてその影響は、ロシア文學からも來れば、フランス文學からも來た。ドイツ文學からも來た。スカンディナヴィア文學からも來た。早稻田文學の島村抱月は、歸朝した當座は、まだロマンチシストの殻を脱却せず、右に行かうか、左に行かうかといふ逡巡を見せてゐるが——『囚はれたる文藝』などでは、たしかにさうした形であつたが、次第に時勢につれて、左黨の方へと傾いて來て、漸く『早稻田文學』の紙上に烈しい強い主張や議論を見るやうになつて行つた。

しかし、この時代に於て、かういふ風なことは言はれ得た。つまり、この新しい外國の思潮が入つて來るにつれて、それを何ういふ風に取扱はうか。純然とした藝術主義に取扱はうか。それとも實際的にそのまゝ、それを受入れやうか。或はまた學者的、紹介的に單にこれを傳へるやうにしやうか。それは人々に由つて、いろいろにまた區々まぢくに考へられたやうであつた。敢てさうした思潮に反對はしないまでも、それに深く乗り込まうとはせず、それはさういふものとして、穩かに研究しやうとした人達も澤山にあつたらしかつた。上田敏氏などの態度は餘程それに近かつたやうに私には思はれる。

かれはさうした人間の本能のあらはれの上にも、藝術といふ白い被衣びいをかぶせかけて、そしてそれを美しく見せやうと心がけてゐたらしかつた。かれはアナトオル・フランスなどの上品な皮肉な態度をその態度とした。従つてかれはゾラを嫌つた。モウパッサンでもその美しいところだけを取つた。ドストイェフスキイなどには餘り重きを置いてゐなかつた。かれに比しては、鵬外はそれほど色濃い藝術主義ではなかつたけれども、矢張實際問題に對しては、無關心な、學者らしい態度を取つてゐた。

また一方では、それを極端に持つて行つて、社會主義に結び附けて、そこに大きな波瀾を起さうと企畫してゐるものなどもあつた。その時分から、あの社會主義の人達はクロボトキンなどを讀んでゐた。

何と言つても、不整な、不定な、または混亂した思潮の氾湧であり、没入であり、盲進であつた。兎に角今までのものをすつかり改造しなければならぬといふ意氣込があたりに溢溢してゐた。

その時分、私達は何を讀んでゐたであらうか。試みにそれを此處に擧げて見るのも面白いであらう。私達はゾラを讀んだ。ツルゲネフを讀んだ。ドオデエを讀んだ。テオヒル・ゴウチエを讀んだ。ドストイエフスキイを讀んだ。ダンメンチオを讀んだ。ニイチエを讀んだ。カアル・ブライプトロオを讀んだ。マツクス・ステイルネルを讀んだ。メエテルリンクを讀んだ。ゲルハルト・ハウプトマンを讀んだ。ヘルマン・ズウデルマンを讀んだ。アルノー・ガルボルグを讀んだ。イブセンを讀んだ。ストリンドベルヒを讀んだ。トルストイを讀んだ。ゴンクウルを讀んだ。フロオベルを讀んだ。モウパッサンを讀んだ。アルノオ・ホルツを讀んだ。デエメル

を讀んだ。アルツウル・シュニツツレルを讀んだ。ヘルマン・バアルを讀んだ。ハルトレイペンを讀んだ。アリノウ・ウイルレを讀んだ。クヌウト・ハムズンを讀んだ。マキシム・ゴルキイを讀んだ。チエホフを讀んだ。アルツイバアセフを讀んだ。アンドレーフを讀んだ。クウブリンを讀んだ。

そしてその中から何んなにいろいろなものを捜し出したであらうか。また何んなに暗いものと悲しいものと凄しいもの思想と教義と氣分とを發見したであらうか。また何んなに暗いものと悲しいものと凄しいものと勇しいものとをそこに發見したであらうか。そこには私達の今まで夢にも想像しなかつたやうなことがあるはしなかつたか。心の底の底には人知れず、或は自分でも知らずに持つてゐたかも知れなかつたけれど、さういふものは深く藏しておくべきものであり、それを言つたり話したりするのは恥辱であると思つてゐることが、そのまゝそこに驚くべき光景を展開してゐはしなかつたか。或は人知れない暗い恐ろしい煩悶、或は地獄の中にもさういふものはあるまいと思はれるやうな、如何ともすることの出来ないやうな業火、或は地獄であらうと何であらうと、さういふ自己の生活を得た以上、その業火の中でも何でも突進して行かうといふ心持、或

は魂も粉齏されずには置かれなと思はれるやうな凄じい活圖、かと思ふと、男女の悲劇、戀の煩悶、三つ巴の死のやうな沈黙、さうしたものを限りなく、殆ど限りなく私達はそこに發見しはしなかつたか。また今まで罪惡と思つたことが少しも罪惡でなく、善と思つたことが少しも善でなく、苦しんだことが少しも苦しみに値ひせず、喜んだことが少しも喜びに値ひしなかつたことを私達はそこに見出しはしなかつたか。そしてその身はまだ實際の世の中には觸れず、いくらか觸れてゐても本當には觸れず、一時代先きの人達と異つた階級の人達のやつてゐることのみを斷續的に見てゐる私達は、そこに何んなに本の上での人生と實際での人生との上に一種の憧憬を感じたであらうか。無論、それは青年時代の憧憬とは違つて、暗い、物凄しい、或はまた怖ろしいやうなものであつたけれども、しかし勇しくそれに向つて突進しやうといふ大きな誘惑を、ぜすにはゐられなかつたのであつた。

今日にして顧つて考へて見れば、それはあまりに若々しさすぎてゐた。また本で見た人生に捉はれすぎてゐた。さうした人生の中にも、もつと深い不易な動かないもののあるのを知らずにゐたといふ氣がした。しかし勇しい心の態度であつたことは、今でもはつきりと肯定するこ

とが出来た。

二十九

日露戦争のすんだあとの日本は、光輝に充されたものであつた。東洋の一國は今や世界の一國となつた。もはや如何なる國にも恐れられこそすれ、侮られるやうなことはなくなつて行つた。

恐らく日本に取つても、これまでになつて行くのは、並大抵のことではなかつたに相違なかつた。一方では忍耐すると共に、一方ではつとめていろいろな文化を此方に持つて来るやうにした。

私は日露戦争役に従軍したので、いろいろなことを今でも頭腦にくり返すことが出来た。あの宇品、廣島の緊張は？ 間諜の入つて来ることを恐れて軍隊の状態を秘密にしたさまは？

第二軍の上陸地點から少し行つたところで、南下の敵軍に備へるために壘を築いた不安な状態

は？ 南山の戦鬪は？ ことに、あの首山堡の戦鬪は？ 彈藥の不足は？ 砲の不備は？ 日本は勝つたには勝つたけれども、とてもあれ以上戦争をつゞけることは出来なかつたではないか。全力を擧げて——死力を盡して、やつとあれだけのことをしたのではないか。

しかし兎に角、何は措いても、その中に入つた政治家の心勞は非常であつたにしても、ひとり手に展開されて行つた日本の社會の、國民の状態はまたすばらしいものであつたに相違なかつた。尠くとも日清戦争で目を覺したくらゐなものではなかつた。その十倍も二十倍も躍進した。

三十九、四十年、この二年は靜かに経過した。

その頃には、所謂大家達は何うしてゐたであらうか。紅葉が死に、乙羽が死んでから、硯友社にはもはや元氣といふものがなかつた。柳浪なども散々書いたあとを沈黙した。眉山は新しくならうとして煩悶したが、しかもそれは何うにもならなかつた。水蔭は博文館をやめてから田舎新聞にかくれた。露伴は露伴で、『天うつ波』に筆を折つてから、再び小説壇に出て來やうとはしなかつた。綠雨は日露戦役の初まつたばかりの時に、丁度旅艙の閉塞隊の悲壯な號外な

どの出てゐる時に、『今日小生死去仕り候』といふいかにも江戸の戯作者まがひの自筆の廣告文を新聞に出して、そして死んで行つて了つた。

鷗外はその前に、文壇から離れて、少くとも離れたやうにして、雑誌をも止して、九州の小倉の師團に軍警部長として赴任してゐるが——『末流文壇』などと言つて、傍から冷笑するやうな態度で文壇の方を見てゐるが、戦争から歸つて來た後も、別に大した運動を始めなくても、『萬年草』といふ小雑誌を起して、ひとりでいろいろなことを書いてゐた。

この他にまた坪内氏と二葉亭とがゐるが、坪内氏はその頃ではもう脚本も書かず、學校の方に力を注ぐといふでもなく、さうかと言つて、芝居の方へ打つて出やうとするやうな傾向をもまだはつきりとは見せてゐなかつた。しかし文壇では、その方面から、何等かの新しい運動が起つて來はしないかと思はれないでもなかつた。

この二氏よりも、二葉亭はもつと疎々しく文壇に對してゐた。『浮草』以來かれは翻譯といふ翻譯もしなかつた。戦時から戦後にかけて、東京朝日新聞社の社員になつたといふ噂はあつたが、別に小説を書き出さうとする氣勢も見えなかつた。

次に、所謂昔の新進作家で、その頃の大家であつた連中は何うしてゐたかといふのに、鏡花は依然として昔のまゝで、別に新意を出さうともせず、天外はわるく通俗的になつて、『コプシ』などでは、却つてそれまでに得た名聲をすら失墜したといふ形であつた。宙外もその頃では、議論や批評の方にその力を盡してゐるやうに見えた。

風葉だけは、それでも新しい氣運に後れまい、後れまいとしてゐた。何うかして新しいものを書きたい、昔の型を破つたやうなものを書きたい。かう言つてゐた。それに、かれには以前から『モウバツサン輓近派』らしいところがあつた。曾てはレルモントフの影響を受けて、『梢の花』を書いたりした。『涼炎』などには、モウバツサンらしい感化をもはつきり認めることが出来た。『青春』にも何處か『輓近派』らしいところがあつた。

島崎藤村が同じモウバツサンの感化を受けて、『薬草履』や『父』のやうな落ちついた、つめたい、何方かと言へば彫刻のやうな作をしてゐるのに對して、風葉が、『女髮結』『耽溺』『姉』などといふ作を出したのは、當時にあつては、ことに注目すべきことのひとつであつたに相違なかつた。それに、風葉は國木田獨歩と相知つてゐた。私や蒲原有明などとも交際をつゞけて

るた。

私はその時分、さうした人達とよくあちこちで會合をしたことを思ひ出さずにはゐられなかつた。一番町の英國公使館の裏のやうなところで、確か快樂亭と言つたと覺えてゐるが、その主人が英國公使館の料理番をしてゐたとか言つて、何でも非常に旨いといふので、有明君の周旋でそこで會をひらいたことがあつた。有明君は詩の方での大家、小栗君は小説の方での大家で、そこに生田葵山君や、柳田國男氏などのやつて來たことを私ははつきりと記憶してゐる。

それから龍土會——これはよく雑誌などにも書かれ、人にも知られ、新しく興つた四十二三年代の自然主義運動の搖籃とも言はれてゐるものであるが、これは一番先は國木田獨歩が始めたので、あそこはフランス料理で、繪畫の方の大家などもよく行くからと言ふのでそれでそこで會をしたのであつた。始めは何でも『風骨會』と呼ばれたと覺えてゐる。誰が印刷などさせたのか、その當日の献立表を見て、有明君が、『こいつは素敵だ！ 風骨會は素敵だ！』と言つて、例の哄笑をやつたことを私ははつきりと思ひ出すことが出來た。

私が戦争から歸つて來た後に、三十七年の十二月上旬に、そこで矢張會をしたことがあつた。

何故、それをはつきり覚えてゐるかといふのに、蒲原君がもう寒いのに、まだ袴を着てゐるの
で、『何うしたんです？ 薄着ぢやありませんか？』と言ふと、『いや、僕は成るだけ綿入をおそ
く着やうと思つてゐるんです。寒くなつてから着ると、好い心持ですから。その暖い心持を
楽しみたいんで、それで薄着うすぎをしてゐるんです』といふ答へであつた。その答を面白いと思つ
たので、それで私は今だにその會のことを覚えてゐるのであつた。

始めは國木田君は獨歩社の人を伴れて來てゐたらしかつた。私の出かけるやうになつてから
は、中澤臨川、小山内薫、蒲原有明、武林無想庵などがその常連で、小栗風葉、岩野泡鳴、柳
田國男などが段々やつて來た。生田葵山などもやつて來た。ある夜は小山内薫と小島とか言つ
た外國語學校出のフランス語出身の一年志願兵と、女のことでおもしろい雑當をやつたことな
どがあつたのを覚えてゐる。

しかし、その會合はさう大したものではなかつた。フランスのフロオベルやゾラのやつた會
合、あゝしたソサイテイに似たやうなものであつた。其處ではてんでに思ふことなく話した。
勝手に話した。外では言はれないやうなことまでも話した。獨歩や有明の聲はいつもあたりに

ひびいてきこえた。

岩野泡鳴は詩人としては昔からその名がきこえてゐた。『白百合』派の驍將で、いくらか『明星』派に對抗してゐるやうな位置にその身を置いてゐた。かれはその頃から小説の方へ打つて出やうとしてゐた。『何うしたつて、年を取れば、頭が散文的になるからな』などとも言つてゐた。非常な勉強家で、常に外國の書物を持つて歩いてゐるやうな男であつた。思想もかなりに新しい文藝の方に傾いてゐた。

かれはその時分、既に『半獸主義』を書いてゐた。その内、本屋から出させるから、是非見せて呉れ！ 十分に批評して呉れ！』と言つた。いかにも元氣で、あはゝと大きな聲を立て、笑つた。龍土會での二つの哄笑と言へば、それはいつでも泡鳴と有明とを指してゐた。

島崎君の始めてやつて来たのは、十四ぐらゐる會をやつてからのことであつたと思ふ。島崎君はその年の初夏に半分ほど出来た例の『破戒』を携へて、東大久保の鬼王神社のある通りを少し此方に来たところへと移轉して来てゐた。私は今でもはつきりとその通りにのぞんだ小さな家と思ひ出すことが出来た。二間きりで、書齋がなくて不便だと言つて、僅かな金で、トタン

屋根の三疊を自費で拵へて、そしてその年の暑い夏をせつせとその『破戒』に費してゐたさまを思ひ出すことが出来た。何といふ熱心さであつたらう。また何といふ眞面目な心持であつたらう。あゝした藝術への奉仕があつたればこそ、新しい本當のものが出来て行つたのである！

しかし、會に出て來ては、島崎君はあまり多く饒舌る方ではなかつた。大抵は沈黙してゐた。時には岩野君や、國木田や、または私などの言つてゐることに反對してゐるのではないかと思はれるやうなこともないではなかつた。もつともつと考へなければならぬ。かう言つてゐるやうに見えた。その意見を求められた時には、物でも挾まつてでもゐるやうに頼りに齒を吸ふやうにした。矢張多くは黙つてゐた。

一番多く饒舌つたり笑つたりしたのは、何と言つても岩野君だつた。よく國木田に冷かされてたりなどしてゐた。蒲原君もよく笑つた。

それにしても、私達は何を話したらう？ 何を論じたらう？ また何を研究したらう。今日思ひ返して見ても、別にこれと言つてはつきり頭に残つてゐるもののないのを見ても、それほど大切な研究はされはしなかつたであらうといふことが思はれる。要するに、皆なして、集つ

て、新しい文藝の提唱をやつただけであつた。

しかしかうした種類の會合は、新しい運動を起す上に於て非常に必要であつたことは争はれなかつた。それに、此時に於ては、文壇でのあらゆる勢力がすべて沈滞の境に落ちてゐた。硯友社は無論のこと、新たに出来て十年ほどその中心になつた鏡花、天外、宙外、風葉なども、いつか急な潮流に押し流されさうにしてゐた。「明星」の一派もその内証のために、何うするとの出来ないやうなハ、ハが入つて來てゐた。それに、いくらか倦きられても來てゐた。そして一方世間では、新しいものを期待する氣運が凄じくその底に渦を卷いてゐたのである。

それは丁度ドイツに職民自然主義がおこつて來た前に、ホルツやシュラアフやハウプトマンがベルリンの郊外に寄り集つて、新しい運動を起したさまに酷肖してゐた。また、フランスで、ゾラやドオテエやフロオベエルやゴンクウルが例の不遇文人會を起して、自分等の同じ寫實主義の旗幟のもとに集つたさまにも似てゐた。否、さうした運動と會合とは昔も今も絶えず繰返されてゐるのであつた。硯友社の會合もその一つであれば、根岸派、千駄木派、早稻田派などといふのも皆なその他の一つ一つであつた。自然主義の後に、白樺派が起り、人道主義が起り、

また更に、『新思潮』のもとに今の菊池、芥川諸氏の起つて來たのも、皆なさうした波濤の一起一伏と言はなければならなかつた。大きな波濤ではないか。また大きな潮流ではないか。

三十

それに、日露の戦捷といふことが、國民を覺醒させるといふことについて、非常に力があつた。誰も彼も皆なてんでに目覺めた。いつまでもこんなにしてぐすぐずしてはゐられないと思つた。世界的國民にならなければならぬと思つた。社會の反映といふものは、主として新聞にあらはれるものであるが、いかに自覺の精神の盛であつたかといふことは、その當時の新聞を見ればはつきりとわかつた。新聞は何の新聞でも新しい思想について議論を闘はせないものはないからであつた。

その時代に於て、一番強く私達の心を動かしたのは、ニイチエの箇人思想と、強者の觀念と、舊い慣習の打破と、價値の顛倒とであつた。私達は何を措いても、もつと本當にならなければ

ならないと思つた。人間が醜惡なものであるならば、その醜にも惡にも勇しく面して行かなければならないと思つた。一番いけないのは、妥協である。迴避である。臆病であると思つた。自己を打立てると同時に、他の自己をも完全に尊敬しなければならぬと思つた。また、ハウプトマンの『寂しき人々』にあらはれたやうな新舊思想の衝突といふことが、眞面目な兩性の頓悶といふことが、以前のロマンチックな色濃い感情に慥らずに、一舉にその本當の核心に迄入つて行かうといふことが、小デユマの『椿姫』あたりに見る人情的な形に低徊せず、もつと突込んで入つて行かうとすることが、『めざまし草』あたりで、新しいものとして紹介されたパウル・ハイゼあたりの女性觀に留つてゐずに、もつと解剖のメスを深く深く女に當て、見やうといふことが、絶えず私連の問題となつた。やがてイブセンが入つて來た。イブセンの社會劇をその時分に高安月郊が翻譯したことは、此處に特記すべき新しい事業のひとつであらねばならなかつた。

島崎君の『破戒』は、今日から見れば、やゝ通俗的などころがあり、ロマンチックな古いところがあり、わるく結構を構へすぎたやうなところがあつて、決してすぐれたものとは言ふこ

とは出来なかつたけれども、また人物の上から言つても、わるく拵へたやうなところがあつて、その後の『春』だの『家』だのとは、その本當といふ意味に於いて著しく劣つてゐるけれども、それでもその出版された時には、非常な期待と非常な同情とで迎へられたものであつた。それに、その形式に於ても、その措辭に於ても、またその着想に於ても、それまで世に出てゐた『はやり唄』だとか、『青春』だとか、『湯島詣』だとかいふものと全く異つてゐたので——かうも違ふかと思はれるくらいに異つてゐたので、當時中心であつた人達は、皆な目を睜つてこれを見ずにはゐられなかつたのであつた。

これに續いて世に公にされたのは、國木田君の『獨歩集』であつた。それは新に筆を下したものである、皆なその一二年乃至三三年以前に書いたものを集めた短篇集に過ぎなかつたけれども、しかしそのめづらしい獨創は、漸く世間に認められずにはゐないやうになつて來た。『讀者がすつかり變つたね？ 僕等のものでも、千や二千わけなく賣れるやうになつて來たよ』かう言つてかれが驚喜の聲を擧げたのを私は今でもはつきりと覚えてゐる。

かれは何方かと言へば、その作の世に迎へられることなどを信じてはゐなかつたのであつた。

『何うせ、僕等の書いたものが今の世間にわかるわけがない。鏡花や天外のものの迎へられる世間に容れられるわけはない。何うせ、傍流さ。傍流もいつわきに寄せられて了ふかわからない傍流さ。しかし、僕は僕のために書いてゐるんだからね。世間のために書いてゐるんぢやないからね？ 受ける受けないは、何うでも好いさ、それは問題外さ、そんなことには頓着しないさ——』かう常にかれは言つてゐた。『獨歩集』の初版には、序がついてゐて、それにはそれと同じやうなことが例の軽い調子で書いてあるが——その時にはあんなこと書かん方が好かつたなどと言つたものであつたけれども、今では、却つてそれが面白いものの一つに言はれてゐるのであつた。

しかしかれは不仕合であつた。その時にはかれは最早何うすることも出来ない不治の病をその身に持つてゐたのであつた。かれが一番多く書いた時代は、明治三十五六年で、『酒中日記』や、『悪魔』や『第三者』はすべてその頃に出来た。『牛肉と馬鈴薯』は三十三四年頃の作であつた。

かれに取つては、雜誌事業が、出版事業がその災禍をなしたと言つて好かつた。あゝした満

の中にかれが捲込まれなかつたならば——あそこから逸早く浮び上ることが出来たならば、かれはさう早くこの世から去つて行かなくとも好いのであつた。尠くともかれはまだ立派な大きな作をしたに相違ないのであつた。

しかし『獨歩集』を出した頃には、もはやかれは筆に親むことが出来なくなつてゐた。かれは纔かに『疲労』だの『帽子』だのを書いた。そしてその翌年——明治三十九年には、もはや何うすることも出来なくなつて了つたのである。

三十一

獨歩の死んだ時には、最早文壇は新しい思潮の流れの眞唯中にあると言つて好かつた。舊い時代はいつの間にか、——別に、力を要することなしに、いつかあとへあとへと捲き去られて了つてゐたのであつた。

茅ヶ崎の病院、あの松原の中の波の音、つゞいてあの東海道の六本松の中の焼場——それに、

その少し前に、川上眉山が丁度舊時代の滅亡のシンボルか何ぞのやうに、自から双を咽喉に當て、自殺したりなどしたので、世間は全く心を文壇へと集めて來てゐた。かれほど新聞の記事でその死を飾られたものはなかつた。

私はいろいろなことを思ひ出すことが出來た。眞山青果を。正宗白鳥を。岩野泡鳴を。小栗風葉を。茅ヶ崎館を。後に中村星湖が書いた『かれ等は踊る』のシインを。混亂と混亂！ 興奮と興奮！ そしてその時には、私は既にその前年の九月に『蒲團』を世に發表し、その年になつて、筆をあらためて、『生』を讀賣新聞へと掲載しつゝあつたのであつた。

私はまたこゝに三つの死を書かなければならなくなつた。前の三つの死と後の三つの死と。そしてそれを比べて考へて見るのも意味が深いことだと思つた。新しい時代の前には、屹度一つか二つの死のないためしはなかつた。眉山の死、獨歩の死——それにつゞいて二葉亭の死！ この三つの死は前の三つの死に比して更に深い深いいろいろな印象を文壇に興へずには置かなかつた。

私達は後になつてからも、この三つの死についてよく話した。

『矢張、川上君のは、新時代の壓迫といふ形があつたのかね？』

『それはさうだらうね？』

『さうかな？ さうすると、時代の壓迫といふものは恐ろしいもんだね？』

『何しろ、川上君は、何うかして先へ出たい、出たいと思つてゐたからね。このまゝ舊派と一緒に葬られて了つては残念だ。出来ることなら、新時代に出て、もう一度活躍したい。かう思つてゐたからね。だから龍土會などにもよく出て來たぢやないか？』

『それはさうだね？』

『でも、折角出て來ても、とてもその空氣に、新しい空氣に雜り切ることは出來なかつたんだね？ 矢張、その時代々々の修養と教化とがあるからね？ その證據には、龍土會に出て來ても、決して得意ぢやなかつたからね？』

『それはさうだな……』

『何を措いても、面白さうに、冴えてゐなかつたことは事實だ。川上君に取つては、昔、硯友社時代にやつたやうに、新しい空氣に雜り合ふことは出來なかつたに相違ないからな』

『さびしさうにはしてたね？　わるく顔が連中の中に白く見えてゐたやうな気がしたね？』

『だから、とてもこれはいけないと思つて、深く深く失望したんだ。それに、自分の筆にも信頼が置けなくなつて来たんだね？　いくら書いて見ても、思ふやうなものが書けない……：……かなつて来たので、それで、一思ひにやつて了つたつていふ形があるんだね？　それを思ふと、時代といふことは大切なことだね？』私は考へた。『僕だつて、矢張、その通り、既に流されかけてゐるんだからね？』

『何うも爲方がないな。こいつばかりは何うにもならんからな？』

『さういふ時は潔よく流されるんだね？　流されまいと思ふからいけないんだね？』

『それはさうかも知れない』

『風葉などでも、何うかして新しい時代に流されまい、流されまいとして、努力もすれば、新しい人達と交際もしたけれども、矢張、あゝいふ風に流されて了つたからね？』

『さう言へば、あの風葉が田舎に落附かうと思つて——もう少し考へて見やうと思つて、新橋を立つて行つた時に、その時に、向うから印度洋で死んだ二葉亭の焼いた骨（こほり）を載せた汽車が着

いたんだからね。それを思ふと、不思議な氣がせずにはゐられないね？』

『獨歩の死から、餘程してからかね？』

『その翌年、即ち四十二年の春ぢやなかつたかな？』

『さうかな？』

『何しろ、二葉亭だつて、さうだからな。あの時はもう時代に流されて了つてゐたからな。一體、ダンチエンコなどに誘はれて、ロシアに行かうといふ考へを起したといふことが、既に新しい時代といふものから離れてゐた形だからね。それは、二葉亭はいろいろなことを知つてゐた。新しい時代の作者、批評家以上に新しい時代に觸れてゐた。しかし、それは知つてゐただけで、決してその時代の人の心ではなかつたからね。それは今日、その晩年の作『其面影』『平凡』などを讀んで見ると、よくわかるよ。あの筆の中には、何うしたつて『江戸時代』があるよ。齋藤縁雨と共通したやうな『江戸時代』があるよ。趣味がさうだよ。考へ方がさうだよ。氣分がさうだよ。何うも寫方がないもんさね？』

『さういへば、さういふところもないことはないね？』

『言葉や詞句の使ひ方を見たまへな？ 何うしたつて、さういふところがあるよ』

『さう言へば、君だつて、誰だつて、さうだね？』

『それはさうさ』私はそれを承認せずにはゐられなかつた。『僕だつて同じことさ。皆なその時代々々の人さ。明治つ子さ。何うしたつて大正つ子にはなれやしないさ。現に、僕などでも、古い言葉を使つて、若いものに笑はれてゐるからね？』

『心細いね……？』

『だつて爲方がないやね。皆なさうなんだから……。唯かういふことはあるね。時代に長く生きやうと思つたら、成るだけ豪くならないことだね？ 人が豪くしやうとしても、それに乘らずに引込んでゐるんだね。十のものなら、二つか三つぐらゐるところで引込んでゐるんだよ。そして成べくそれ以上に出て行かないやうにしてゐるんだよ。さうすれば、比較的長くその時代に生きて行かれるだらうね？』

『さうかね？』

『その例には、徳田秋聲氏がある。あの人は、さうでなくつても、すぐれた、精悍な、努力家』

だけでも、意思があつてさうしたのか、否か、それはわからなかつたけれども、兎に角比較的長く時代に生きてゐる。かれは今でも立派な作者である。つまりあまりに社會に迎へられずに、地道にやつて來たところに、その長くつゞいてゐる理由がある……」

『さうですかね？ さういふことがありますかね？』

『だから、あまり歓迎されるのは好し悪しだね？ 一どきにやつて了ふよりも、なしくづしに少しづつ、迎へられて進んで行く方が好いね？……』。何と言つても、文壇では、好い氣になるといふことがいけないね。有頂天になれば、すぐおつはり放り出されて了ふね。田村俊子なんか、その例としては好い例だね？』

『でも、あれは名よりも戀を選んだといふ形でせう？ そして意識して文學を捨てたんでせう？』

『それは結果さ。止むを得ず、さうなつて行つたのさ……。文壇といふところは、それでもまださう大して輕薄ではないけれども、社會と來ては、隨分薄つぺらだからね。平氣で蹴落して了ふからね。有頂天で好い氣になんかなつてゐると、すぐさういふ眼に逢ふからね。そして

一度逢つた以上、もう浮ぶ瀬はないと思はなければならぬからな？ 矢張、餘り即きすぎるといかんよ』

『それはさうだらうな』

『その點に行くと、島崎君や、徳田君はしつかりしてゐる。』

こんな話がそれからそれへと際限なく出て行つた。

三十二

二葉亭がインド洋の真中で死んで行つたことは、後の『三つの死』の中では、ことに深く私の胸に印象されて残つた。それは眉山の自殺もいろいろなことを私に思はせないではなかつた。獨歩の死も新時代の潮流といふことを染々と深く私に思はせた。しかし二葉亭の死が一番そのさびしさを私に誘つた。

聊くともそこにルウジンがゐた。ペチヨリンがゐた。バザロフがゐた。眞面目に考へ、眞面

目に書き、そして最後に眞面目に死んで行つた『江戸時代』の魂があつた。縁由は死去廣告などを新聞に出して、いかにも江戸文學の落武者らしい死方をして行つたが、二葉亭はそれとは別に、その持つたルウジンやベチヨリンやバザロフの魂すら亡びて行くのを知つてゐるやうに、怒濤の音を耳にしながら、靜かにさびしく死んで行つて了つた。

私はシンガポールのさびしい山の上で、二三の人達とそこゐた僧侶とに護られて、焼かれて骨こつになつて行つたかれの最後のサインを胸に描かすにはゐられなかつた。

三十三

徳田秋聲氏は硯友社出身であつた。例の横寺町の紅葉山人の家塾——庭からすぐ行けるやうになつてゐる二階建の家塾の中で、風葉、春葉、白峰など、一緒に暮した文學青年のひとりであつた。何でもかれは金澤から桐生悠々など、一緒に出て来て、そして蕪社の群の中に入れて貰つた。それにも拘らず、硯友社の江戸趣味——都會趣味は、その感化を十分にかれに與へる

ことは出来なかつたらしかつた。

それにかれは蘆社の連中に比して、學問があつた。英語にも通じてゐた。その當時口によつた外國の作家の作品を読むことも出来た。それに、割合に煩悶の多い、思慮の深い青年であつた。同じ遊ぶにしても、風葉春葉など、はおのづから選を異にしてゐた。

かれも矢張私達と同じやうに、『しがらみ草紙』の翻譯を読んだり、『文學界』を読んだりしたひとりだ。私の記憶では、『文藝俱樂部』に『紙柑子』といふ小説を掲げて、ちよつと評判が好かつたのが、一番最初であつたやうに思はれる。今でもさうのやうに、その作には何處かしつかりしたところと暗いジミなところがあつたやうに覺えてゐる。

かれと春葉とでは、無論春葉の方が評判が好かつたやうだ。私などでも、春葉の方が好くなくりはしないかと思つたくらゐである。春葉の筆には、何處か人好きのするところがあり、それに、深く家庭の心理に入つて行くやうな長所を持つてゐた。それがあべこべに、春葉は段々家庭小説家の安きに就き、秋聲は『雲の行方』あたりから次第にその實力を認められて、通俗がかつたやうな作品を常に發表してゐたのにも拘らず、段々その堅い地歩を文壇に占めるやうに

なつて行つた。

それはもう餘程後のことであつたが、ある批評家はある時かれをドイツのヘルマン・パングに比した。つまりそのジミな堅い手法と何處かねばりの強いところのあるのを比べたのである。成ほどさういふところがある。その短篇などにも、その構造に於て、その感じに於て、小ぢんまりした形に於て、何處か似たところがないではなかつた。作中人物の描き方などに於ても、何處か類似した點があつた。

性格描寫といふこと——それは誰あたりから一番多く言はれたかといふのに、早稲田側、即ち坪内氏あたりが一番先きにそれを言つたやうであつた。硯友社では、紅葉はあまり性格描寫と言ふことを言はなかつた筈だ。硯友社でもし言つたものがあるとするれば、柳浪が一番多くそれを言ひはしなかつたらうかと思ふ。しかし、それは措くとして、何しろ一時性格描寫といふことが非常に喧しく言はれたことがあつたのを私は記憶してゐる。性格が書いてゐなければ駄目だ。性格が眞に迫つてゐなければ駄目だ。『だつて、いくら自然がよく書いてゐたつて、キヤラクターが書いてゐないぢやないか』かういふ風な批評がよく批評家の口から出た。その時分

には、コンポジションだとか、コンストラクションだとか、気分だとか、さういふことについてはあまり多くは言はれなかつた。何でも宙外、抱月あたりが頻りにこの性格描寫を論じたらしかつた。

齡くとも秋聲氏はその中から出て來たやうな作家であつた。かれははつきりと人間を描き出すことが上手だ。はつきりと性格を浮び上らせることが上手だ。つまりその時代の文壇の空氣がよくかれを導いたのであつた。またかれの方から言つて見ると、その性格描寫論の好いところをかれは取つて、そしてそのために他の自由を失ふやうな愚に陥らなかつたのである。この點でもかれはヘルマン・バンゲに似てゐると言つて差支ないのである。

『さうだね。徳田君は、何んなつらい空氣の中にも、容易に碎けることのないやうな人だね。大丈夫な人だね。しつかりしたところのある人だね』

かう私達はかれについて言つたことがあつたが、實際、かれなればこそ、秋聲氏なればこそ、親友社の群の中から新しい時代の巴渦の唯中に出て、流されも碎かれもせず今日までやつて來たのであつた。愚痴を滴しながら、いろいろな潮流にも壓倒されずに、此處までやつて來た

のであつた。私はそれを大變に面白いと思つた。

かれは風葉が田舎に歸つた頃から、頻りに新意を出さうとして苦心した。その頃のにも、いろいろな作があつたが、金港堂の『文藝界』の誌上に載せた『春光』などは、ことにさういふ意味に於て骨を折つたものであるらしかつた。

三十四

『それでも、獨歩のものは、さう舊くはならないやうですな』

『時』が誰でもその作品を皆な古くして了ふといふ話が出た時、かうSが言つた。

『さうだね?』

私は頭を傾けて考へて見ずにはゐられなかつた。

『何うもさう思ふ? 二葉亭のものでも、一葉のものでも、縁雨のものでも皆なもう讀めなくなつてゐるのに、獨歩だけは、今でも青年の手から離れないやうですからな』

『それは時代がまだ浅いからではないですか。もう少し経つと、矢張、さうなるんぢやないですか？』

『何うもさうではないやうですがな？』

さ は考へながら言つた。

『圖説には旨いところがある。清新なところがある。型以上のところがある。私達も、そのフレンシなものには、いつも感心してゐたんですからな……。何うも國本田のものは新しい……。かう言つてゐたんですからな……。しかし、『全集』を編む時に、すっかり通讀して見て、私はかう思つた……。』

『何う？』

『何うもまだロマンチツクだ……。醜いものとか、悪るいものとか、さういふものには成たけ目を呉れないやうにしてゐる。そして、何うしても目を呉れなけりやならないやうな場合には、それをいくらかキューモア化してゐる。観してゐる。そこが飽き足らない。そこに矢張、これの生きてゐた時代がある。時代の影響がある。本當にナチュラリズムの時代になつたのは、

かれが死んでからだね？」

「それはさうですね。しかし、私の言つてゐるのは、さういふことを言つてゐるのではない。本質的であつたことを言つてゐるんですが——？」

Sは遮つて言つた。

「それはたしかに、本質的には好いところがあつた。しかし、時代の影響といふことも大きいからね。それに、全體の感じが大陸的でない。所謂『モダニスト輓近派』でない。その背景は、何うしてもイギリス文學で塗られてゐる。しかもそのイギリス文學も近代ではなくて、ウォルズウオルス、バイロン、バアンスあたりの詩人の心持で塗られてある。バイロンなどはことにその影響が深かつたやうに思はれる。一時、ロシアの文藝に、バイロンの影響の夥しい時代があつたが、それはレルモンツフあたりであるが、さういふ形からかれはロシア文學の方へ入つて行つたんだ。ツルゲネフなどにもさういふ方から入つて行つた。だから、全體に、何處かモラル・トオンがある。イギリスの紳士らしい堅實さがある。とてもその中にはフランスやイタリーのあの頹廢や自由や倦怠や不健全を見出すことが出来ない。ロシアでも、チエホフあたりの味はい

くらかその作中に見出すことが出来るけれど、ドストイエフスキイやゴンチャロフやアルツイ
パアセフや、アンドレイフの味は見出すことは出来ない。だから、十九世紀末の新しいデジエ
ネレイションをその作中に求めることは出来ない』

『それはさうでせうな？』

さは何か言ひたさうであつたが、そのまま黙つて了つた。

『その證據には？』と私はつゝけた。『先生は餘りゾラを好きでなかつた。あの暗い描寫などを
好まなかつた、何もあんなにまで退屈な、イヤな寫生をしなかつたつて好きさうなものだ！』

と言つてゐた。モウパッサンもあの肉慾的な部分はあまり好きでなかつた。何方かと言へば、
モウパッサンよりはチエホフの方が好きだつた——しかし、さうした新しいデカダンの思潮の
面影はないことはない。それは何處かにある！』

それはしかしさういふ風に獨歩を評するのは好まないらしかつた。時代の潮流以上に群を抜い
てゐる作家のやうに評したいらしかつた。ゾラなどは何うでも好いではないか。自然派の影響
などは何うでも好いではないか。デカダンの感化などはあつたつてなくつたつて好いではない

か。獨歩の光つたところは、もつとその上にある！ かうSは思つてゐるらしかつた。

『さういふことになれば、それは別問題だよ。もつと『時』が經つて見なければわからないよ。少くとも百年や二百年は經つて見なくつては—？』かう私は言はずにはゐられなかつた。『しかし、かういふことは言はれ得るね！ 新しい短篇小説の祖であつたといふことは、それはたしかに言はれ得るね』

『でも、短篇の祖は何うだかな？』Sは遮つた。

『だつて、さうだもの。それはその前にも短篇を書いた人はあるよ。紅葉、眉山、水蔭などこれに多いよ。しかし、僕のいふ意味での『短篇』、つまりドイツでいふ單稗ノヴェル、フランスでいふノベエレの形を成して來たのは、何と言つても獨歩あたりからだからね。水蔭や紅葉の短篇、それからやゝ下つて鋪花や風葉あたりの短篇は、まだ形をなしてゐないと言つて好いからね？ 實際、外國だつて、さうなんだからな。短篇の發達して來たのは、さう大して古くないからな。百年と經つてはゐないんだからな。フランスあたりでも、新しい短篇の祖としては、バルザックやドオデエあたりを推してゐるんだからな……』

『さう言へば、さうも言はれないことはないでせうね』

で、8との對話はおしまひになつた。私はつゞいて獨歩の作品について考へて見た。成ほど8の言ふやうに、今読んで見ても面白いであらうと思はれた。漱石のものなんかに比べては、獨歩の方が何うしたつて本質的のところを餘計に持つてゐた。かれの作では、『酒中日記』『悪魔』『牛肉と馬蹄薯』『疲勞』『第三者』などを私は面白いと思つた。

三十五

獨歩とお信さんとの戀も、文壇的事實として特記して置かなければならないものであると思ふ。勿論、表面から言へば、それはかれの一私事である。文壇的には何等の交渉を持つてゐないことである。まださうした戀はその他にも澤山にあつたことであらうと思はれる。しかし『獨歩書簡』の中にある數通の手紙と、『歎かざるの記』の中の數節とは、それからの文學青年に、いろいろな意味に於て感動と共鳴とを與へたであらうと思ふ。

獨歩は尠くともあの戀に於て生命をかけたのであつた。まだ世の中のことも多く知らない娘に取つては、ある點では脅迫と思はせるやうな烈しい戀をかれは戀ひしたのであつた。かれは後年その戀についていろいろに言つたが、その中で、『とてもお信さんには、僕のやつたやうな熱烈な戀を受けることが出来なかつたんだね……』と言つた言葉が、一番眞に近い言葉であつたと私は思つた。あの戀は女の方が逃げて行つたが、それはいやになつて遁けて行つたといふよりは、怖くなつて遁けて行つたといふ方が適當であつた。『この人にくつゝいてゐると、どんな目に逢ふかわからない』かういふ風にかの女は思つたのであつた。『懷妊したのを知らせれば、とても離れられなくなる。離れるなら今だ！』普通なら、女が懷妊すれば、何うしたつて男に廻つて來るのが順序であるのに、『それを知らせれば、とても離れることは出来ない』と思つて遁け出して來たのだから、餘程恐しく受け難くその戀を思つたに相違ないのであつた。しかしそれは無理はなかつた。相手はまだほんの小娘であつた。

しかしかれに取つては、それは十分であつた。かれはそれからいろいろなことを學んだ。いろいろなことを味つた。男女の深い深い苦しみ、そのためには一方が一方の胸に刃を當てずに

はゐられないやうな深い苦しみをかれは味つた。かれの頭はそのためにがらんとして了つた。それを慰める友達がなかつたなら、かれは狂死したかも知れなかつた。そして私とかれとの交遊は、丁度そのかれの苦しんでゐる時から始まつた。かれはその苦しみを抱いて、澁谷の丘の上の一軒家に弟と共にゐた。

私ははつきりとその時分のことを思ひ出すことが出来る。紅葉の粧點された斜坂の上にかれがほつねんとして立つてゐたさまを。何うにも彼うにもならない苦惱を抱いて、日當りの好い縁側に腰をかけてゐたさまを。またてくてくと竹の根の杖をついて、澁谷の道玄坂から坂の上へのほつて行つたさまを。かれはそこで、その丘の上のひとつ家で、始めて小説を書くことを思ひ立つたのであつた。

で、私達は日光に行つた。そこで二月を過ぎた。この間に、かれは犠牲的愛といふことを考へた。自分等の愛は世間的の愛であつた。そのためにわけなく壊れた。その壊れるのに決して不思議はない。かうかれは思つた。かれは金剛不壞の戀といふことを考へた。『獨歩詩集』を繙くと、その間の消息がはつきりと手に取るやうにわかつた。

壞しても壞すことの出来ないやうな戀、それでなくては駄目だ。世間のために、通り一遍の世間のために壞されて了ふやうな戀——何故自分の戀はそんな戀だつたか。かれはそれを考へると、情けなくて爲方がなかつた。かれはその二月の僧房生活でいろいろなことを學んだ。かれは初めて『源をぢ』といふ作を書かうと思ひ立つた。

残されたかれの作品の中には、それを書いたとおもはれるものは、あまり澤山にはないけれども。——『おとづれ』などにいくらかその形を見せてゐるくらゐであるけれども、それは表面だけで、その底には、その悲しみが、犠牲的愛が、底の底まで行つた心持が、何うにもならない苦しみが地下の泉のやうに烈しく流れてゐるのを私は見落すことは出来なかつた。尠くともかれの作には、底の底の悲しみに觸れたものゝみを知る犠牲的愛といふことが大きく深く横つてゐた。そしてそこからかれの病氣とかれの死とが來たやうな氣がした。

獨歩に限らず、作者の内部の生活と言ふものは、文學史家の特に深く注意を拂はなければならぬものであるのは言ふを待たないことであつた。硯友社時代には、作者が自己の生活をあらはに表面に出すことを嫌つたゝめ、またはモデルがあつても、成るだけそのモデルに迷惑を

かけない程度に鏡をかけた、めに、作者の内部の生活も奥深くかくされてあるやうな形になつてゐたけれども、それでもいろいろなきことがあつたのは私達にはわかつた。何んなに鏡しても、仔細に見れば、その中からその本體がはつきりとあらはれ出して來た。『多情多恨』の中にある柳之助の孤獨は、妻にわかれた孤獨のさびしさでなくて、女にわかれた孤獨のさびしさであらねばならなかつたのであつた。

惜しいことには、その時代には作者は本質的といふことの尊さを十分に知つてゐなかつた。

三十六

文藝が「本當」といふことを重するやうになつてから、始めてモデル問題が喧しくなつて來た。

つまり作者が眞に迫る程度といふことを益々緊要にして來たからである。今までの程度の寫實、好加減に鏡をした程度の寫實——外國で言へば、ドイツではパウル・ハイゼ、フランスで

は小デユマの生温い、また赤く爛れた第二義的の寫實には甘んじてゐることが出來ずに、ドシ
ドシ事實に向つて内迫して行つたからである。つまりハイゼの後にアルノオ・ホルツがあらは
れ、小デユマの後にゾラがあらはれて來たと同じやうに――。

モデル問題は、島崎君あたりから起つた。もつと前にもあるにはあつたけれども、それは唯
困つたことだからで、別に大きな問題にはしてゐなかつた。また讀者の方でもさういふこと
をあまり問題にして小説を読みはしなかつた。更に詳しく言つて見れば、小説は小説として讀
者が讀んだ。従つて小説には小説らしさのあるのが好かつた。いかにも小説らしいといふ形が
第一に讀者の興味を惹いた。つまり、作者の方でも鍍をしてゐたと共に、讀者の方でも、その
鍍をされることを喜んだのであつた。従つてモデル問題などは起りやう筈がなかつた。

であるから、一時新しい寫實に慣れない人達は、『此頃の小説は何だえ？ あれでも小説か
え？ あんなに詳しく書く必要が何處にあるんだえ？』など、言つたものであつた。

『成程、さうだつたらうな』

私の話をきいてゐた五は傍から言つた。

『だから、モデル問題などは漫然起つて来たもんではないんだよ。ちやんと理由があるんだよ』
『本當だね』

『つまり、作者の方で、何うしても本當でなければいけない。真に迫つたものでなければ何うしてもいけない……。さういふ風に思ひ出して来たんだね。更に言ひ換れば、今までの生澁い小説化などに甘んじてゐられなくなつたんだね。それでひとり手に本當のことを書くやうな形になる……。さうなると、不思議なもんでね、名前さへ變へるのがいけないやうに思はれて来るのだからね。だから、困るよ』

『それはさうだらうな？』

『岡本田などもさう言つてゐたよ。だから、僕は本當の名で書く。さうすると、不思議に旨く書けるんだよ。その人が目の前にあらはれて来るんだよ。で出来たあとで、その名だけ取替へるやうにしてゐるよ。かう言つたことがあるがね。そんなもんだよ、作者に取つては——』

『それはさうだらう？』

『さういふ風に、真に迫る度數の向上されて行つたのは、硯友社が意氣地がなかつたからでも』

あるけれども、一方に正岡子規など、いふ人がゐて、畫の方から來たデッサンといふ意氣込で、頗りに寫生文をつくつた——今までの文章の型をすっかり破つて、「ほとゝぎす」獨特の寫生をやつた。あれなども、人に由つては、なアに、あんなことは、影響はないと言ふものもあるかも知れないけれども、僕はさうは思はない。あれも矢張、眞に迫る運動のひとつだつたと思ふね？』

『僕も同感だ』

かうKは言つた。

『しかし兎に角、モデル問題をも起すくらゐにまつしぐらに眞に迫つて行つたあの運動のチャンピオンは、僕等の連中だからね。それだけは誇るに足ると思ふね。硯友社、藻社の寫生は、あの爲めにひつくり返へされて了つたやうなものだからね』

『でも今日では——？ 今日から翻つて見ては？』

Kはかう言つて私の顔を見た。

『今日だつて、あの功蹟だけは認めなけりやならないよ。今の寫實でも、僕等のやつたことに

負うところはないと言へないからな』

『それはさうかな？』

『それはあとからいろいろなものが出て来て、有象無象が出て来て、折角やつたものをわるく別な方に持つて行つたり、わざとそれを誇張して却つてその本當の目的に遠ざかつて了つたりしたのものはないではなかつたけれども——しかし、その功蹟は没することは出来ないよ』

『一番始めは、島崎さんかね？ 矢張……？』

『さうだと思ふね。『舊主人』と言ふのがあつたアね。『新小説』に出た』

……。あれなん

か、信州の小諸の、自分のつとめてゐる校長の家庭のことを書いたも

ナ

れの發賣禁止

になつたのは、文句にわるいところがあつたばかりぢやなかつたつていふから！ 丁度檢閲官に、そのモデルのことを知つてゐるものがあつて、けしからん！ と言つて、そして發賣禁止にしたんだつていふことだからね？』

『さうかね』

『何しろ、あの時分は、官憲の壓迫といふことも、今とはぐつとひどかつたしね。』

『ひどいことをしたもんだね？ それから……………』

『それから、あの「水彩畫家」が問題になつたアね？』

『さう、さう——』

『あれはあの作の出た時ではなかつたけれど——何でもずつとあとだ、……つたが、あのモデルになつた畫家が自分でそのことの迷惑を書いたものだから、それで問題になつたんだね。あの時は、岡木田もそれについて何か議論してたよ。モデルなんてだまつて引……るもんだ……。いくら作者がモデルを實在に取つたにしても、一度藝術品にな……れはもう實在のものではない。作者自己の空想中のものだ……。何だ、その男は給かきたつて言ふぢやないか。それでゐて、そのくらゐのことがわからないのか？ かういふ調子で議論してゐたのを見たことがあつたよ。』

『さうでしたかね？ 鳥崎さんも何か書いてゐましたね？』

『「破滅」のモデル事件さ……………。あれもその給師の攻撃に答へたものだよ』

『それから、馬場さんとやつたことがありましたね？』

Kは笑ひながら——あの時だけは流石に島崎さんも困つたやうだつたといふやうに笑ひながら言つた。

『「並木」かね?』

私も笑つた。

『あれは、馬場さんの方にも理屈があつたやうでしたね?』

『何せ、あれは、あまりにロマンチストにしてつたからね。』並木の主人公が馬場さんと言ふよりは、作者自身と言つた方が好いからね……。つまり、モデルになつた方でもさう言ふんだよ。いくら書かれても、それがすつかり自分の通りなら好い。一步を譲つて、自分、背かされる程度なら好い。それなら我慢する。しかし表面だけ自分で、自分のやつたことで、あとは作者ではそれでは困る。丁度パノラマで實物を前だけに並べたのでは困る。かう言ふんだよ。僕なども、柳田君によくさう言はれたよ。つまり眞に迫れば好いわけなんだ。眞に迫れば、モデルは口を利けなくなる筈なんだ。ところが、眞に迫るといふことは理想で、容易にそこまで達せられんからね。』

『それはさうですな』

『そればかりではない、後には、さういふ人達——親友であつた人達、作者の周圍にあつた人達も懲りて、書かれるのが恐いので、作者の傍に成るたけ寄らないやうにする。寄つても、本當のことは話さないやうにする。と、ひとり手に普通の人達から別物扱ひにされる。あれは人間の種類が違ふのだから、成るたけ傍に寄るな、本當のことを話すなといふことになる。ひとり手にその周圍がさびしくなる。と、それに引つゞいて、例のフロオベルとジヨルジ・サンドの手紙の中にあるやうに、同情といふことが好いとかわるゝとか、半神の態度で物を書かなければいけないとか好いとかが、またメレジコウスキイの『フロオベル論』の中にあるやうな解剖、觀察といふことから入つて行く人間の孤獨といふことになつて行くんだね。トロハアドルといふ人種のやうに、生き残つた種族などと言はなければならぬやうなさびしい心境に入つて行かなければならぬからだからね？』

『それは困るね？』

『眞に迫るといふことは、矢張程度の問題なのかも知れないね。自然は人間から眞に迫まれる

ことを好まないやうに出来てゐるのかも知れないね？」

『成ほどね』

Kは深く考へるやうにした。

『何うもさうらしい……』私も手を拱くやうにして、『さういふ風に出来てゐるのらしい。眞といふものは容易につかめないやうに出来てゐるらしい。たとへて言つて見れば、本當をつかまれると、自然は困るのかも知れない。人間そのもののためにもならないのかもしれない。従つて絶対に眞に迫るといふことは不可能なんだね。しかしその時分には、そんなことは考へてゐるはしないからね。出来るだけ、眞に迫らう！出来るだけ本當のことを書かう！かう思つてゐるんだからね。少しくらゐ友達に怒られたり何かしたつて、何とも思つてゐなかつたんだね？それが新しい藝術家の行く道だ！さびしい道ではあるけれども、それが本當だ……』

さう思つてゐるんだからね。だからかなりに強氣で押し通して行つたもんだよ。何方かと言へば、傍目を觸らずにそつちに向つて進んで行つたやうなもんだね？そしてその揚句が「實行と藝術」乃至「半神となるの可否」まで進んで行つたんだからね。我々も矢張、フロオベルの

入つて行つたやうなところに入つて行かなければならなくなつたんだよ」

『成ほど、さういふ風に辯解して來ると、モデル問題も非常に大きな藝術問題になつて來るんですね？』

『それはさうさ、「實行と藝術」といふあの大問題の一分派になつてゐるんだからね？』

『つまり、さうすると、何にもない、ひろい新しい野だと思つて入つて行つたところに思ひもかけない絶壁があつたわけだね？』Kは私の顔を見て言つた。

私もその時分のことを考へて見ないわけには行かなかつた。私達は唯鶯地に進んだ。今が時だ！ かういふ時にぐづぐづしてゐては駄目だ。かう思つて進んだ。それは今日考へて見ても勇ましい態度であつた。私達は決して躊躇逡巡しなかつた。

私ははつきりとその時のことを思ひ出すことが出來た。いつの間にか世間に迎へられて——氣のついた時には、もはや世間の巴渦の唯中にある、あちこちから新しいチャンピオンのひとりとして見られてゐたことを私は思ひ起した。それは丁度私が『生』を書いてゐる時分であつた。私はその時だけは全力を盡した。

島崎君ばかりではない、私に取つても、モデル問題は、かなり煩さい、重要なものであつた。『蒲團』では私はいろいろことを考へなければならなかつた。人間ひとりの魂の生且死を考へなければならなかつた。昔の道徳から來る責任をも帯びなければならなかつた。しかしそれよりもつとつちかつたのは、『生』に於ての母親の直寫であつた。私はそこで始めて實際と藝術との間に深く挟まれたやうな氣がした。私はフロオベルの場合などを考へた。恐らく今ではとてもあつた解剖は出来なかつたであらうと思はれる。その後モデル問題に出會す度に私は言つた。

『だつて、しやうがないよ。僕にはさういふ内部の要求があつたんだから。母親をすら、僕はその解剖臺に上せたんだから……』

『では、さういふ意味で、モデル問題は何うも寫方がないのかね？』

Kは問うた。

『知らん……』私は頭を振つて、『好いとかわるいとかいふことは、容易に言へないぢやないかな。そのモデルのつかひ方如何に由るんではないかな。だから、その問題は好いとかわるいと

が一概にきめて了ふものではなくて、ひとつひとつの場合に由るんぢやないかな？」

『さうかな？ それにしてもずつとあとのことだが、「新生」などの場合は何うなるんだな？』

『わからんな』

私はかう言ふより他爲方がなかつた。

『つまり、作をしたといふことに由つて、その不道德が消えるつていふわけかね？』

『わからん！』

私はまた繰返した。

三十七

小説が小説らしさを失つて來たことについて、または眞に迫らなければならぬといふことについて、『眞とは何ぞや』と言ふことに就いて、かなり辯難攻撃が盛であつたことを私は思ひ起すことが出來た。後藤宙外などはことにこの點に於て深く攻撃の矢を放つて來た。

しかし、實際から言ふと、いろいろなことが内部にあつたのであつた。黨派と黨派とが争ひ、夥伴と夥伴とが闘いだのであつた。何んな場合にも、常にさういふことはあるものであるが、時が経つて見れば、何んだ！ 馬鹿々々しいといふやうなものであるが、兎に角種々な關係と力と力との消長が一時凄じい波を擧げたことは事實であつた。私はその場合に於て硯友社の人達の全く退嬰的であつたのを見た。藻社の人達の引込思案であつたのを見た。それでも天外などは、孤獨であつただけに、新しく生れ更らうと努力した跡が見えないではなかつたけれども、矢張、風葉と同じく時代の波に押し退けられなければならなかつた。

宙外と抱月との關係も少しは此處に書いて見る必要があつた。かれ等は同期生であつた。また同人であつた。一時は全く仲の好い友達としか思へなかつた。尠くとも宙外が『新著月刊』をやつてゐる時には、抱月は全力を擧げてそれに手傳つたひとりであつた。しかし二人は次第に離れた。宙外が小説をやるために——或はそれ以上の意味のために、早稻田から硯友社、ここに紅葉に近寄つて行くにつれて、それと反比例をなして、抱月は次第に新しい文藝の方面へと近寄つて行つた。ことに、海外に行くやうになつてから、一層さうした形が顯著になつて

行つた。

紅葉の晩年乃至新文藝復興までの間では、宙外は評壇では、かなりにその重きをなしてゐた。かれは樗牛と長い長い論戦をしたりした。千駄木よりは早稻田に参したやうな態度で、毎月『新小説』にその筆を振つてゐた。小説の批評なども度々やつたことがあるやうに私は記憶してゐる。

抱月が海外から歸つて、『早稲田文學』を改革し、その巻頭に『囚はれたる文藝』を掲げた時には、まだその態度は右に行くか、それともまた左に行くか、ちよつと判断に苦しむやうな形であつたが、その周圍を取巻いた人達に新しい分子が多かつたのと、何うしてもさういふ風に出て行かなければならないといふことを心から感じたのと、海外から得て來た新しい知識がその背景を成したのとで、益々左に傾いて來るやうになつて行つた。従つて宙外との仲も全く離れて行く形になつた。

正宗白鳥君などは、さうした空氣の中から次第にその才能と文章とを認められて行つた人であつた。また中村星湖、片上伸、吉江喬松諸氏も、矢張さうした早稻田の空氣の中から出て行

つた若い人達であつた。

近松秋江氏は、白鳥氏に比べては、文壇に出るのは、やゝ後れたけれども、しかし矢張その空気のなかから生れて出て来たひとりであることは争はれない事實であつた。

明治四十年から四十二年にわたる間の自然主義運動の猛烈であつたことは、今更こゝにそれをくり返すまでもない。自然主義といふ言葉は何處でも彼處でも言はれた。變な意味にさへ用ゐられた。否、そればかりではなかつた、その尖つた方面は、飽までも實行とつゞいてゐたために——今までのやうに單なる小説の運動ではなしに、社會運動と相連接した形が歴然としてその上にあられてゐたがために、後には政府の注意をも惹くやうになつて、不健全な、不道徳な、危険な思想であるやうに考へられて行つた。例のほんの非であつた幸徳秋水等の社會運動とつゞいて行つてゐるやうにさへ思はれた。

『本當は續いてゐたのではないですかね?』

『No.』

『わからんのですかね?』

『つゞいてゐると言へば、さうも言へるかも知れないね。ロシアの新しい思想方面は、何うしたつてそこまで行つてゐたし、マルクスなども一面では研究されてゐたし、習俗を排したり、自己革命をやつたりしてゐたからね。當時にあつては、随分、危険なことも言つたからね?』
『それに、その時分、早稻田の學生などは、その自然主義にわるくかぶれて、随分ひどいことをやつたものもあるつていふことですね?』

『そんなことを言ふね。自然主義といふことは、何でもやつて差支ないものと思つたらしいね。今でもそんなことを言つてゐる人があるよ。僕等はあの時分自然主義の悪弊に染つてゐたからなんて——?』

『さういふ人達が出来ただけそれだけ政府でも問題にしたわけだね?』

『さうだね』

『あれで、あの大逆事件がなかつたら、もつと烈しくあの社會運動につゞいて行くやうになりはしなかつたかしら?』

『何ともわからんな?』

『屹度さうなつたよ』Dは考へて、『たしかにさうなつた。さうすれば、今とは丸で違つた形になつたかも知れない？』

『さうかも知れない——』

私も深く頭をそつちの方へと持つて行つて見た。しかし、それは疑問でないこともなかつた。何と言つても、自然主義は藝術上の問題であつた。それは實際の方にも觸れて行つてゐるにはゐたけれども、何處かそこに一皮かぶつたところがあつた。それに、あの社會運動とは根元から違つてゐるやうなところもあつた。

三十八

しかし今考へて見れば、かういふ氣もしないではなかつた。つまりあれは私達が人生に初めて觸れて行つた時の意氣込ではなかつたか。今まで押へに押へられて來た心が出場所を得て、そしてあの澎湃とした凄しい波濤を押寄せて行つたのではないか。何でもやつて見ろ、當つて

見ろ」といふ意氣込で進んで行つた形ではなかつたか。あゝしたことは、私にのみあるのではなくて、誰にでもあるのではなかつたか。人間の三十五六時代には、誰でもあゝいふ張詰めた、勇ましい心持になるのでなかつたか。そして人間はあの時代に於て時代の潮流に乗ることが出来るのではないか。

『そればかりでもないでせうがね?』

傍にゐたKはかう言つた。

しかし私には、十中八九まではその力であるやうに思はれた。尠くとも、あの時分の心でなければ、心の持方でなければ、體の具合でなければ、あゝまで突進して行くことは出来さうには思はれなかつたのである。あゝまで盲目的に進んで行くことは出来なかつたのである。『何しろ、あの時分には、何うしてもさういふ風に出て行かなければならないといふやうに心が張り詰めてゐたからね。一生懸命だからね。一生懸命といふことは、周囲を顧みたり何かしてゐることではないからね。自分の好いと思つた方に出て行くより他に他念がないからね』かう私はKに言つた。

『では人間には、一度は蛇度さういふ時代が来るつていふわけですね!』

『まあ、さうだね。自然主義の後に人道主義が来た。技巧主義が来た。傳統主義が来た。それから、今では、また違つたものになつてゐる! そしてその人達には皆なそれぞれその時代があつたんだと思ふね。』

『さうかな』

『僕は少くとも今ではさう思つてゐる! その當時にはさうは思はずに、自分達獨特の發見が何かのやうに思つてゐたけれど、段々さうではないといふことがわかつて来た。『時』がそれをはつきりと見せて呉れた……』かう言つた私には、長い無限の人生の中に漂つてゐるあはれな人間のさまがくつきりとあらはれて見えた。

三十九

島崎君は『春』を書き、『家』を書き、『壁』を書き、『苦しき人々』を書いた。其他にもすぐれ

短篇を二三發表した。

正宗白鳥氏は此時代に於ては、既に立派な新しい時代の作家であつた。『紅塵』『二階の窓』あたりで世に認められて來たかれは、『二家族』を書き、『何處へ』を書き、『落日』を書いた。妙くともかれは新しい時代の作家、舊派に何の縁故も關係も持つてゐない作家といふ意味で、當時の文壇に重きを爲した。

かれの話では、かれは舊派の作品に接しないことはなかつたのであるけれども、しかもどれもこれも實際立つてかれの心を惹いたものはなかつたといふことであつた。紅葉にも天外にも柳浪にもさう感心しなかつたといふことであつた。かれはその時代に於て唯一つ感心したものがあつたが、それはその當時の日本の作ではなくて、ロシアのレルモントフの『現代の英雄』、しかもそれを鷗外きみ子の共譯した『浴泉記』であつたといふことであつた。そしてそれに比べて日本の小説のいかにつまらないかを考へさせられたといふことであつた。かれはそれから國木田の『獨歩集』に行つた。そしてそこで多少の共鳴を感じた。かういふのが小説なら、俺にも書けないことはないと思つた。しかしかれは早稻田を出てから三年近くも新聞記者の中にか

くれて日を送つた。安藤譯などをやつた。劇評家となつてゐることもあつた。かれが『舊友』といふ最初の作を『新小説』に發表したのは、抱月氏が海外から歸つて来る前後のことであつたやうに私は記憶してゐる。

従つてかれの作には、舊派の面影は少しもなかつた。文字のつかひ方や、字句の並べ方などにも全く新しい時代の形式があつた。さういふ意味だけでも、かれは新しい文藝のチャンピオンたるに値ひした。

岩野泡鳴氏もその頃頼りに小説を書き出した。かれも新しい作家として世に生れ更らうとしたひとりである。幸ひなことには、かれは詩人としてはかなり面白い人であつたに拘らず、小説作者としては、天外や風葉のやうにわるく舊派に染みてゐなかつた。それに、まだ世間に出てゐなかつたといふことが、非常にかれに有益な結果を持ち來らせることとなつた。かれもまた新しい時代の作家として立つて行くことが出来た。

しかし、かれの作は評判が好くはなかつた。あちこちの雜誌に出るには出ても、大して人の目を惹かなかつた。『岩野の小説は、ちよつと困るな！』かう誰も彼も言つた。

しかしかれは負けてはゐなかつた。益々新しい時代の人らしい奮闘をつゞけて行つた。『僕の小説は旨いとか拙いとかいふ技巧上のことではないんだよ。もつと先だよ。もつと先のところまで行つてゐるんだよ。それがわからないんだから困る！』成るほどかれの作には、他の新しい作家に比して、著しく深く掘つたやうなところのあるのは争はれない事實であつた。また人生の醜惡な點、暗黒な點、さういふ方面に向つても、他のあらゆる作家より思ひ切つた描寫をしてゐることも争はれない事實であつた。従つて、讀者の頭に素直に入つて行かずに――すぐ反撥されて了ふのも、さういふ極端な、醜惡といへば醜惡な描寫が多いからであるとも言へないことはなかつた。

かれは『耽溺』を『新小説』で發表した。これは今日でもすぐれた作であるといふことが出来た。いかにもその時代の新しさに相應しい作であつた。秋聲氏なども推稱の言葉を惜まなかつた。

この作の出る半年ほど前に、風葉の作に同じ名の作があつたが、それを比較して見ると、新しい舊いといふ區別がよくわかつた。新しい文藝がその出て来る新しい使命を必然に持つてゐる

たといふ事がよくわかつた。泡鳴の『耽溺』には少しも遊戯気分がなかつたのに比して、風葉
のには、わるく氣取つたやうなところだの、キザなやうなところだの、わるく人に見せつける
やうなところだのがあつた。一目して何方が本當で何方が鍍であるかといふことがわかつた。

その時代のモットウとしては、つとめて眞面目であるといふ事は必要であつた。泣きたくと
も齒をくひしぼつて泣かずにゐるといふやうな心持、何んな苦しみにも堪へて行かう
といふやうな心持、感情には捉はれまいといふ心持、何んな巴渦の中に入つても、たとへば火
と水の中に入つても決してそれに溺れまいといふ心持、歡樂を歡樂として見ずに、唯、眞面目
に本當に見やうといふ心持——さういふ心持がその時代の作者の胸に著しく際立つて渦を巻い
てゐた。それにしてもさういふ心持は何處から來たかといふのに、それは主としてヨオロツバ
の新思潮から來たのであつた。ニイチエから、トルストイから、ゾラから、モウパッサンから、
ドストイェフスキイから、チエホフから、ストリンドベルヒから、イブセンから、マツクス・
スチルネルから、アルノオ・ホルツから、ゲルハルト・ハウプトマンから……。

白鳥氏のもものは、同じ主觀にしても、ぐつと態度がその材から離れて來てゐた。その結果と

しては皮肉には皮肉だけれども——またその皮肉にもいかにその時代の皮肉らしさがあつたけれども、岩野のものに比べては、眞面目らしさが、本當らしさが餘程變つた形になつてあらはれてゐるのを私は見た。皮肉な笑ひ、またはじろじろと傍觀したやうな無氣味さは泡鳴の作中にはその面影すらも認めることは出来なかつた。

白鳥氏が聰明な傍觀者らしく、泡鳴氏が愚かなエゴイストらしく見えるのは、さういふ態度から來てゐるのではないだらうか。

兎に角、さういふことは措いて、岩野はその頃非常な苦境に身を置いてゐたことは事實であつた。かれは家庭でも戦ひ、世間でも戦ひ、文壇でも戦つた。ことに樺太に出かけて行くあたり、樺太から北海道に來て何うにもかうにも出来なくなつて行つたあたり、あの時分のことは、『放浪』『發展』あの二つの作に詳しく書いてあるが、あの二つの作は藝術としてはさう重きを置くことは出来ないものであるけれども、しかし新しい時代の人として、いかに勇ましく、またいかに無節制に、無技巧に、時には愚と思はれるまでに大膽に世に處したかといふことが仔細にそれと指さゝれて見えるのは、面白い事實として特記しなければならぬものであつた。

『悲痛の哲理』といふ一文は、多いかれの論文の中でも、ことに立派な、注意すべきものの一つであるが、それはかれが北海道から飄零落魄して歸つて來た時に『唯、それ一つだけを持つて』來たものであつた。私はその時新しい勇ましいドンキホテを初めてそこに見たやうな心持がした。

白鳥、泡鳴二氏の向うに秋聲氏がゐた。かれも眞面目に短篇を書いた。暗い、ジミな、陰氣なものが多かつたけれども、それが却つて當時の氣分に合つたらしく、その評判も決してわるい方ではなかつた。

さういふ作者達に對して、私自身はその古さを、その甘さを、またはその感情に捉はれすぎてるるのを深く恥ぢずにはゐられなかつた。私は心では、感情では、知識では、その新しい時代を十分に知つてはゐるけれども——何うかして自分もさういふ風に出て行かなければならなうと思つてゐるけれども、しかも容易にさういふ境に出て行くことが出来なかつた。私の性情がいつも私の出て行くのを遮つた。今日になつて考へて見たところでは、『生』を書いて了つた後でも、まだ本當に私は文體といふことをつかんでゐなかつた。

それに、何方かと言へば、日本はまだロシアやフランスの持つたやうな實際の人間を澤山に持つてゐなかつた。古い古い時代がまた判るところにその力を振つてゐた。官僚も威張つてゐたし、師弟などといふ關係も喧しかつたし、舊道徳で事物を判断して行くやうな傾向も衰へなかつたし、何處を見わたしても、平凡な舊式な人間ばかりで、新しい感じのする人達などは何處にも見出すことが出来なかつた。『生』を書いたために、私は一面では、許すべからざる忘恩漢か何ぞのやうに言はれた。

四十

かうした潮流の中に、ひつよこり浮び上るやうにしてあらはれて來たのは、夏目漱石氏であつた。

かれは何方かと言へば、英學者として知られてゐた。ほとゝぎす派の俳人として知られてゐた。小説などを書き出して來やうとは、夢にも思はれてゐなかつたのであつた。寧ろ高濱虛子

などの方が小説の方に出て来るだらうと思はれてゐた。

ほととぎす派の寫生文——硯文社にも、早稻田にも、千駄木にも何の縁故も關係も脈絡も持つてゐないあの寫生文は、あれは、前にも言つたやうに、畫家のデッサンなどから思ひ附いたものであるらしかつた。中村不折あたりの話にいくらか糸を引いてゐるらしかつた。(畫家にはデッサンといふことがある。あれを文章の方に移して見たら何うか？ 何うも今の文章はあまりに型がありすぎる。派がありすぎる。體がありすぎる。あゝいふものを一切やめて、あゝいふ連絡から全く離れて、そして最初からやつて見やうではないか。好からうが、わるからうが、そんなことは問はずにやつて見やうぢやないか)その起源は何う言ふことであつたか、もつと他のことであつたか何うか、それは私は知らないけれども、兎に角心持だけはさういふ心持で起したものに相違なかつた。だから、あの寫生文は明治の文壇に於いて、非常に新しい且つ面白い試みであつたに相違ないのであつた。

『ほととぎす』の初めの方では、千規や虚子が頼りにこの寫生文をやつてゐるのを私は見た。中でも千規の病床での寫生文は非常に私の目を惹いた。『顔』といふのだの、『病床の新年』と言

ふのなどは、今でも私ははつきりと覚えてゐる。

虚子の小説は、無論、この寫生文の延長であるけれども、漱石のはそれと言つて好いか、それともまた丸で別なものと言つて好いか。私は矢張その寫生文から来たものだとは思ふが、そのやつた英文學が非常にかれに影響して、むしろ寫生といふことよりもその方が影響して、そしてあゝいふスタイルが出来て行つたのだと思つた。

此處に來ると、イギリス文學のことを少し言つて見なくつてはならないやうな形になつた。イギリス文學はその時代にあつては、大陸文學とは全くかけ離れてゐたのであつた。さうかと
言つて、一代を支配するやうな大きな思想家もなければ、ヨオロッパまで入つて行くやうな立
派なものをかいた小説作者もないのであつた。ジョルジ・メレデスとか、トマス・ハアデイとか
いふ作者があるにはあるにしても、とても大陸文學のやうな潑刺としたところを持つてゐな
かつた。わるく小さくしなびてゐた。またわるく通俗化するやうな形を取つてゐた。ドオデエと
か、ツルダネツとか、もう少し新しく、パウル・アウルジエとかいふ大陸作家の作品の英譯さ
れたのは、それはさういふ作家が割合に健全で、イギリス趣味に爆弾を投ずるやうな危険を敢

てしないからで、大陸思想の本當のものは、決してイギリスに入つて行かうとはしなかつた。そしてイギリスはイギリスで、さうした大陸文學に對抗して、わるく健全と紳士らしさを標榜するやうな形を取つてゐた。

ジョージ・ムウアに『一青年の告白』といふ作があるが、それは半ば追憶的に半ば批評的に書いたものであるが、その中にゐる一青年、即ちジョージ・ムウアが本國の文學に憚らずに、フランスに行つて、例のナチュラリズムの人達や、デカダンの人達に逢つたり何かする事を詳しく書いたものであるが、それだけでもいかにイギリスの文學が當時の大陸思想と没交渉であるかがわかつた。

漱石はしかしさうした英文學に教養の深い人であつた。中でもかれはジョージ・メレディスに深い共鳴を持つた。そしてまたその一方では、コナン・ドイルあたりの短篇にも多少の感化を受けてゐたらしかつた。それに、その趣味に於ても、その學者らしいところと紳士らしいところに於ても、びたりとイギリス文學に合つてゐた。つまり東洋趣味とイギリス趣味との結合が漱石かれ自身であると云つて差支なかつた。

そして一方、例の『ほとゝぎす』派の寫生文が有効にかれに役立つこととなつたのであつた。であるから、『吾輩は猫である』の出現は、不思議な現象を當時の文壇に與へずには置かなかつた。ある人達に取つては、それはたしかに時代錯誤であるかのやうにすら見えた。

でも、『吾輩は猫である』は世間受けが好かつた。その連載された『ほとゝぎす』は非常に賣れた。木になつてからでも一萬や二萬は賣れた。で、かれは一躍して文壇の流行兒となつた。『草枕』『野分』『一夜』などがつゞいて出た。

さういふ風に、根柢は東洋趣味とイギリス趣味とで出來てゐて、少しも新しい厭世思想、箇人思想に觸れてはゐなかつたけれども、しかもその新しい文章と新しいかをりと、當時の知識階級の一部——ことに大學に關した人達の共鳴と喝采とを贏ち得るに十分であつた。兎に角に文壇は回轉した。こゝに至つて、硯友社の文學は全く亡びた。

一時、漱石氏はフランスのアナトール・フランスに比べられたことがあつた。そして『シルヴ・ストル・ボナールの罪』などが引いて來られた。しかし私はさうは思はなかつた。何うしてもその系統はフランスからではなかつた。

この漱石氏に比べると、高濱虚子氏は全くその趣を異にしてゐた。同じ派のやうに一時は見えてゐたけれども、さうでないといふことが次第にはつきりとわかつて來た。虚子氏は純日本式であつた。純日本趣味であつた。外國からの影響は少しもその作の中に見えてゐなかつた。

しかし、その作の中には、『三疊と四疊半』などといふ、純寫生から出發したすぐれた作があつた。『俳諧師』なども新しい文學といふ意味に於て、尠なからず世間を動かしたものである。

『それで、結局、何うなつたつていふわけだね？』

Kが言つた。

『漱石氏の流れといふのかね？』

『さう——』

『森田、鈴木、あゝいふ人があそこから出たね。それから、新思潮の人達が出たね？　しかし、

あれは兩方とも漱石の系統を引いてゐるといふわけぢやないだらう？　あゝしたイギリス系統とは違ふだらう？』

『でも、似たところがありますよ。矢張、あそこから出た流れだといふ氣がしますよ』

さう言へば成ほどさう思はれるところもないではなかつた。森田君にしても、鈴木君にしても、何處か似たところがあるにはある。かれ等は眞に迫るといふことをモツトウにしてゐない。また何處か面白く書かうといふ苦心をしてゐる。色彩などのつかひ方などにも似たところがある。否、「新思潮」の人達にも、東洋趣味、イギリス趣味の認められるやうなところのあるのは、矢張さういふところから來てゐると言へば言へないことはなかつた。

何方かと言へば、漱石氏のものには私にも感心出來ない方であつたけれども、一番心持が違つてゐるのは、岩野泡鳴氏であるらしかつた。かれは到るところで漱石を批評した。かれは全く通俗作家で、『あんなものはしやうがない』とさへ言つた。島村抱月氏も決して共鳴しないかやうに見えた。

唯一つ、意想外なのは、森鷗外氏がこれに共鳴したらしいことであつた。あゝいふ風に心持も違ひ、趣味も違ひ、教養も違つてゐる人が、何うしてかれに共鳴したか。かれは『吾輩は猫である』を讀んで、筆を執りたくなつたと言つてゐるが、それは或は根本から共鳴したのではなくて、大學の方面からさういふ作者の出で行つたのを見て、自分ももう一度やつて見たいと

いふ心持を起したのではないか。唯、それだけではないか。一度は末流文壇などと言つて、愛憎つかしを言つて別れて來た文壇ではあつたけれども、段々見てみると、面白いところが出て來て、じつとして見てゐられないやうな心持がして來たのではないか。それも抱月や泡鳴や藤村や白鳥や秋聲あたりでは、たとへ共鳴しても、きまりがわるくてさうは言へないけれども、漱石あたりならさう言つても具合がわるくないといふやうな心持で、それでさういふ風に言つたのではなかつたか。否、否、そればかりではなかつたであらう。教養も遊び、趣味も遊び、心持も違つてゐたにはゐたらうけれども、何處か學者と言つたやうなところで、また世間の實際の巴渦の中に入つて行くのを脛しとしないと言つたやうなところで、この二人は似通つてゐたのではないか。超然として高く標置してゐるといふやうな形に於て似通つてゐたのではないか。また、あの文章の書き方などに於ても、何處か共通のところがあつたのではないか。『成ほど、さう言へば、さういふ形がないでもないね。何處か軽いところがあるね。他の作家のやうにわるくつきつめてゐないやうなところがあるね。二人とも餘裕がある點に於ては、似

かうも言つた。

四十一

明治四十一年から五六年の間は、漱石は文壇に於ての流行兒であつたけれども、しかし新しい作家、批評家達から、かなり大きな壓迫を受けたには相違なかつた。かれは自分の黨派以外に多くの味方を持つてゐなかつた。またしつかりした共鳴者を持つてゐなかつた。かれは半ば遁隱者のやうにして世を送つた。

かれは『東京朝日』に入るやうになつてから、年々その作を公にした。『虞美人草』『それから』『心』『門』『道草』『明暗』などその重なるものであつた。しかしかれとていつまでも『吾輩は猫である』に満足してゐるものではなかつた。次第にかれはかれの行く道を見出しつゝ進んだ。『それから』などといふ作には、新しいヨオロッパの影響をすら發見するやうになつた。

しかしかれの作は、何う考へて見ても退屈であつた。また煩瑣で説明したやうなところが多

かつた。讀者にとつてはひとり手にそつちに伴れて行かれるのではなしに、作者に手を引張られて無理やりにそつちへ伴れて行かれるといふやうな感じがした。そこに重苦しいところがあつた。第一義的でないところがあつた。従つてかれの作からは、一つの印象的シーンをも發見することが出来ないといふことが言はれ得た。

四十二

徳富蘆花氏に就いても、私は少しは言つて見なければならなかつた。

かれは國木田とは割合に懇意であつたために、それを透して、私はかれについてのいろいろなことを訊くことが出来た。時にはかれは狂したと言はれた。また時にはかれは社會主義者であるかために、そのためにあゝいふ田園生活を餘儀なくさせられたと言はれた。しかし國木田は割合によくかれを知つてゐた。『世間つていふ奴は馬鹿だからね。いろいろなことを言ふよ。蘆花君のことなんか、奴等にわかるもんか』かれはいつもこんな風に言つた。

蘆花氏の名は割合に早くから文壇的に知られてゐた。『國民の友』の外國種、つまり外國の雜誌からめづらしい材料を翻譯して、それを六號で紹介する場所、それをかれは受持つてゐたので、早くからかれはロシア文學やフランス文學に通じてゐた。それはツルゲネフやドストイエフスキイが始めてイギリスで紹介される時分で、『獵夫日記』や『罪と罰』の紹介が非常に詳しくそこに譯されてあつた。私なども、そこから外國文學についていろいろな知識を得たひとりであることを白状しなければならなかつた。

蘆花氏のものでは、『夏の夜がたり』といふ作が一番最初ではなかつたかと思ふ。かれも國木田と同じく硯友社の文藝には感心せず、頻りに新意を出さうとしたひとりであつたが、『思出の記』や『不如歸』を書くまでには、何遍となく書き出してはやめ、やめてはまた書き出したのであつた。またある時には、ピオルソンの『ゾルパッケン』を譯して、『野の花』と名づけそれを『國民の友』に出したこともあつた。その譯文などは、一時私達の憧憬するところとなつた。

『さうさね？ そいつを誰が知らうだね？ しかし、僕の考へたところでは、もとは矢張り失戀

らしいね。それに、トルストイの感化が随分あるだらう。蘆花君でなくつても、僕でもあゝいふ田園生活を夢みたことは何度もあるんだからな」

かう園木田も言つたが、實際、本當に考へたものは、何うしてもあそこまで行かなければならないやうなものであつた。自分で耕して獲たもので生活する！それが一番本當の生活である！一番純な本當な生活である！かういふ風に誰も彼も思つた。そしてそれを、その田園を自分の理想のパラダイスのやうに夢想した。否、そればかりではない、その周圍に自分と志を同うしてゐるものを集めて、一番本當の村を拵へる！そして本當に生きる！かうした考へは、若い文學青年に取つては、何とも言はれない誘惑であつたに相違ないのであつた。

私は園木田の死んだあとで、一度その蘆花氏の田園に行つて見たことがあつた。林の中の道、阪をのほつて行つたところにある樺の大樹、漆晶に添つて入つて行つた奥にある小さな茅葺の家、私が訪れて行つた時には、蘆花氏は裏の畑へ出て畦きか何かを切つてゐるところであつた。

私の眼には、農家らしいひろい上り端と、それに連つた居間と、卓ダイブルに椅子などの置いてある目あたりの好い明るい書齋とが映つた。卓の上には、何であつたかわすれたが、トルストイも

のらしいスコットライブラリーの本が一冊枝折を入れたまゝ置いてあつて、本立には、新しい種々な文學書がずらりと並んで立てられてあるのを目にした。私はじつとそこに坐つて、夫人の出して呉れた火鉢に手をかざしつゝ、氏が畑から上つて來るのを待った。

それは私は既に文壇に出て行つてゐて、大にこれからやらうと意氣込んでゐた時であつたけれども、それでも私は私の心の中に何處か羨しいやうな心持を感じずにはゐられなかつた。かうして靜かに落附いてゐたら、それは何んなに好いであらう？ 何んなに理想的であらう？ かう私は思はずにはゐられなかつたのである。

しかしそこから都會の方へ歸つてきた道では、私の心は既に全くそれとは異つてゐた。今は、尠くとも今は、さうして落附いてゐる時ではないと思つた。世間に出て思ふさま戦はなければならぬ時だ——尠くとも自分だけは何？ と思つた。私は一方に蘆花氏のやうな生活を置いて、一方私の入つて行かなければならぬ——勇ましく入つて行かなければならぬ生活を思つた。そしてそこに二つの道が截然としてわかれて來てゐるやうに思つた。

蘆花氏はそこで『寄生木』を書き、『新春』を書いた。

しかしかうした生活を志したものは、決して蘆花氏ばかりではなかつた。後には、武者小路氏の新しい村なども出来て行つた。

私はその新しい村に就いては多くを知らない。従つて何をも言ふことは出来ない。しかしそれは矢張、蘆花氏の心持などと通じたところがあるのではなかつたか。偽りの生活を脱して、本當の生活をしやう、本當の生活の記録をつくらうといふ心持から出發して行つたのではなかつたか。私は烈しいこの生活の一方に、さうした蘆花氏や新しい村の人達の取つてゐるやうな生活のあるのを深く考へて見ずにはゐられなかつた。

相馬御風氏の田舎へ引込んで行つた形などにも、さうした心持が多分に含まれてゐはしなかつたか。

四十三

早稻田は坪内氏の指導に待つことが非常に多く、氏が半生の力をそこに盡されたために、そ

のために、そこに生立つた文學も立派に成長し、劇の方面も益々新しくなつて行つたのではあつたが、現に坪内氏のあの努力がなかつたならば、とても今の早稻田になることは出来なかつたであらうと思はれるが、しかも島村抱月氏のやつた事業と精神とは、私に取つて、一層忘るることの出来ない深い深い印象を残さしめずには置かなかつたのである！抱月氏は誰よりも一番強くはつきりしたその現代的精神を示してゐるはしなかつたであらうか。

實行と藝術との問題は、今でも解くことの出来ないものになつてゐるが、一にして二ならず、二にして一ならずと言つたやうな形になつてゐるが、その問題に一番深く入つて行つたのは、何と言つても二葉亭、それに次いで抱月氏であらねばならなかつた。

抱月氏は本の上ばかりでなしに、實際に海外の思潮に觸れて來た人だけに、その胸の中には、いろいろなものが常にくつきりと巴渦を卷いてあらはれて來て來るに相違なかつた。その胸には本能と理性との根強い争闘もあつたであらうし、世間と箇人との關係についての深い考察もあつたであらうし、男女兩性の何うすることの出来ない争ひについての理解もあつたであらうし、平凡な、退屈な、灰色のやうな人生に對しての反撥もあつたであらうし、出て行くものは

飽までも出て行かなければならないといふ強い決心もあつたであらうし、いろいろなものが實にそこに火のやうに燃えてゐたといふことを私は考へずにはゐられなかつた。

そこにはダンヌンチオの『ジオコンダ』もあつたであらう。メイタルリンクの『アグラベエ
ンとセリセツト』もあつたであらう。ハウプトマンの『寂しき人々』もあつたであらう。トル
ストイの『アンナ・カレニナ』もあつたであらう。フロオベルの『マダム・ボヅアライ』もあつ
たであらう。ニイチェもあつたらう。イブセンもあつたらう。ことに『小アイヨルフ』『ノラ』
『海の夫人』などは活潑々地としてその心の中に生きてゐたであらう。さびしいつらい悲しい近
代の心！ 行く以上は何處までも行かなければならないといふ雄々しい勇ましい近代の心！

抱月氏はもとはそんな人とは思はれなかつた。何方かと言へば、學者肌の人であつた。教師
としても諄々として教へて倦まないやうな人であつた。ある時には、ゾロフエツチ博士になることを目的に
してゐる人ではないかとすら思はれたくらゐだ。現に、岩野泡鳴氏などは、煮えきらない抱月
氏の態度に一度ならず二度まで齒がみを鳴らしたことすらあつたくらゐだ。しかしかれは熄火
山ではなかつた。やがてその爆發の時が來た。

私はそこに、大きな現代的の戯曲を見たやうな気がした。誰がさうした戯曲を書いたか。抱月以外に誰が書いたか。否、天才が生れても容易に手をつけることが出来ないといふやうなさういふ戯曲をかれは實行して見せて行つたではないか。そこにはいろいろな現代化があつたではなかつたか。群衆と箇人、師と門人、社會と自己、舊い女性と新しい女性、戀の歡樂、一生をそのために亡しても遺憾と思はない戀の焰、さうしたものがはつきりと巴渦を卷いてあらはれて來てゐたではないか。誰の作よりも、もつと直接に、もつと本當に、またもつと痛切にいろいろの問題に觸れて行つてゐたではないか。そしてその悲劇は、現代の誰の胸にも、誰の心にもまさしくとつちかはれつゝあつたものではなかつたか。さうした悲劇の焰の中に入るのを勇ましいと感じつゝも、身を亡すことを恐れて、意識的にまた無意識的に迴避しつゝあつたものではなかつたか。従つてそれに對して、誰も深い共鳴を感じずにはゐられなかつたではなかつたか。誰も溜息をつかすにはゐられなかつたではなかつたか。

私は抱月氏を箇人として餘りに深くは知つてゐなかつた。染々と話して見たこともないと言つても好いくらゐであつた。しかし以前から、早稻田を一番で出た時分から、理路の整然とし

た、感じの純な、學者肌であるにはあつてもつとめてそれに捉はれまいとしてゐるかを知つてゐた。文士無妻論、文士無家庭論を唱へたかれを知つてゐた。また近松張の小説を書いて、いくらかその晩年を暗示したやうなあこがれを示してゐたかれを知つてゐた。宙外、抱月と名を並べてゐたけれども、あらゆる點に於て、抱月氏の方が本當で、眞剣で、そして眞面目であることを知つてゐた。次第に私はその家庭のさびしいといふ話を聞いた。止むを得ない養子であつたために、愛も何もない細君と同居しなければならなかつたといふことを聞いた。かれに取つて、家庭は牢獄であつたといふことを聞いた。かれは訪問者の前でも堪へることが出来なといふ言つたやうにして、大きなあくびをしたといふ。それは退屈な人生に對してではなかつたか。色彩のない平凡な思ひのまゝにならない生活に對してではなかつたか。私はそれを考へると、その時代の思潮が、かれの上に常に最もよく具體化されてゐたことを思はずにはゐられなかつた。

かれは第二の戀とか、中年の戀とかいふことに就いて、常に最も深く共鳴してゐたひとりであつたに相違なかつた。近松の義理人情と言つたやうな、あゝしたロマンチックな心持から、

現代の尖つた自由な心持、自由な戀、自由な自己解剖に出て行つたかれは、そこに平凡な退屈な灰色な人生を感ずると共に、一方にもつと刺戟の強い、色彩の濃い、自己の全生命を振盪させるやうなあるものを翹望してゐたに相違なかつた。これに比べると、正宗、近松二君はくつとちがつてゐた。たゞ七八年違つたばかりであつたけれども、正宗近松二君の時代には、もはや抱月氏の抱いたやうな半ばロマンチックで半ばリアリスチックなあゝした感じを、心の色彩を持つてゐるやうな人は全くなくなつて了つてゐた。一でなければ二、二でなければ一といふやうにきつぱりときまつてゐた。正宗君あたりの眼からは、抱月氏のやつたやうなことは、或は馬鹿々々しく見えたかも知れなかつた。

またこれを泡鳴に比べて考へて見る。かれにも矢張さうした形はなかつた。悲劇を勵致させて、いやでも應でも、さうなつて行かなければならないといふやうなハメにかかれは決して落ちて行かなかつた。かれはてきばきと處理した。まがりなりにも處理した。従つて泡鳴の一生は直線ではあつたけれども深みはなかつた。何處か喜劇的のところがあつた。重みといふものもなかつた。しかし、抱月氏のやつたことに對して、白鳥と泡鳴と何方がより多く共鳴したかと

言ふのに、私の考では、それは無論前者ではなくて後者であつたらうと思はれた。

またこれを島崎君に比べて考へて見る。これもいろいろなことを私に思はせずには置かなかつた。島崎君も何方かと言へば、正宗君よりは抱月氏に近い方であつた。ロマンチックで且つリアリスチックであつた。憧憬といふやうな分子をも澤山に持つてゐた。矢張舊派から新派へと出て来たやうなところのある人であつた。しかし抱月氏に比しては、島崎君は、藝術的であつた。餘りに藝術的であつた。實行をも藝術で蔽ひ包まうとするやうな形を示した。そこに私は「實行と藝術」といふ大きな潮流の時には二つに、時には一つに、合つたり離れたりして流れて行つてゐるのを見たやうな氣がした。

私は二葉亭あたりから流れ出して来た「實行と藝術」の潮流が次第に大きく廣くなつて、いろいろな事件や悲劇をそこに漂はせるやうになつたことを思はずにはゐられなかつた。つゞいてまた明治大正の作家がてんでにその背景を女で、戀で塗つてゐるさまをも考へて見ずにはゐられなかつた。人間は誰でも皆なそこに落ちて行つた。そしてそこで誰でもその本性を發揮した。

ある時、私達は話した。

『さうだね。それは面白いね。さういふ風に、女の方から作者を研究して見るといふこともおもしろいね。皆なそれぞれ話のひとつづらゐる持つてゐるね』

『つまり、作をする研究室といふやうなもんだね？』

私はかう言つたが考へて、『しかし、明治二十七八年頃と明治四十二三年頃とは、次のやうな違ひがあるにはあるね。つまり、紅葉時代には、さういふ研究室をてんで持つてゐるたにしても、それを本當に正面に持ち出して書かうとはしなかつたね。讀者にはわからないくらゐに敏^{びん}して——詳しく言へば、ぐつと小説にして書いたもんだね。だから、その作は好い加減なものになつて了つて、さう大して感動を惹かなくなつてゐる。それに比べると、四十二三年頃には、ぐつと突込んでゐる。眞に迫るといふ形に於て非常に大膽になつてゐる。自分がやつたのではあるが、同時に人間がやつてゐるのであるといふ風に出て來てゐる。そしてその最も尖つた點は、鳥村君あたりの實行に行つてゐるんだね？』

『たしかにさうだね……』

『紅葉さんあたりだつて、随分面白い女の話はあつたんだからね。『金色夜叉』にしろ、『多情多恨』にしろ、その好いところ、人を感動させるところは、皆なさうした實際の研究室から出て来たんだからね。二葉亭あたりだつて、いろんなことがあつたんだよ……。それに、あの時分、國學者連中、即ち落合直文とか、小中村義象とかいふ人にも、いろいろながあつたんだよ。そしてその感化が與謝野君だの内海君だのを生んでゐるんだよ。』

『さうかな』

『それは矢張男と女の世の中さ……。しかし、後期には、眞面目さが加つてゐたといふことは事實だよ。』

『さう言へば、今の若い人達だつて、矢張さうだね。皆な研究室を持つてゐるやうだね？ 菊池君だつて、里見君だつて誰だつて……。？』

『しかし、それが何ういふ風にさういふ人達の作にあらはれて来るか。その眞に迫る氣分が何ういふ程度になつて出て来るのか？ それが問題だね。さういふ深いところから作物をば批評しなければ本當ではないね？……。しかし、さういふことは何うでも好いとして、兎に角島村

君のやつたことは、明治大正の思潮の中心を成してゐるといふ形があるね。誰の作にあらはれたものよりも立派なすぐれた表現だと僕は思ふね？　僕は早稻田といふところには他にはさう大して興味を持つてゐないけれども、抱月氏の精神だけは共鳴せずにはゐられなかつたね？』
私はかう言つて、そのあとに残つた須磨子がその通夜の夜にさびしさうにしてゐたさまを眼の前に浮べた。

四十四

永井荷風氏は何方かと言へば、後期よりも前期の感化の多かつた人であつた。その本當に文壇に名高くなつたのは、歸朝以後で、正宗氏よりは、ぐつとあとであつたけれども、その教養はずつと前に潮るべきものであつた。かれは半分以上硯友社氣質であつた。かれは曾て廣津柳浪に師事した。また巖谷小波の木曜會の同人であつた。つまり紅葉に藻社の連中があつたと同じやうに、小波に木曜會同人があつたが、その一人で、生田葵山、黒田湖山、西村渚山など皆

なその夥伴であつた。しかしかれはさういふ夥伴に満足してはゐなかつたに相違なかつた。かれは鷗外氏のものなどを愛讀した。また外國のものなどを渉獵した。明治三十三四年頃、即ちかれがまだ海外に赴かない以前にあつては、かれは新しい作家の一人として次第にその頭を擡げつつあつた。かれはその時分ヅラの『ナ、』を抄譯した。また『地獄の花』といふ半分通俗な小説を公にした。

この頃は硯友社の權威が凋落して、しかもそれに代るべきものがまだ出て來ないといふ混沌とした時代であつた。所謂鷗外漁史の末流文壇と言はれる時代であつた。風葉、天外などが一方にはゐたけれども、それに儼らなかつたのか、それともまた別に理由があつたのか、その時分には、草村北星や菊池幽芳や田口掬汀や柳川春葉の通俗小説などが流行した。そして一時はさういふものの方が本當ではないかとすら思はれた。『地獄の花』はいくらかそれにかぶれたやうな作品であつた。

しかし數年經つて、海外から歸つて來たかれは夥しく變つてゐた。文壇そのものの變つたよりももつと著しく變つてゐた。かれは海外にあつて、故國の文壇の變つて行くのを目を睜つた

ひとりであつたが、歸るとすぐ、『歡樂』だの『監獄署の裏』だのを公にして、一舉にして有名な作家となつた。『アメリカ物語』では、その文章の幼稚と不統一とでかなりに手痛く批評されたけれども、『フランス物語』に行くと、すっかりその古い衣裳をぬぎ捨て、フランス仕込みの奔放な自由な描寫と態度とを示して來た。

しかし聰明なかれは、敢てその當時の文壇の思潮に深く浸らうとはしなかつた。かれは或は右し或は左した。それに一面、新しい思潮に雜り切ることの出來ないやうな前期の教養をかれは十分に持つてゐた。それに、度々の發賣禁止——それは生田葵山氏の作物などと同じに見られた發賣禁止がかれの氣を腐らせずには置かなかつた。次第にかれは皮肉になつて行つた。わざと傍觀者を街ふやうになつて行つた。

かれの全集を見ると、さうした傾向がよくわかつた。かれは何と言つても前期の教養の下に育つた文章家であつた。眞に迫るといふことよりもむしろ美にあこがれるといふ方のロマンチストであつた。新しい自由と表現と皮肉とは十分に持つてゐたけれども、何處か文の爲めに文を書き、美のために美を誇張するといふ風があつた。『新橋夜話』などといふ短篇集も面白い

ものには相違なかつたけれども、形に於てお話であるばかりでなく、精神に於いても、傍觀的に過ぎるやうな氣がした。もつと本當のことを書いて買ひたいやうな氣がした。

しかし、かれに取つては、その本當といふことが問題であるらしかつた。本當とは何ぞや？かうかれは反問して來るに相違なかつた。

しかし、抱月や、泡鳴や、藤村や、白鳥や、蘆花や、さういふ人達の中にかれのやうな作家の雜つてゐたといふことは、面白い現象と言はなければならなかつた。

四十五

白鳥に來ると、そこには最早前期の教養といふ様な、さうしたものの何等の影響をも受けてゐなかつた。硯友社の氣分あたりからは、すつかり全く離れて來てゐた。また、藤村、抱月、荷風などの持つた様な、さうしたロマंचツクな氣風からも、全く別なものになつて來てゐた。かれに於ては最早美にあくがれるといふやうなところはなかつた。またわざと美を誇張する

といふやうなところもなかつた。『詩』また『歌』、さういふ気分にも何等の共鳴を持つてゐなければ、さうかと言つて、爬羅剔抉の快を貪つて、無闇にメスを振ふとやうな淺薄さにも墮してゐなかつた。つまり四十二三年頃の虚無思想に最も合つた性格と言つて差支ないものであつた。

しかしかれは眞に迫るといふことについて、何ういふ考へを持つてゐたか。また『實行と藝術』といふことについて何ういふ考へを持つてゐたか。それを私達は考へて見なければならなかつた。かれは眞といふことに對しても傍觀的でなかつたか。眞とは何ぞや？ 本當とは何ぞや？ それが誰にわかるか？ 君にそれがわかるか？ かういふ風に私は曾て一度反問されたことがあつたのを記憶してゐるが、眞に迫るといふ問題はさういふことではなくて、——わかるとかわからないとかいふことではなくて、出来ないながらも、わからないながらも、何うかその眞に迫る程度を近くしたいといふ願望から起つて來た運動ではなかつたか。何うかして本當のことを書きたい、一行でも好いから本當のことを書きたいと思つて出て來た運動ではなかつたか。それをさういふ風に言つたのは、何うしたわけか。あまりに本當といふことを私が高調するので、それでちよつとからかつて見たのか。それとも曾て二葉亭が——本當なんてど

れが本當だかわかりやしない——と言つたのと同じ意味で言つたのか。その何方であるかが、長い間私にはわからなかつたが、此頃になつて、いくらかそれがわかるやうな氣がして來た。

それは『毒婦のやうに』といふ作がある、それあたりからであるが、かれはあらはす作家でなくて、つくる作家ではなかつたかと思つた。自己の創造した世界に讀者を伴れて來ることの技倆は非常にすぐれてゐるけれども、その書いたものは、あまりこの實際に證券を持つてゐるものではなくはなからうか。本當といふことよりも、如實に書きあらはすといふことの方がかれに取つては大切であつたのではなからうか。そしてさういふところからあの皮肉な反問が起つて來たのではなからうか。かう私は思つた。

かれの作は主觀的ではあるけれども、それは傍觀的主觀であつて、『實行と藝術』に於ての實行的主觀ではないのではなからうか。『どれが本當だかわかりはしない』といふ反問は同じであつても、二葉亭の實行的主觀とは全く違つて言はれたのではないであらうか。否、さう思つて見て來れば、かれの書いたものについての疑惑がすつかり解けて行くやうな氣がした。

唯、物を見てゐる。じつと見てゐる。そこにひとり手に感じが起つて來る。それだけならま

だ好いけれども、それ以上に、皮肉に、白眼にかれは世間や人間に對してゐはしないだらうか。メスを振ふだけの冷かさがあれば、その一方にそれを治してやらうとする熱い感激もひとりてに伴つて來るわけだが、かれにはさうした冷かさもなくてはなないか。あまりに冷淡に周圍を見廻してゐはしないか。

しかし、それも性質であり、氣分であり、遺傳でありとすれば、敢て非難するには當らないかも知れないけれども、かれにも『二家族』だの、『毒』だのといふ作のあるのを見ると、單にさういふ風に言つて了ふことは私には出來なかつた。

かれも曾ては『實行と藝術』上の藝術家ではなかつたか。『一夜』などといふ作があつたではなかつたか。深く入つて見やうとする作家であつたではなかつたか。『毒』などの眞に迫つた形は——尠くとも作者の即いてゐる形は、西鶴のあの切味をすら思はせるに十分な作ではなかつたか。

此處で私は近松と西鶴との相違を論ずる必要に迫られて來た。『だつてさうぢやないか。近松には拵へたところがある。それははつきりとわかる。お俊傳兵衛だつたか何だつたか、兩方と

も書いてゐるものがあるが、それなどを見てもすぐわかる。近松は何うしても、『本當』といふ
度数に於いて不足してゐる。いかにも中途半端である。拵へてゐる。それも、淨瑠璃にするの
だから、近松はあく書かなければ爲方がなかつたのであらうと言ふものもあるけれども、僕は
さうは思はない。近松はつくることを主にした作者なのだ。つくらなければ満足が出来ない作
者なのだ。あらはす作者ではなかつたのだ』

かう私が言ふと、それをきいてゐたSは遮つて、

『それが、何ういふ風に正宗氏と關係するんだね？』

『つまり、近松に近いといふのさ……。いや、誤解しちやいけない、あの書いたことぢやな
い、その手法がさ……。考へ方がさういふ風だと言ふのさ。だから、『毒』や『二家族』のや
うに、つくつたものよりあらはしたもののの方に選つて來たら何うか？ つていふのさ？』

『さうかな？ 僕はそれほどにも思はないけれど……。』かう言つてSは考へて、『そして君
はその西鶴と近松との相違をそのつくつた作家とあらはした作家との二つにわかるのかえ？』
『さうはつきり言ふわけぢやないがね？ また場合に由つては、あらはす作家であらうが、つ

くる作家であらうが、それはかまはないわけだけでもね、すぐれたものさへ出来れば好いものだらうがね？ それは批評をするだんになつて、感じをあらはすために言ふんだよ。君だつて、西鶴と近松とを比べれば、真に迫る度数の違ふことはわかるだらう？』

『それはわかる。しかしそれはつくる作家とか、あらはす作家といふことから起つて来た差違でなくて、その持つた才能の如何に由るんぢやないかね？』

『さう言つても好いだらう。しかし、君の言ひ方よりも僕の言ひの方が進んでゐるよ。少くとも心理的だからね？……』

『さうかな』

Sは笑つた。すぐ言葉をついで、

『それぢや秋聲氏は？』

『それはまたおのづから別だね。秋聲氏はまた別に論するつもりだがね。つくる作家としては、秋聲氏は決して旨くはないね。何方かと言へば、不得手だね。話す作家、あらはす作家だよ。創造するといふ形から言へば、正宗君の方がずつと巧みだ——しかし、あとで考へて見

で、正宗氏のものよりも秋聲氏のものの方が餘計頭に残つてゐるのは、それは何故だらうね？
あらはしたものが餘計にあるからぢやないかね。人の話をきいて書いたにしても、秋聲氏の方が深く飲み込んでかゝつてゐるはしないかね？』

『さあ』

Sは容易に背けないといふやうにした。

『ぢや、泡鳴とは？』

『泡鳴もつくる方の作者ぢやないね。大抵自己をあらはしたものだね。かれには出来不出来があつて、全集などを見ると、ひどいものがあるが、自分のことを書いたものには、好いものがあるからね？』

『何んなもの？』

『「悪物」とか、「毒藥を飲む女」とか、「耽溺」とか、あゝいふ風なものは、皆な本當だからな？』
『白鳥だつて、自己をあらはすことの好いのを知らないのではないよ。唯、止むを得ずあゝいふものを書くんだよ』

『さうかしら？』

『さうだと思ふな。その證據には、近頃だつて、自分のことを書いたものがあるぢやないか。それから島崎君なども、自分のことばかりを書く作者だね』かうは言つて、『いろいろに言ふけれども、つまりはかういふことになるかも知れないね。自分のことを書くにしても、それを何ういふ風に書きあらはすかといふ、それが問題になるんだね？ 正宗君なども、さう言へば、何處かで自分をあらはしてゐるにはゐるんだね。クリエイトしても、そのつくつた形にそれがあらはれてゐるといふわけになるからね？』

『さうも言へるね？』しかし私はさうは言ひたくなかつた。

四十六

泡鳴の作は、明治大正の作品を議する上に、是非とも批評しなければならぬものであつた。かれの全集の中では、小説よりも評論よりも、口語體の詩が一番深く私の心を惹いたが――

ことに、釋太時代のものが何とも言はれない悲痛な感じを私に誘つたが、かれに取つては、詩よりも評論よりも小説を読んで貰ふ方が一番本意であつたには相違なかつた。

しかし、此處で少し詩のことを言はせて貰ひたいと思ふ。何故と言ふのに、かれの詩は比較的世間に讀まれてゐないからである。非常にすぐれたものを持つてゐるに拘らず、人があまりにそれを言はないからである。

それは詩だつて、小説だつて、讀者には明るいロマンチックなものの方が好いには違ひはない。のんきな、靜かな、あまいものが好いに相違ない。従つて何うしても口あたりの好いものは賣れる。人氣もある。しかし、そのために、本當のものが讀まれないのは、悲しいことだ。

島崎君の『若菜集』なども、新しい芽としては立派なものであると言つて好いであらう。いろいろなものがあれから出たとも言へるであらう。また北原白秋の『思ひ出』などもすぐれた詩集のひとつとは言へるだらう。しかし今日から見れば、さうしたものはすべてあまいものであることは争ふことの出来ない事實であつた。その作者自身でさへ、決して好いとは思つてゐないに相違ないのであつた。それはあの時代の小説が古くつて讀めないやうに、あの詩も若い

センチメンタルなものであつた。それに比べると、樺太で詠んだかれの口語詩の方が、何んなに本當で、また何んなに悲痛で、また何んなに技巧に富んでゐたか知れなかつた。あの海のとりにて落日を眺めてゐる詩などは、日本の新しい詩壇でも澤山はあるまいと思はれるほどそれほどすぐれたものだつた。

否、そればかりではなかつた。口語體の詩の發達もかれに負ふところが非常に多かつた。一體口語詩といふものは、川路柳虹が始めたといふことであるけれども、それを今日のやうに打ち立てるためには泡鳴などもその元勳のひとりであらねばならなかつた。それに、その内容がすぐれてゐた。當時のあらゆる詩人から群を抜いてゐた。かれのいはゆる『悲痛の哲理』が心とも感情ともなつて動いてゐた。決して若いセンチメンタルな心ではなかつた。

何のために、僕

樺太へ來たのか わからない。

鎌の續詰、何だ、それが？

酒と女、これも何だ？

東京を去り、友達に遠ざかり、

愛婦と離れ、文學的努力を忘れ、

握り得たのは金でもない。

たゞ、僕、自身の力、

これが、思ふやうに、動いて、ゐない夕べには、

單調子な、樟太の、海へ

僕の、身も、腸わたも、絞けて、しまひたくなる

これなどことにその時の心を、苦しみを語つたもの、一つと言ふことが出来た。泡鳴はあの頃が一番好かつた。あの頃が一番眞面目な苦しみと悶えと精進とを持つてゐた。かれはその時代の世界苦を一番多く代表して持つてゐたといふことが出来た。

小説に於ては、かれは長い間不遇であつた。かれは餘程後になつてまでも、原稿を持つて雜誌記者のもとへ行く閱歷を持つてゐた。それはその作が暗くじみなものであつたためでもあらうし、また度々細君を取り換へたりして世間からわるく思はれてゐたためでもあつたであらうが、一面かれの作がさう大して旨くなかつたこともその原因のひとつであつたには相違なかつた。かれは白鳥や秋聲や藤村に比して、その書いてあることは面白いにしても、その技巧に於て著しく劣つてゐた。いやに長たらしくもあれば、混雑こたくしてもゐた。退屈でもあつた。

しかも、その長たらしさが、退屈さが、わる細かい描寫が次第に一種のスタイルを成して、立派な作品を成すに至つたのは、その晩年四五年の間のことだ、『毒藥を飲む女』『愚物』あたりから次第に世間にも認められるやうになつたのであるのに——これから立派なものも出來やうと思はれたのに、不幸にして世を去つたのは、惜しんでも猶あまりあることであつた。

かれも晩年には、自分のことになしに、他人のことを書いて見やうと思ひ立つたらしかつた。小説家である以上、他人のことも自分のやうに書けなければ駄目だ。かうかれも思ひ立つた。しかしそれは何れだけ成功したか。矢張、自分のことのやうには他人は書けなかつたのではな

かつたか。何うしても眞に迫る度数が少くなつて、影が薄いやうなものになりはしなかつたか。かれの作を讀むには、是非ともかれの實生活を知らなければならなかつた。前にも少し言つたと思ふが、かれは勇者であり、樂天家であり、自我主義者であり、また堅固な、容易に惑まどを破ることの出来ない自信家であつた。凡そ藝術家と言へば、誰でも我儘なもので、自分の好いと思ふことは決して捨てないものであるが、それは藤村でも秋聲でも白鳥でも抱月でもすべて同じであるが、その我儘な態度について、また銘々違つたところのあるのも面白かつた。藤村はあゝいふ人だけに黙つてはゐるけれども、決して他に雷同しやうなどとはしなかつた。秋聲は自分の言つたことは飽までも飽までも把持した。決してそれを捨てやうとはしなかつた。泡鳴はそれに比べると、いくらかわかりが好いやうなところがあつたけれども——而と向へば、さうだ、さうだ！　なんて簡単に點頭いて了解して了ふやうなところがあつたけれども、しかも辯難駁撃には、決して自分が間違つてゐるとは言はなかつた。現に間違つてゐるのがわかつてゐても、それを何とか彼とか言つて彌縫した。ところが、唯一度、小説の中に「蓋の入つてゐるまぐろの鮓」といふことを書いて、それを指摘されて、それは蓋ぢやあるまい、わさびだ

らうと言はれた時には、流石の彼もへこたれた。

かれの一元描寫論は、やゝゆとりのないもので、あれでは、描寫上不便で爲方があるまいと思はれるけれども、しかし大體に於ては正しかつた。理想としては、是非あゝいふ風にならなければならぬものであつた。すぐれた藝術家は、昔から皆なあゝした態度であつた。フロオベルの『ボヴリイ夫人』などでも、根本に於ては、一元描寫であるといふことが出來た。唯、かれの言ふやうに、枝葉をすつかり伐つて了はなかつたばかりである。

泡鳴と白鳥と秋聲とは、何處か似たところがあつた。それに、平生の交際に於ても互ひに仲が好いらしかつた。或はさうした形に於て互ひに影響し合つたのかも知れなかつた。しかし、仔細に細かく入つて行けば、三人は三人とも皆違つてゐた。他についての描寫では、白鳥が一番巧みであつたけれども、前に言つたやうに、何處か信じ切れないやうなところがあるに比して、泡鳴は一番下手で、すぐその内兜を見透かされるやうなところがあつたけれども、何處か本當のところがあるやうな氣がした。それに比して、秋聲は好い頭を持つてゐた。かれはお話を聞いただけでも、すぐその物の核心に入つて行くことが出來た。『あらくれ』などは、中でも

ことにすぐれた作であつた。

四十七

AとBとが話した。二人は深く文壇の状態や空氣や傾向に通じてゐるらしく、頼りにシガアを燻らしながら、いろいろなことに及んでゐるが、Aは急に、

『さうすると、つまり、あの間にも時世は絶えず動いてゐたんだね。自然主義が凱歌を揚げてゐた時には、もうあとから芽が出し始めてゐたんだね？』

『それはさうだね？』

Bは言つた。

『つまり、さうすると、あの鷗外さんが顧問になつてゐた『ヌバル』、あそこいらからさういふ氣分が生れて行つてゐたのだね？』

『さうだね。さう言つて了つては何うかわからないけれども、さうした形はあつたんだね。鷗

外さんは、末流文壇などと見縊^くつてゐた中から、あゝした氣運が勃興しやうとは思ひもかけなかつたらしいからね。つまり、あの勢力絶倫であつた鷗外さんも、あの氣運には少なからず押されたといふ形だつたんだからね。まごまごすれば、流されて了ふやうな氣がしたんだね。それはあの誰れかの譯したイブセンのマスタービルダアの序文を鷗外さんが書いてゐるが、あれを見ると、さうした心持がよくわかるがね。何しろ、四十二三年のあの氣運は盛んなもんだつたからな。大抵なものは流されて了つたからなあ』

『本當だね。えらい勢だつた！』Bは考へるやうにして、シガアの烟をふうと長く吹き出しながら、『鷗外さんだから、踏留つてゐられたんだね』

『それはさうだ……。夏目さんなども随分ひどい追跡狂に惱まされてゐたつて言ふからな』
『それは何うしても鷗外さんよりも夏目さんの方がへまなだけそれだけ人が善かつたからな。』

鷗外はあれで中々軍師だよ。山縣公に取入つてゐた形などでもわかつてゐるぢやないか。陸軍などでは、森軍醫總監と言へば、政治家のまたその政治家だつていふ風に言つてゐるからね。

腕も手も両方あつた人だよ』

『それはさうだね。夏目さんなどよりも實際のことが氣になつた人だね。作とか藝術とかいふことよりも、實際の勢力を自分が握ることを好んだ人だね。』

『さうすると……』Bは考へて、『矢張、あの「スバル」は鷗外さんが間接にやらせたものなんだね?』

『それはさうさ、現に、與謝野君があれに關係してゐるぢやないか。與謝野君は、鷗外さんの弟子と自づから言つてゐる人だからね。』「明星」時分からの關係があるんだよ。それに、與謝野君だつて、あの潮流に乗ることは出來ずに、他に外らされて了つた人だからね。ヤキモキしてゐたに違ひないやね。で、あの「スバル」をやつたんだよ』

『さうすると、つまり、あの雜誌が當時の潮流に對する唯一の反對派だつたんだね?』

『まあ、さうだね』Aは答へた。『それに、あの永井荷風、あれが、歸朝當座は彼方此方に眼を配つてゐたが——何方に行かうかと迷つてゐた風だつたが、急にそれが慶應に行くことになつたので、その慶應がまた早稻田に對抗してゐる形になつてゐたので、自然の成行として、あの早稻田と密接な關係を成してゐる自然主義的傾向に反對する形となつた。そしてそれが一方の

「スバル」と相呼應した——』

『さうかな……あまり獨斷にすぎはしないかな』

『いや、それはたしかだ』Aは主張した。『さういふ潮流だから、ひとり手に、不運なもの、不平なもの、またこれから出やうとする芽などは、皆なそつちの方へ行つた』

『つまり、そこに、一つの異つた流が出来て行つたわけだね？』

『さうだ——鷗外さんの考へでは、自然主義も好いけれども、何もそれでなければならぬといふわけはない。かういふ主義もある。あゝいふ主義もある。學者だけにさういふ風に思つたんだね。』

『それはさうだらうな』

『それに、一方自然主義の方でも、四十三四年頃には、もう頂點に達したといふ形だつたからね。言はゞ天下を統一したといふ勢だつたからね。それから下るばかりだつたんだよ』

『面白いな』

Bはさも感心したやうに言つた。

『それに、作者の上から言つても、潮流は絶えず動いてゐるんだからね。ぐんぐんと黒潮以上に速く速く流れて行つてゐるんだからね。片時も留つてゐはしないんだよ。それに、作者の方にも疲勞や退屈や生命の浪費が襲つて来るからね。峠まで上つて来る時のやうな元氣は何うしたつてなくなるわけだからね？』

『成ほどね……。それで少し休息したり、のんきになつたり、まあ好いちやないかと言ふ氣分になつたりするんだね？　そしてその間に潮流は遠慮會釋もなく、ぐんぐん流れて行つて了ふんだね？』

『さうだ……。そしてそれは何うすることも出来ないもんだ。人力で廻らすことの出来ないもんだ。だから、何うもしやうがないよ』Aはかう言つて、『だから自然主義のすぐあとに、享樂といふことが一時流行したちやないか？』

『さうさう——たしかにさうだ。』Bは深く點頭いて見せたが、すぐあとをついで、『しかし、あの享樂主義といふのも變なもんだつたね？　あれは別に大きな潮流でもなかつたんだね？』

『いや、さうでもないと思ふな。あの時代にも面白いものがあつたと思ふな。永井荷風、近松

秋江、その他にもまだ澤山のたぢやないか。それに、かういふ形もあるんぢやないかね。作者達——大眞面目だつた作者達が、段々年を取つて、世間にも出る、金廻りも好くなる、従つて享樂もやつて見ると言つたやうな形もあるんぢやないかな？ だから、年齢に由つて、自然主義の流行る時期もあり、享樂主義の起る時期もあり、象徴主義の出て来る時期もあるといふわけぢやないかね？ 大きな「時」の潮流、それは儼として宇宙に溢んでゐるが、それ以外に縦たてに作者の箇人々々にさういふ時代わけが出来はしないかね？』

『それは出来るね』

『つまり三十四五の頃には、漸く世間も人間もわかつて来るので、無所畏といふところまではまだ行かなくとも、いくらか大膽になつて、今まで出て行けなかつたところまでへも、ドシドシ出て行く。つまり自然主義的傾向だね。ところが、それが三十七八から四十ぐらゐになると、理屈よりも享樂の方が好いといふ風になるからね。何うしたつて實際を重ずるやうになるよ』

『それはさうだね』

『それから言ふと、人道主義なんて言ふものは、矢張、若い人達のいふことだね。また三十四

五時代の自然主義までも達しないやうな人が言ふことだね。とても出来もしない理想を越へて行動してゐるやうなもんだからね。時が経つにつれて、さういふものは、ひとり手に壞れて行つて了ふからね。』

Bは黙つて聞いてゐた。成ほどさういふ形もないではなかつた。獨斷にすぎらやうな氣も何處かでするにはするけれども、縦に見て来れば、さういふ風に見られないこともないではなかつた。Bは言つた。『さうすると、無限に生れ出て来る新しい時代にも、縦に見ると、いつでもさういふことが行はれてゐるといふわけですね。いつでも人道主義と自然主義と享樂主義と象徴主義とがあるわけですね!』

『作者の心の方に?』

『さうです』

AもBも黙つた。二人の胸には永遠に過ぎて行く人生が大きなスタイルで動いて行つてゐるやうな氣がした。

暫くは沈黙の中にすぎたが、やがてBは言つた。

『何うも、皆なさうなんだから、しやうがありませんね。厭でも何でも、さうなるより他爲方がないんだから——』

『さうとも——』

『大きい人生の陥穽だ！』Bはさも悠々としこ人生を身に感じたと云ふやうにして言つた。

四十八

上田敏氏なども、向う側の潮流の中にあるひとりであつた。かれは鷗外氏と合ひ、荷風氏と合つた。かれはフランス文學に通じ、アナトオル・フランスなどと共通した點を持つてゐる詩人であつた。その作中には、『うづまき』といふのがある。永井荷風の『冷笑』などと傾向を同うしたものだつた。

かれも小説を書いたり詩を書いたりしたかつたらしいが、學者といふ形が、大學教授といふ形が徹底的にそれを遮つた。かれは夏目さんのやうに、何も彼も捨てしつてふことが出来なかつ

た。否、出来ないのではなかつたかも知らなかつたけれども、世間が夏目さんほどに、何も彼も捨て、もそつちに赴かうと決心させるほどに、かれに好い顔を見せなかつた。世間はいつも横顔のみをかれに見せた。

それに、その教養から言つても、かれは新しいといふことは出来なかつた。何處までもかれはロマンチシストであつた。藤村がロマンチシストである以上にロマンチシストであつた。従つて、かれの文章には、新しい言葉と舊い言葉とが一緒になつて混雜してゐた。それは未だ完全なスタイルを成すに至らずした終つた文章と言つて差支へなかつた。

明治から大正に移つて行く間にはいろいろなことが起つたが、平面描寫論などもその時分盛に批評せられたものであつた。

つまりそれは自然主義が例の爬羅剔抉——解剖——習俗破毀——さういふものに甘んじてゐることが出来なくなつて、次第に印象主義乃至後期印象主義に移つて行く過程であつた。従つてその以前の方を自然主義前派、以後の方を自然主義後派とすることが出来た。

いくら自然主義でも淺薄な宣傳になつて了つては駄目である。自然主義はもつと最初の純な

ものに戻つて行かなければならない。かう段々考へ出して來た。そしてドイツの徹底自然主義などがその目標とされた。従つてゴンクウル兄弟のものなども持ち出された。

徹底自然主義——印象主義——平面描寫、此三つは立派に連關したセオリーを持つてゐた。

それはあらゆる説明を排し、あらゆる理屈を排し、時にはその作の持つた内容すらをも重んぜずに、飽まで現象的に進んで行かうとするものであつた。現象！ それ以外に何もない！ 何もない！ かうその主義は叫んだ。現象！ それさへ十分にあらはし得れば、あらゆるものはすべてわかる！ それのわからないのは、わからない方の頭がわるいのである。かうその主義は言つた。

徹底自然主義の作品などを讀んで見ると、そのセオリーがよくわかる。つまり小説を繪畫と同じやうにしやうとした運動である。つまり、あらはしたそのものに、また All and None の背景を持たせやうとしたのである。此方の心と感じの如何に由つて、またはその教養と經驗の如何に由つて、淺くも深くも、大きくも小さくも見せやうとしたのである。更に言ひ換へれば、第二の自然の創造である。

ドイツの徹底自然主義は、そのセオリーは立派であり、學術的であり、十分いろいろな空氣を浮べるに足りるものであつたけれども、しかも作品としては二三の小さなものしかあとに残さず、却つてそれを利用したハウプトマンの劇にその發展を見たにとゞまつたのは、まこと惜むべきことであつた。しかし、その成功不成功に拘らず、その目的としたところは、非常に面白いものであらねばならなかつた。

然らく、藝術ばかりではなしに、あらゆるものに對して、さうした現象主義は、一番高い位置を占むべきものではなかつたか。何でも最後はそこに至るのであつて、あらゆる宗教も、あらゆる哲學も、皆なそこまで行つて、あとは何うすることも出來ずに、自分の微力を嘆じて、そして引返して來るのであつた。『とても出來ない？ 何故と言ふのに、それが出來れば自然が出來るわけだから！』かう言つて引返して來るより他に爲方がなかつたのである。

平面描寫といふことは、單に平面に描くといふことではない。All and None の背景をその背後に持たせるために、何等の説明をも加へず、何等の理屈をも加へず、そのまゝ、自然のまゝ——つとめて自然のまゝにそれをそこに深び上らせるだけのことである。しかしセオリーが

正しいだけそれだけ技巧としは非常にむづかしいものである。作者の持つたものが自然と同じぐらゐの程度にまで進まなければ、その技巧の完成は出来ないものである。従つて好い加減なものがやれば、つまらない平板なものになつて了ふのである。こんなものを書いてそれで何うするんだ！ といふことになるのである。

これが即ち徹底自然主義の成功せず、平面描寫の世に容れられなかつた所以である。否、そればかりではない。結果として、一時、平凡主義に墮したやうな作品が世に多くなつて行つて、そのため活氣がなくなつて了つて行つたのである。爬羅剔抉——宣傳——習俗破毀の前派は、わかり易いために世に容れられたが、印象主義の後派は、難かしかつたために、次第に世間に顧みられなくなつて行つたのであつた。

それに、この時分には、あれほど盛であつた氣運が停滯して、何處か因循したやうなところがあちこちに見え出して來た。自然派にも型が出來たといふ聲が高くなつて行つた。

四十九

享樂派が次第に芽を出すやうになつて行つた。

私は此處に暫く近松秋江氏や、中村星湖氏や、谷崎潤一郎氏や、長田幹彦氏について書かなければならない時期に到達したことを言はなければならなかつた。それは大正二三年から四五年の事であつた。かういふ人達は、今ではすでに立派な作家であり、そのあとにも既に新進作家が澤山に澤山に出来て来てゐるけれ共、それでも白鳥氏や、泡鳴氏や、秋聲氏や、荷風氏や、藤村氏のすぐあとに出て来た作家と言へば、何うしても諸氏を數へなければならなかつた。

その時分であつたと思ふ。私はY君を久し振りで牛込の加賀町の寓に訪問した。その時、私達はこんな話をした。

『早いね、實に早いね。君等が世の中に出たのは、つい此間だと思ふのに、もうあとのあとがあるんだね？』

『本當だよ』

『今では、君等の時代ばかりではない。谷崎とか、近松とか、長田とか、中村とかいふ人だつて、あとからぐんぐん押されてゐるんだね。』

『本當だよ。それを思ふと、作家などの壽命は短かいもんだよ。』

『君の家で逢つた白石君などでも、もう新しいチャキチャキといふわけには行かなくなつてゐるんだからね。もうあのあとにすら新しい時代があるんだからね。』

『さうだよ、本當だよ。頭が白くなるのも無理はないね』

Y君は、話頭を改へて、『それにしても何ういふ人があとに残るのかな？ 全くわからんね。あんな作者が……』と思はれるやうな人が却つてあとまで残るかも知れないね？』

『でも、好いものが一番多く残るわけだらう？』

『さうばかりは言へないよ。社會の批評や、評判なんかあてになつたものぢやないからね？ 何しろ、君、雜誌や本がどのくらゐあとまで保存されてゐると思ふ？』

『それはごく短い間だらうね？』

『短い間も何にも……。何んなにえらい評判のことが書いてあつたものでも、また何んなにえらい有益な研究が載せられてあつたものでも、四年経つと、図書館以外にもう世の中に一冊もなくなつて了つてゐるんだからね——？』

『さうだらうな……………』

『四年の命だからね。では、本なら何うかつていふと、それだつて矢張同じことだよ。三年と持つてゐやしないよ』

『何うもしやうがないな……………』

『兎に角、一度は何んなものでも埋められて了ふんだね？　そしてあとでまた生き返るのだが、その生き返る率なんてほんのわづかなものだからね。韓退之の文章を讀んでも、歐陽修の文章を讀んでも、その序文などに、非常にえらい文章家がゐるやうに書いてあつても、それが全く埋却して、今日まで傳らないやうなものが澤山あるからね。その點になると、全く運不運だよ』

『さうかな』

何ういふ動機で、さういふことをY君が言つたのか、それは私にはわからないけれども、たしかにそれも一つの事實であらねばならなかつた。私はY君や生田葵山氏や蒲原有明氏など、一緒に、イギリス公使館裏の小さな西洋料理で會をした時分の事を思ひ出した。長い間には、いろいろな事があつた。何といふ理由なしに、——唯、その作品を發表しないためばかりに、いつの間にか文壇から遠ざかつて行つてゐる人達もあれば、暮星のやうに出てすぐ引込んで行つて了つたやうな人達もあつた。私とY君とは、その時分懇意であつた人達をそれからそれへと數へて見た。それは双手の指に餘るほどそれほど多かつた。

『さうして見ると、君なんかマア長い方だね?』

Y君は笑ひながら言つた。

『さうだね。長い方だね。それといふのも、文壇にくつついてゐるより他、何うにもし、やうがないからかも知れないね。つまりそれより他に能がないのだね?』

『それもあるね』

『もう少し他に出来る仕事があれば、ぐんぐん其方の方へ出て行つて了つたらうからな……』

文壇なんかにまごまごしてゐるはしないからな——』

『……………』

Y君はそのまゝ黙つて了つた。かれの頭も、もはや半は禿けかけてゐるのを私は見た。これがあの若い詩人か？ 島崎君と戀の歌に於て拮抗した『野邊のゆき』の作家か？ 私は一種不思議な悠久な思ひに撰たれずにはゐられなかつた。

五十

近松秋江氏は私はかなり古くから知つてゐる。尠くとも明治三十三四年頃から知つてゐる。正宗氏と比べては、その方が先きであつたかも知れないけれども、兎に角同級生で、略々故郷を同じくしてゐるといふことは、私も前からよく知つてゐた。

しかしかれは文壇に於ては、正宗氏のやうに好運ではなかつた。かれは長い間くるし苦んだ。小説が書けぬことで苦しみ、容易に文壇に出られないことで苦しみ、自然派の夥伴になることを好

まない點で苦しんだ。抱月氏に世話にはなつたけれども、純然とした早稲田の夥伴になることも出来ないの、そこでも繼子扱ひをされて困つた。かれは何方かと言へば饒舌家でそして道聽途説家であつた。彼方にも行けば此方にも行つた。そして到るところで、あまり好感を以て迎へられたとは思へなかつた。

かれは自然派にも夏目氏のもとにも平氣で出かけて行くひとりであつた。

かれはその姓にも示してゐるやうに、近松のものが好きであつた。曾て早稲田に生徒である時分、正宗君や中村吉藏氏や西村醉夢氏や高須梅溪氏など、近松研究會といふのを起したことがあつたが、その頃から近松には深く憧憬してゐたらしく、始めは本姓の徳田であるが、いつからともなしに、近松第三世を以て自から任ずるやうな形になつて行つた。

かれは永らく文壇に蟄伏してゐたが、享樂主義が芽を出し始めた頃になつて——つまり自然派が疲れたり爛れたりした後になつて、『別れたる女に與ふる手紙』といふ一篇を公にして、一躍して有名な作者となつた。

それからかれは『疑惑』を書き、『舞鶴心中』を書き、『仇浪』を書き、『未練』を書いた。太い

粗い自然派の作風に讀み勞れた世間は、そこから一種抒情的な、女々しい、細かい感じを受け得たことを喜んだ。

しかし、かれは近松の流れを汲んだものと言ふことは出来なかつた。近松と比べて、かれは小さかつた。繊細にすぎてるた。近松はつくる作家であるのに、かれはあらはす作家の方に近かつた。自己に閱歴がなくては、決してすぐれた作を書くことの出来ない作者であつた。かれよりは正宗君の方が却つて近松に似たところがあるのを私は感じた。

しかし、『別れた妻』『疑惑』『未練』などの持つた藝術味は、ちよつと他に類を求めることの出来ないものであつた。それはかれの實生活を知つてゐる讀者は、作と實際との比較上、一種不愉快ないやな臭氣を嗅ぐやうな氣がするのを何うすることも出来なかつたけれども——またその臭氣のために壓倒されてその作のすぐれた味をも本當に味ふことが出来ないやうなところがあつたけれども、それでも、その本當は、その眞劍は、時を経るに従つて、かれの實生活のこの世から亡くなつて行くにつれて、益々その光輝を増して來るであらうと思はれた。

これといふのも、かれが男女の問題について深く體驗するところがあつたからで、その事實

は一々これをその作中に指すことが出来るばかりでなく、或は人に由つては、その題材に由つて、もつと烈しい強い悲しいものをつくる事が出来たかも知れなかつた。それに、到るところで女のために苦しんでゐるかれの惨めさが、さうなつて行くのがあたり前であるといふやうに他に思はせるやうなところがあるのは、そこに、實生活に、矢張、本當でないところが、彌縫に彌縫を重ねてゐるやうな形があるためではなかつたか。

かれは秋聲氏と善く、時には僕は徳田さんの弟子です！ など、いふことがあるさうであるが、秋聲氏と比べては、かれは全く違つてゐることを私は思はずにはゐられなかつた。かれには秋聲氏の持つたやうなあゝした客觀味は乏しかつた。また多勢の人物を並べて、それを一つ一つ丹念に刻り上げるやうな技倆をも持つてゐなかつた。人生といふものに對する洞察でも、秋聲氏のやうに大きく且つ廣いとは言ふことは出来なかつた。かれの味は全くその主觀的な、閱歷的なところにあつた。

これに比べると、中村星湖氏は全くその形が違つてゐた。かれは早稻田の自然派の島に生立つた作家で、島村氏の感化をことに多く受けたひとりであつた。かれは批評に、創作に、常に

チキバヤとした態度を取るのを例とした。短篇にもすぐれたものが多かつた。『失はれた指環』はその多い短篇集の中でも殊にすぐれたものであると言はなければならなかつた。

五十一

私は自分で翻つて考へて見た。自分は曾て齋藤綠雨の戀愛觀を讀んで何う思つたひとりであつたか。それに對してその不眞面目を責めたひとりではなかつたか。内心ではその理屈に點頭しながらも表面ではその言ひ方のひどいのに激昂したひとりではなかつたか。否、そればかりではなかつた、女性崇拜、戀愛崇拜にその全心を集め、戀は眞面目でなければならぬといふことを高調したひとりではなかつたか。

世間普通の人達の言ふやうに、さういふ風に女性を取扱ふことを快しとしないひとりではなかつたか。

私はいろいろなことを思ひ出した。戀を玩弄するものを罵つたことをも、不謹慎に女のこ

とを話すものに唾をかけてやりたく思つたことをも、何も彼も……。そして私はさういふ意味で、硯友社の人達に笑はれ通しに笑はれて來たことを思ひ起した。

『あいつは甘い少女黨だ！』

かう誰にも彼にも言はれた。

それでゐながら、その時分、私は何を思つてゐたであらうか。藝者のことに通じてゐたり、興斜のことを十分に書きこなしたりする人達に押されたために、さうした態度になつて行つたのではなかつたか。腹の中では、今に見ろ、俺だつて、さういつまで馬鹿にされてはゐないぞ！ いつか一度はさういふ題材を縦横に取扱つて見る時代がやつて來るぞ！ かう思つてゐたのではなかつたか。

私ははつきりとそこに性慾を見ることが出來た。一から二へ、二から三へと進んで行つてゐるその性慾のあらはれを。次第に大膽に、羞耻も何もなくなつて行つてゐる性慾のあらはれを。尊敬するとか、崇拜するとか、保護するとか、さういふことは、異性に對してあるひそかな慾望を持つてゐるために、それでは本當ではない、兩方の間に些の被衣をも置かないやうな、さ

うした純粹な形で、異性同士は互ひに相抱擁しなければならぬといふやうな性慾のあらはれを、『さうだね、何うしたつてさうなるね。それでなければ、本當でないからね』かう私は後に言つたことを思ひ起した。

凡そ作品に對して、この性慾ほど大切なものはなかつた。その作品にあらはれた性慾の形の如何に由つて、その作家の心の何ういふ位置にゐるか？ 低級であるか？ 高級であるか？ 幼稚であるか？ それとも深酷であるか？ 無邪氣であるか？ 卑怯であるか？ 何ういふ情偽を持してゐるか？ 何ういふ献身的犠牲の精神を持つてゐるか？ その献身的犠牲は女性の心を得んがための方便であるか否か？ それともまた大勢の女を相手にして、場合に由つたらひとりづゝそれを自分の自由にしやうとしてゐる質か？ それともまたひとりに深くはまり込んで、容易にそこから出て來られない質か？ その人の女性觀はディシプリンされてあるか何うか？ まだいろいろな世間欲に提はれてゐるはしないか何うか？ 戀愛といふものは根本的で、それは耻づべきものでも隠くすべきものでもないといふ心の境地に達してゐるか何うか？ さういふことがすべてはつきりとその作品に由つて押し料ることが出来るのであつた。そして、

それに由つてその作家の大きいか、小さいか、豪いか、豪くないか、深いか、深くないかを知ることが出来るのであつた。

また更に一步を進めて、この作者は何の點まで女を知つてゐるか？ 女を知つてゐる程度はお話程度か、それとも本當か？ 好い加減なところで低徊してはるはしないか？ 女の美にあくがれて本當のところまで入つて行くことが出来るにるはしないか。女にだまされてるはしないか？ 女を買被りすぎてゐるはしないか？ 女を好い加減のところにおいて考へてゐるはしないか？ さういふことが、ひとり手にその作品の上にあらはれて来るのを拒むことは出来ないのであつた。

さういふ點では、近松は如何？ 西鶴は如何？ モウバツサンは如何？ アナトオル・フラ
ンスは如何？ 紅葉は如何？ 柳浪は如何？ 二葉亭は如何？ ハウプトマンは如何？ ダヌ
ンチオは如何？ 漱石は如何？ 泡鳴は如何？ 藤村は如何？ さういふ風にも一々點檢して
見て來ることが出来るのであつた。

ロシアのツルゲネフ——あの人は別の意味に於ては、すぐれたところがないではなかつたけ

れども、性慾の方面では、さう大して深いものを持つてゐるとは言へなかつた。フランスのアルフォンス・ドオデエ、あれも矢張さうであつた。細君に押へられてその家庭に落附いてゐたやうなかれには、深く男女の微妙な心持を描くことは出来なかつた。さうかと言つて、作者は何んなことでもしなければ駄目だといふのでもなかつたけれども、妙くとも男女の深い心理に入つて行くことだけは必要であつた。

そしてこの性慾問題は、世間が何う變らうと、思潮が何う變化して行かうと、また年月がいかにかに經たうと、決して變らないものであつた。私達は『古事記』の中にも、『萬葉集』の中にも、ホウマアの中にも、マアロウの中にも、すべてはつきりそれを見出すことが出来た。また、それを今のプロレタリアの中にも、ブルジョワの中にもそれをあてはめることが出来た。『さうだね。それだけは違はんね？ 何處まで行つても、一夫一妻の理と、2と3との悲劇とは同じやうについて行つてゐるだらうね？ どんなに兩性問題が發達したところで、それがなくならうとは思へないからね？』こんなことを私達は言つた。

『つまり、明治大正の文壇だつてさうだよ。抱月氏のやつたことにも、それがあつたし、泡鳴、

藤村、すべてさうだからね。さう言へば僕だつてさうだよ。白鳥のやうにあゝいふ風に生活してゐるといふことの上にも、その性慾の形はちやんとあらはれてゐるぢやないか。秋聲君にだつて、あらはれてゐるぢやないか。そしてさういふ風に皆なが違つてゐるといふことも面白いぢやないか！』

現代の作家の作品中に、何ういふ風にその性慾が、その兩性觀があらはれてゐるかといふことを考へて見ることも面白い興味あることではなかつたか。私の考へでは、紅葉のはさう大して深味を持つてゐるとは思はれなかつた。『多情多恨』のあの待合の描寫などでも、ちよつと行つて寫生して來たくらゐるの精細さしか持つてゐないし、『三人妻』の三人の女の書きわけ方にも、話で聞いた、または才でごまかしたぐらゐるの程度しか書いてなかつた。その點に行つては、或は柳浪の『今戸心中』や『淺瀬の波』などの方がもつと先まで深く行つてゐるかも知れなかつた。綠雨は前にも言つたやうに、心持だけはかなりに深いところまで行つてゐたけれども、その書いたものには、とても西鶴あたりには及ぶほどのものはなかつた。露伴にも、鷗外にもさういふ方面は餘り深く開拓したとは思へなかつた。藻社の連中では、何と言つても風葉が一番

さうした問題に觸れたと言ふことが言はれ得るだらう。鏡花は狹斜に通じてゐるけれども、直寫することの嫌ひなかれの作品には、本當の「あらはれ」を何處にも容易に發見することが出來なかつた。

獨歩の中には、暗い性慾——それだけが暗いといふやうな性慾を私は見出すことが出來た。『惡魔』『正直者』などいふ作がそれである。それに、女のことについても、かれはかなり深く知つてゐた。例のお信さんばかりではなく、いろいろな女を透してそれを知つてゐたらしかつた。『女難』『節操』といふ作などがあつた。

白鳥氏は女をよく知つてゐると言はれてゐる。また女をよく書くと言はれてゐる。泡鳴もその一人である。時にはかれは自分ひとりか女の本當のことを書いたと言ふやうに自惚れてゐたことなどもある。秋聲もまたその一人である。狹斜——ことに廓の描寫は手に入つたものだと言はれてゐる。

その後にも、さういふ人達が多く出て來た。谷崎潤一郎氏のものにも、かなり深いものがあるのを私は見たことがあつた。床の中での2と3の悲劇を書いたのを見たことがあつた。里

見氏のものにも、さうしたすぐれたものが多かつた。最近の『直輔の夢』などは、たしかに男女の心の中に深く入つて行つたものでなければ書くことの出来ないものだといふ事が出来た。

これに引きかへて、有島武郎氏の『ある女』や『石にひしがれた雑草』などにはさう大してすぐれたものを見出すことが出来なかつた。女に對する創造がすべて見え透いてゐるやうな氣がした。概して、女性に偏つた作者は、女性に評判の好い作者は、女性をその周圍にあつめてゐるやうな作者は、實際的には性慾を痛切に感じてゐるには相違なかつたけれども、それを描き出すといふ上に於ては、十分にその眼を開くことが出来ないやうな形がひとり手に出て來るのではないかと思はれた。女に好かれた近松と女に嫌はれた西鶴との區別がそれでもわかつた。

五十二

『それでは島崎君に對して、君は何う思ふね？』

かういつも私の相手になるK君が訊ねた。

『性慾の上でかね?』

『さうさ……』

『島崎君の作は、どれを繙いて見ても、性慾の匂ひが盛にしてゐるぢやないか。現代の作家の誰よりも性慾的ぢやないか。「春」を見給へ。「家」を見給へ。それからその短篇を見たまへ。すべて中に満たされた性慾が、はちきれぬやうな性慾が、殻を破つてそして出て來たやうな感じがするぢやないか?』

『さうかな——』

いくらか首を傾げるやうにしてK君は言つた。

『さうだよ、たしかにさうだよ。一番始めの「若菜集」だつてさうだ。或はあの詩集を出した、もつとぐつと以前から、女の肌などは知つてゐた人ではなかつたかと思ふね。それはY君からきいた話だがね、島崎君がY君の故郷の下總の布佐に行つた時、つまり全集の一卷の中の「利根だより」のあの時だね。その時Y君は島崎君から、君は女を知らないんですか? とか

何とか言はれて、非常に困つたことがあつたつて言ふ話だつたよ。それから押して、「野邊のゆき」と「若菜集」とを比べて見ると、その違ひがよくわかるやうな氣がしたよ。そのことがあとで「春」の中に書いてあるぢやないか。』

『さうだね?』

『だから、若菜集を書いた時には、もうちやんと異性を知つてゐたわけなんだね?』

『さうかな』

『だから、若菜集の中からでも、童貞でない性慾の匂ひを十分に嗅ぐことが出来るぢやないか。そしてその匂ひであればこそ、あのやうに世の中を動かしたのでないか。空疎な、單純な空想詩ではなかつたのではないか?』私はかう言つて、『鳥崎君ぐらゐる性慾に苦しんだ作家はな』

『さうかな?』

『あの重々しい氣分、あれが即ち性慾の重荷だよ』

『さう言つて好いかな。ちと獨斷にすぎはしないかな?』

『それはかうは言ひ得るかも知れない。つまり、さういふ批評をする僕がさうだから——人一倍性慾論者だから、それでさういふ風に見える！ さういふ形にはかり見てゐる！ さうは言へるかも知れない。人間といふものは、大抵難り合つてゐるもんだからね。此方の心にさういふものがなければ、向うのものだつて、はつきりそれと見ることは出来ないやうなものだからね？』

『それはさうだね』

『しかし、ある作家に取つては、性慾は決して重荷にならないものだけれども……島崎君はそこに重味があると言へば言へるんだね。眞面目だからね。わざとあゝしてゐるのではないかと思はれるくらいそれくらゐ眞面目だからね。……だから、島崎君は何うしたつてモウパッサンや西鶴といふ風にはなり得ないね。何方かと言へばフロオベルだらうね。ゴンクウルとも違つてゐるね。ツルゲネフにも似てゐるところはあるにはあるけれども、あゝした重々しい性慾はツルゲネフにはないね？』

『フロオベルには、では、さうした性慾があるかね？』

『それはあると思ふね。最後の作のフバカル・エ・ヘキツ、へなどにも澤山にあると思ふね。矢張、かれも半生を獨身で暮したやうな人だからな……。ボヴリイ夫人のあの重さだつて、矢張、性慾の重みと言へるからね?』

『それはそれでまア好いとして』K君は一步を進めて、『それにしても、性慾について、島崎君は何うそれを取扱つたかといふことが問題になるね?』

『それはなる——』

『矢張、女を周圍に近づける作者のひとりかね?』

『島崎君には、性慾は研究したり、玩弄したり、または解剖臺に載せたりするやうなものではないのだ。もつと大切なのだ。それに觸れると、何うしても全身的にならずにはゐられなくなるのだ。そこがモウバツサンや西鶴になれないと僕が言つたところさ。だから、かれの作からは、性慾を研究したり、玩弄したり、解剖臺に載せたりしたやうなものは、遂に遂に發見することはないよ。『爺』といふ短篇があつたね。あれなどはそれでもいくらかそれに近い方だけれども、とてもモウバツサンのやうに輕快ではないからね。だから、島崎君に取つては、性慾は

單に研究材料にすることは出来なかつたのだよ。だから、つとめてそれに觸れないやうにしてゐたのだよ。そこにその作の持つた重味があると同時に、性慾に對する理解と言つたやうなものを發見することが出来ないわけだよ』

『では綠雨の行き方などは、丸で違つた行き方だつたんだね？』

『それはさうとも………、綠雨などゝはぐつと違ふよ。』

『「新生」については、何う思ふね』

玉君は急に話頭を轉じた。

『何うつて？』

『あれも矢張さうかね？』

『それはさうさ………。あれなどは、ことにその性慾の重々しい匂ひが嗅がれる作ぢやないか。明治大正の文壇で、あれくらゐ性慾的な匂ひのする作はないぢやないか？』

『さうかな』

『壓迫した性慾、それから起つて來る匂ひが鼻を衝くぢやないか。それはあの作については、

いろいろな問題がある。藝術家としてのかれと人間としてのかれとの問題もあれば、「實行と藝術」に關した問題もある。好いとも言へるしわるいとも言へる。あの作がその罪を償つて餘りあるとも言へる。しかし、さういふことは此處では言はぬとして、兎に角あの作から重々しいいやな匂ひの嗅かれることは事實だらう？」

『それに、いくらか氣障と言つたやうな氣もするね？』

K君は口を挿んだ。

『氣障？ それは止むを得ないね。あゝして眞面目でゐては、何うしたつて、氣障になつて來るよ。つまり自己の位置をあまり自覺しすぎてゐるやうなところから起つて來る氣分だね。さういふ氣分は「新生」ばかりぢやない。島崎君の作には、氣障とか、氣取るとかいふことは、昔からあるぢやないか？ 若菜集あたりにだつてあるぢやないか？』

『それはさうだね。その點で島崎君のものがいやだ！ つていふ人はかなりあるやうだね？』
『しかしキザとか氣取るといふことでさう言つて了ふのは、餘りに島崎君を知らない人だね？
もつと大きな立派なものを島崎君は持つてゐるよ。それは僕としては、友人としては、もつと

碎けた、何でも打明けて話して呉れるやうな、もつと親しみのある、佛教で言へば大乘的のところが出て来て呉れ、ば好いとは思はないではないけれども、島崎君に取つては、それは無理な註文だからな。あの眞面目な、容易に心を聞かない、あくまで忍耐のところがある。その本質なんだからな。そしていつでも、何んな時でも、その心持で通して来たんだからな。何んなことに出席しても、皆な自分で獨りで處分して通つて来たんだからな。それは「新生」を讀んだだけでもわかるぢやないか。その證據には、友達だなどと言つたつて、誰ひとりその話を話されたものはないんだからな。いや、それは昔からさうだつたんだよ。誰にも言はずに、突飛なことをして友人達を驚かすのが、島崎君の習慣だつたんだよ』

『さうだらうな。さういふ氣質なんだらうな。さうでなくつては、あの「新生」は出来るわけはない』K君はかう言つたが、更に突込んで、『で、あの「新生」に書かれた思想、つまり後半部に於ての思想、あれについては、君は何う思ふね？』

私は言つた。

『あれがつまり信ずるといふ境ではないか。信仰とか、宗教とか言つたやうな門戸に迷したと』

いふ形ぢやないか。また島村抱月氏や、岩野泡鳴氏などの墮ちて行つたところから起き上つて來たやうな心持ではないか。何うも僕にはさう思はれるね。抱月氏などでも必然あそこに行かなければならないのではなかつたか？』

『さうすると、つまり、あそこが新しい思想のどんづまりと言つても好いわけだね？』

『さうだね？ まア、さう言つても好いわけだらうね？』

『それほどあそこが立派な境地と言ふことが出来るかしら？』

K君は首を傾けつゝ言つた。

『それは立派な境地だか何うだか、それはわからない。しかし一步を進めてゐることは事實だとは思ふな。あの境は存外消極的なものかも知れない。また存外藝術的でないものかも知れない。行當つた壁のやうなものかも知れない。あそこに行つては、もう描いたり書いたりするといふよりは、説法でもしなければ満足が出来ない境かも知れない。しかし、兎に角、あそこまで行つたことは面白いね。自己だけを趁つてそしてあそこまで行つたことは面白いね』

『さうかな——』

『しかし、かういふことは言へる。あの境に行つたのは、それはたしかに突當つた形だとは言へる。あれから先へは容易には行けぬ。大抵の人は、あそこまで行つて、そしてまた引かへして来るのであるが、さて島崎君は何うするか。何ういふ風に出て行くか。あのまゝあそこに踏留つてゐるか。それとも引返すか。あの『處女地』といふ雑誌を出したことなどは、私はあまり好いとは思はないね……』

『さうですね。あれはちと變でしたね？』

かうK君は言つた。

研究的ではなかつたけれども、また解剖に解剖を加へたやうなものではなかつたけれど、しかも兎に角に、島崎君の作からはさうした性慾の重々しい臭氣を嗅ぐことが出來た。何うかすると、讀む方でも、普通の状態を通り越して、氣が狂ひはしないかと思はれるやうな重苦しい感じを受けた。これに比べると、秋聲氏や泡鳴氏の暗さは、全くそれと性質を異にしてゐた。決して藤村氏のやうに肉體的ではなかつた。

今、私の机の上に二三冊の新しい小説が載つてゐる。

それは私に取つては、全く知らない名であつた。その教養から言つても、その経験から言つても、またその經て來た時代から言つても、私とは何等の交渉をも持たず、何等の縁故をも持たず、何等の系統をも持つてゐない作者の名であつた。否、そればかりではなかつた、私とその人達との間には、既に度々新時代を隔てゝゐた。そこには最早私達の受けたやうな硯友社や二葉亭や鷗外の何等の感化をも見出すことが出来なかつた。

前に書いた潤一郎、星湖、秋江あたりからも、既に二度も三度も新しい時代が來てゐた。新しい時代！ 何といふ好い言葉だらう？ 何といふ好い音だらう？ そこには希望がかゝやいてゐるではないか。金色の光が眺められてゐるではないか。新しい戀もあれば、新しい名もあるではないか。努力すればいかやうにも酬ゐられて來る位置があるではないか。假令少しの不

如意があつたにしても、さうしたものは、その若さで、その力強さで、忽ち容易に一蹴し去つて了ふことが出来るではないか。

かれ等はまだ時の何物であるかを知らないのであつた。物の何物であるかを知らないのであつた。心の何物であるかを知らないのであつた。目的を達するといふことが、その希望したものを得るといふことが、戀を得るといふことが、名を得るといふことが、それが即ちその得たものを失つて行く原因になるといふことを知らないのであつた。有の裏には無があり、得の後には損があり、樂の後には苦のあるのを知らないのであつた。かれ等は唯蕪地に進んだ。わき目も觸らずに進んだ。その途中にある障碍物といふ障碍物は跳り越え飛び越えて進んだ。私にもさういふ時代のあつたことを思ひ起した。五百枚も六百枚もある作物を抱いて街頭を彷徨したことを思ひ起した。初めて活字になつた時の嬉しさ、初めて木になつた時の嬉しさを思ひ起した。

私は机の上に置いてある本を引寄せた。その中には、山崎斌氏の『結婚』と坂本石創氏の『梅雨ばれ』と藤澤清造氏の『根津権現裏』と喜多村進氏の『霧』と伊藤靖氏の『發掘』とがあつ

た。すべて知らない人達であつた。世間にもこれから認められて行かうとするやうな人達であつた。この他にも、さうした人達は澤山に澤山にあるらしかつた。本に出したり、雑誌に出したりする人達も澤山にあるらしかつた。しかし不幸にして、さういふ人達の発表したものすべてを私は満遍なく読むことは出来なかつた。私は手近にあるものから読み出した。

私はそれを讀み盡すために數日を費した。成るだけ詳しく讀んで見たいと私は思つた。そしてそこから私とさういふ人達との距離をも知り、併せて私の位置をも知りたいと思つた。さうした若い人達の生活や、心や、傾向や、さういふものをも知りたいと思つた。

或は言ふであらう。若い人達を知りたいために、さういふ種類の二三を讀んだとて、それは徒勞である。それにはもう少し傾向のはつきりしたものを讀まなければ駄目である。現に、かういふ本がある。あゝいふ作がある。かれはプロレタリアの作者である。かれは新しい宗教に得るところのある作家である。親鸞の影響を受けた作家である。かういふ風に勧めて呉れるであらう。そしてもつともつと澤山に讀むことを勧めて呉れるだらう。しかし私に取つては、さう澤山の本は要らないのである。傾向のある作は昔から私の取らないところのものである。私

は純な二三冊を読めば足りるのである。

プロレタリアの論議も仔細に研究すれば、面白いものに相違なかつた。日本では四五年以來その聲が喧しくなつたが、外國では大戦以前から、さういふことは盛に論議されてゐたのであつた。ゾラの作の後半は大抵その勞資の色彩で塗られてあると言つても好いくらゐであつた。ドイツのハウプトマンの『織匠』などでも、さういふことはかなり徹底的に書いてあつたと私は覺えてゐる。ゴルキイの小説がヨーロッパを動かしたのも、まだ私が三十六七ぐらゐの時であつた。しかし、文藝では、さういふ論議は單に色彩として氣分として感じとして入つて來るだけで——また題材として入つて來るだけで、あまりにその傾向に偏りすぎるといふことは、決して好いことゝは思はれなかつた。しかしプロレタリアの群の中から、すぐれた作者が出て來るといふことは、それは非常に好いことだと私は思つた。今までは日本の社會は中流階級、即ち昔の武士の階級や學者の階級や金持の階級で支配されて來たので、何うしてもさういふ教養を受けたものから多く作者が出て行つたが、現に私などもその一人だが、明治の末から大正にかけては、次第に貴族階級が覺醒し、そこに生ひ立つた若い人達が奮ひ立つて、例の『白樺』

の運動などが始まつたのであつた。そしてそこに生ひ立つた人達は、現に作家として、立派に文壇に出てゐるのであるが、それと同じやうに、プロレタリアの中から、さうした氣運が動いて、その階級のさまざまな光景や、心や、悲劇や、問題や、運命や、争鬭や、死や、戀や、さうしたものを描き出して来るものが出て来たなら、それこそ始めて日本の文壇は、世界の何處の國に比べても劣らないやうな複雑味を出して来るであらうと思はれた。私はそれを心から願ふひとりであつた。

しかし、日本の今の状態では、まだそれほど進んで行つてゐないのではないか。まだそれほどプロレタリアが動いて来てゐるのではないか。本や雑誌で外國の思想や状態を受け入れた知識階級の人達が、先きに立つて騒ぎ立つてゐるのではないか。勿論、その先きに立つて騒ぎ立てるのを私はわるいとは思つてゐなかつた。それはそこから何等かの新しい芽の出て来るのを私は知つてゐるからであつた。私は一日も早く、その芽が生ひ立つて、外國の借物でない本當の芽が生ひ立つて、立派な藝術がプロレタリアの群から出て来ることを待たすにはゐられなかつた。『死線を越えて』といふ作があつたが、あれはあまりに藝術に遠い作であつ

た。

まア、しかし、さういふことは暫らく措くとして、私は私の讀んだ二三の本に就いて、少しく此處に言つて見る時期に刊達した。

私は前に擧げた作物の中では、『根津権現裏』といふ作は、矢張 *Le Roman* ではあるが、私達の書いたものとは全く形を異にし、趣を異にし、感じを異にしてゐるのを發見した。教養も丸で異つてゐた。或は岩野泡鳴に脈を引いてゐると言へば言へるかも知れないが、しかし泡鳴よりはぐつと細かく且つ神經過敏に、きばりとしたところがあつた。ドストイェフスキイの感化もいくらかはあるらしかつたが、それも決してわるい方ではなく、思ふところへと一直線に眞直に進んで行つてゐた。コンポジションにも一元的な、すつきりとした、たとへて見れば矢を空間に放つたやうな快さがあつた。

わざと周圍を書かなかつたらしいのも、天然に對して全く目を閉ぢてゐるらしいのも、當氣や色氣の少しもないのも、すべて快い感じを私に與へた。作者は人に讀ませやうなど、は、少しも考へてゐないのであつた。これだけすぐれた筆を持つてゐて、何うして不平を言ふのか。

何うして世に認められないことなどを情けなく思ふのか。この筆だけでも既に立派な天與のもではなかつたか？ 私はかう思はずにはゐられなかつた。

『梅雨晴れ』も達者な筆だつた。細かく細かく、心理的に書かうとした作者の意圖もはつきりよくわかつた。矢張『根津権現裏』と同じやうに、周圍を書かず、天然を書かず、また箇々の性格にすら大して重きを置かないやうな形を示してゐた。私達のやつたものとは全く異つたところに目をつけてゐるのを私は發見した。矢張、筆は自由で、單純で、何處からも影響を受けたやうな形は見當らなかつた。

それに、性慾の描寫も上手であつた。その壓迫に堪へずに、遊び友達を理由なしになぐるあたりは殊に心理的であるのを感じた。しかし結末はわるかつた。何うしてあんなことを書いたか、何の必要があつてあゝした性慾の細かい描寫を敢てしたか。それはあれがなければ結末がつかないやうなものであつたらうけれども、もう少し何うにかなりさうに私には思へた。或はあの先きをもつと長く長く書かなければならないものであつたかも知れなかつた。

『結婚』はこれ等の作に比べると、著しくロマンチックであることが眼に附いた。決して前の

二つの作のやうに無配ではなかつた。私達時代の遠い影響すらもあるやうな気がした。それはあまりに小説になり過ぎてゐた。ドイツのズウデルマンの小説でも讀んでゐるやうな気がした。従つて眞に迫るといふ程度に於て著しく缺けてゐる。ヒロインのあゝした心持にも個性の描寫があるとは思はれなかつた。しかし、巧みなことは飽までも巧みであつた。二十八九や、三十ぐらゐの時に、私達はとてもあゝした作を書くことは出来なかつた。さうした作に比べて、私の『重右衛門の最後』だの、島崎君の『うたゝね』だのゝ幼稚であつたことよ。

『鷲』も矢張ロマンチストの作と言つて好かつた。それに、この作には昔の影響が非常に多かつた。島崎君の影響などもかなりにあるやうであつた。しかし、あゝした作としては、追憶の作としては、作者に取つて捨て難いものであつたに相違なかつた。私も二十八九の時に『ふる郷』といふのを書いたが——それは拙劣で、今ではとても見られないものであるが、『鷲』に比べて言つたりしてはすまないやうなものではあるが、作をした動機に於ては、兩者互ひに共通したところがあるのを私は感じた。私は何とも言はれないなつかしさを感じた。それに全體の感じが上品で、『梅雨ばれ』などと比べて、流石に昔の士族のあとの家庭が偲ばれた。

『發掘』は前の諸作に比べて、著しくあら削であつた。書き方もブツキラ棒である。とても『根津權現裏』のやうな、あゝした細かさをそこに發見することは出来なかつた。しかしそれだけ一方に強さがあつた。東北地方の原始的氣分があつた。しかし母親と主人公の關係などは、もう少し細かく入つて行かなければならないのではないか。

まア、しかし批評は別として、兎に角、さうした若い人達の作品に接して見たといふことが私には嬉しかつた。私は再び其處に戀に苦しみ、藝術に苦しみ、生活に苦しみ、その自分を取巻いた周圍の空氣に苦しんでゐる私を發見したやうな氣がした。さうした若い人達の作の中にも私といふものが生きてゐるといふことをじつと私は見詰めたのであつた。

私はいろいろなことを思ひ起した。水道橋から本郷臺を通つて、島崎君の大根晶の家に出かけて行つたことを思ひ出した。圖書館からあの東照宮の階段を下りて、不忍池をぐるりと大學前の方へと出て來たことを思ひ出した。圓千坂上の鷗外氏の大きな邸宅を外からのぞいて通つて行つたことを思ひ出した。博文館の應接間に原稿を持つて行く惨めさを思ひ出した。否、そればかりではなかつた。そこにも此處にも私があつた。髮の毛を長くして、絶えず性慾に悶えな

がら、常に物質の乏しいのに苦しんでゐる私がある。上からも下からも、また周囲からも散々に壓迫されて、全く手も足も出なくなつて了つた私がある。狭い一間に閉ぢ籠つて、金にもなるかならないかわからないやうな原稿をせつせと書いてゐる私がある。

私はその私を今の私に引較べて考へて見ずにはゐられなかつた。

五十四

それは昨年の後半期のことであつた。私は私の手元にある雑誌や新聞に出てゐる新しい時代の人達の作を注意して讀んだことがあつた。私は國民新聞に出てゐる中戸川吉二氏の『北村十吉』を讀んだ。福岡日々新聞に出てゐる中村白葉の『蜜蜂の如く』を讀んだ。それから主婦之友に出てゐる久米正雄氏の『破船』を讀んだ。改造に出てゐる志賀直哉氏の『暗夜行路』を讀んだ。

私がM君にその話をすると、

『何うでした？』

かうM君は訊いた。

『さア、不思議な氣がするね。皆な若いんだからね。一生懸命でラブをしてゐるところを書いてゐるんだからね。一面では、讀んでゐて馬鹿々々しくなるやうな氣がするよ』

『それだけ年を取つたつていふわけなんですな？ 貴方が？』

『それにしても、志賀君なんて、一體、いくつぐらゐになるんだね？』

M君は考へて、

『もう随分、年は取つてゐるでせう。三十八九でせう？』

『あ、さうかな、それぢや無理はないかな。僕も丁度その時分に「妻」を書いてゐたから——』
『さういふ風なもんですか？』

『それは時代が違つてゐるから、旨い拙いは別としても、その作者の心持は、よく似てると思ふね。だから、若いなア！ と思ふんだよ。志賀君なんか、文壇に出て、もう久しいのに、ああいふものを書いてゐる！ かう思ふんだよ』

『さうでせうね』

『無邪氣なもんだからね、君。あの鴨川のところで、細君を見染める所なんか、ほう！と思ふくらゐだからね。矢張、生活に困つたことのない階級出の作者たつていふ氣がするな？』

『それで、物は何うです？』

『流石は志賀君だけのことはありますがね……。すつきりとしてゐるにはゐますよ。濁つてゐないところがあの人の好いところですね？』

『その他のものは？』

『さうですね。皆なラブストウリイですね。皆な自分のことを書いたもんですね。『北村十吉』は初めの方は好かつたけれども、段々あとになればなるほど面白くなつて行つたね。無闇に辯解ばかりしてゐるやうな形になつて行つたからね。自分のことを書いて、辯解をするやうになつて了つてはもうおしまひだ！』

『それはさうですね？』

『あれは乾度、圖に乗りすぎたんだね。いくらか始め評判が好かつたんで、有頂天になつて了

つたんだよ。何しろ、あまり長すぎたよ。あの半分で好いんだ。もう少し引しめて書かなければならない作だつたんだよ』

『「蜜蜂の如く」は？』

『あれも Tsh-Rommi だね。矢張、若いね。しかし物としてはまとまつてゐるやうな氣がしたね。「北村十吉」のやうにあんなに長々しくないからね。それに、前半はわるくつても、後半がすぐれてゐるから好いよ。前半が好くつて後半が落ちてゐるのでは閉口するけどもね？』

『「破船」は？』

『あれは不出來だつたね。女の雜誌だから、おとして書いてゐたのかも知れないけども、わるく氣取つたところがあつたり、もつと書かなければならないところを略したり、痛切でなくてはならないところが痛切でなかつたり、随分、穴の多い作だつたよ。それに、不眞面目といふネガも免れることは出來ないだらうね？ あゝした本氣な材料たねをあゝいふ風に好い加減に書くといふことも、決して好いことではないね。さぞきまりがわるいだらうね。作者が自然派でもなし享樂派でもなし理想派でもなしといふやうに中ぶらりんのためではないだらうかね？』

『一體、女の雜誌に落して書くといふことは、つまらんことですね？』

『さう言はれると、僕も耻かしい。現に、僕もやつてゐるんだから……。それは本當は落して書くわけではなくつても、自然さうなるんだよ。矢張、書くなら、しつかりした舞臺でなければ駄目だね。緊張して、全力を擧げて書くやうな檯舞臺でなくつては？』

『金にばかり目を呉れるから、さういふことになつて了ふんですね？ わるいことだ？』

『本當にわるいことだ……。それに、結局は損なんだからね。女の雜誌に書いて金は取れるやうだけれども、拙^{あつ}けりや、あとで本にしたつて、結局賣^{ひつ}れやしないんだから——』

『第一、藝術家として不眞面目ですからね？』

『それはさうとも——』

こんなことを私達は話し合つた。雜誌と新聞と藝術とのことなども次第に私達の口の上つて來た。

『しかし、それに對して苦情を言ふことは出来ないね。雜誌も新聞も商賣本位だから……。藝術のためにあるといふよりも世間のためにあるんだから。だから、いくらでも變つて行く方

が好いんだよ。その方が活氣が出て来るんだよ。作者などもぐんぐん變つて行く方が好いんだよ』

『さうすると、雑誌や新聞に澤山出る人が矢張流行兒といふことになるわけですね？』

K君は言つた。

『それは何うしても、さういふことになるだらうね？』

『それぢや、矢張、芥川とか菊池とか里見とかいふ人が流行兒と言ふわけですね？』

『それはさうだらう？』

私達はそのまゝ、黙つて了つた。

五十五

芥川氏や菊池氏や久米氏が夏目門下であるといふことは、興味の多いことであつたけれども、しかし私には、あの人達が夏目氏の藝術の系統をそのまゝ、趁つて出て来たとは何うしても思は

れなかつた。さういふ人達でも、一方鷗外漁史の感化を澤山に澤山に受けてゐるらしかつた。

鷗外漁史の蔭武者である「スバル」が、自然派に對してかなり有力な戦を戦つたことは、それは争はれない事實であつた。そこからいろいろな作家が出ると共に、それと連絡を取つてゐる三田文學からもいろいろな作者が出た。そしてそれが早稻田から出た作者達と雜り合ふやうな形になつた。そして氷炭相容れないやうなものがいつか互ひにその長所を取り合つて、てんでに自己の位置を築き上げた。

自然派の後期に當つて、別に一つ大きな流れが出来たが、それが享樂主義と惡魔主義とを雜せて、次第に平板に落ちた自然派の缺陷へと突入して行つたのである。潤一郎氏の作品が一時盛に世間に迎へられたのは、そのためであつた。

鷗外漁史の影響は、しかし何處まで行つても學者的であつた。いろいろなものを取り入れることと新しいものを紹介することをかれは好んだ。従つて芥川氏などがその最初の作風を夏目氏から得ずに、却つて鷗外氏から得たのも面白い現象のひとつであつた。菊池氏の歴史物や仇討ものなどは、全く鷗外氏の模倣と言つて差支なかつた。

谷崎潤一郎氏も「麒麟」や「刺青」を書いた時分には、夏目氏と鷗外氏と兩方からその影響を受けたやうな形を見せてゐたが、最初に夏目氏を離れ、次ぎに鷗外氏を脱却して、次第に自己特有のスタイルとカラアとを見せるやうになつて行つた。

この間に挾つて、夏目氏の門下と言はれた人達に多少の活躍がある。森田草平氏や、鈴木三重吉氏や、小宮豊隆氏などが即ちそれである。草平氏の『煤煙』は何方かと言へば、自然派に對してわざと反抗したやうな心持と氣分とで書いてゐるけれども、しかも漱石の傾向とは全く異つてゐるものであることは誰にもわかつた。それに、いくらか風葉の系統を引いてゐるので、文章などにも絢爛なところがあると同時にいくらか古いところがあつた。これに比べると、三重吉氏は全く感じを異にしてゐた。おそらく氏は「ほとゝぎす」の寫生あたりからその細かさとその美しさを持つて來たであらうと思はれた。それに、氏はフランスのテオヒル・ゴオチエあたりを愛讀してその感化を受けた。古くはなかつたけれども、何處かロマンチシストらしいところがあつた。かれの『全集』の中には、すぐれたものがかなりに澤山にあることを私は知つてゐる。

小宮豊隆氏も一時狭斜を材料にした小説を書き出したが、餘り深くまで行かずによして了つた。惜しいことだと思つた。それから、夏目氏の系統に屬すべきものの中に、野上彌生子がある。この作者は今では唯一の閩秀作者と言はれ得る位置にある。餘りに多く作をしないことと、出したものに非常につまらないものないことがその聲價をいつまでも保たしめてゐる尊敬すべき女作者であることは言ふを待たない。しかし、惜しいことには、この作者には深みがない。深い透徹と深い理解と深い滲入とがない。世間とレベルを同じうしてゐる。つまり世間並である。従つてわかりは好いけれども、また面白味も割合に澤山にあるけれども、何うも平凡である。夏目氏の影響をそれとなしに受けてゐるためだと言へばそれまで々あるけれども、あの才と文とを持つて惜しいと思はずにゐられない。もつと自由になつては貰へないだらうか。餘所行き of 著物でなしに不斷着にはなつて貰へないだらうか。世間のことなんかは何うでも好いから、もつと本當の女の心持になつて貰へないだらうか。『海神丸』などは、骨は折つてはあるけれども、それがお話と世間並との程度であつたために、無駄骨を折つたことになりはしなかつたか。また一昨年 of 女の生活を書いた作にしても、うまいにはうまかつたけれども、

矢張中途半端な、お話をきいた程度以上深いものに接することが出来なくはありはしなかつたか。或人に言はせると、それはさういふ風に望むのが間違つてゐる。あの作者には、通俗なところをたゞ望むべきである。つまりイギリスあたりの女の作家のやつたことをたゞ望むべきである。本當のことは、とてもあの作家には望むことは出来ないと言つてゐる。しかし私はさうは思ひたくない。またさうは信じたくない。あの落附いた、静かなところを押して行つたら、もつと本當なところが出て來はしないかと思つてゐる。本當の女の苦しみをきくことが出来ると思つてゐる。

夏目氏の門下の人達とは、その形も心持も違つてゐたけれども、しかも『スバル』に據つた人達の中からも、自然派に對抗して、いろいろな氣分と心持とを湧かせて行つたことは事實であつた。江馬修などもそこから出て行つたひとりであつた。

享樂派の起つたのはそれは何ういふ形から起つて來たか。自然派のあの解剖に勞れたためか。また、あゝいふ風に物をむづかしくばかり見る必要もない、もう少し面白く見たつて差支ないといふ心持がいつとなしに作者の心の中から起つて來たためか。それとも單に今までのも

のに對して起つて來た反動か。それはさういふ形もあつたであらう。しかし、私の考では、さうした運動に最も有力であつたのは、作者が次第に性の中心に觸れて行く年齢に達したためではなかつたか。作者も次第に年を取つて行つたために、性のことについても本當に面白くなつて行つたためではなかつたか。

『さうだね、やうやく、この頃、女のこと書けるやうになつた。漸く一人前になつたわけだね?』

『本當だよ。さういふ境を書きたい書きたいと思ひつゝやつて來たよ。紅葉山人の「三人妻」などといふ作を見た時にも、どうかして自分も一度はあゝいふものを書いて見たい。あゝいふ境涯を筆に上せて見たい。かう思つてコツコツ書いて來たが、今、やつと此處まで來たといふ氣がするね。もう誰にも押しも押されもしないよ。全く人生に觸れたよ』

こんなことを誰も彼も言つたことを私は覚えてゐる。私達は——否、むしろかれ等は、その時にして初めて性を透しての人生を知つたのである。つゞいて今まで一生懸命に保持してゐるものの金であるか石であるかそれともまた瓦であるかをはつきりと見たのである。『何んだ……』

馬鹿々々しい、今迄こんな事のために大騒ぎをしてゐたのか……？」かうした言葉がひとり手にその口の上つて行つたのである。別言すれば、かれ等は始めてその先きをはつきりと見たのである。峠に近いところまで歩いて行つたのである。そしてほつと呼吸をついたのである。

五十六

ほつと呼吸を吐いた。そして静かにあたりを見廻した。

『さうだね。それは大正三四年頃だと思ふね？』

『いくつだつたね？』

『年かえ？』

『さう——』

『年は四十二三だつたね。それは僕の経験だから、皆なが皆な、さうであるか、何うか、それは私にもわからないけどもね。その時分になつて、始めていろいろなことがわかつて來たね。』

人生はもうこれだけだといふ氣がして來たね……。つまり、今までは唯、藝地に、馬車馬のやうに傍目も觸らずに進んで來たが、始めてそこに行つてあたりを見廻したんだね。そしていろいろなものゝあるのに目をつけたんだね？　はゝア、かういふものもある。あゝいふものもある。あれはあのためにあゝ見えた。これはこのためにかう見えた。實際はあゝでもかうでもなかつたのである。かういふ風になつて來た——』

『そしてそれは決して好いことぢやなかつたんだね？』

『さうさ……。ほつと呼吸をつくといふことは、もうそれは勞れた形だからね。自分のやつて來たことを見廻す形だからね。しかし、いくらわるくつたつて、何うもしやうがないよ。誰だつて、さういふことになつて行くんだから——。今の若い人達だつて何だつて？』

『それはさうだね。しかし、さういふ風にはつとせずに、回顧せずに、ぐんぐん進んで來ることとは出來ないものかね？』

『馬車馬のやうに——？』

『さう——』

『出来ないだらうな？ それは人間だから、その力の多い少いに由つて、さういふことの長くつゞく人とつゞかない人とがあるらだうけれどね。誰だつて、さうなるだらうな。あたりを見廻さずにはゐられなくなるだらうな。』

『さういふ意味から言ふと、岩野君などは長くつゞいた方だらうね？』

『その代り早く死んだ——』

『死んだことがそれに關係してゐるかしら？』

『それはゐるとも……。あゝいふ風に向う見ずだから、そのため死ななければならなくなつたんだ……。死ぬのがいやだから、あと先きを見廻すやうになるんだ……。』

『さうだらうな。さういふ形があるだらうな……。』

『そこはたしかにさうだよ。何と言つても自然は大きいからね。自然といふことは例の佛教で言ふ眞如、如來、如來藏などいふこと、同じだからな。それに逆へばすぐその影響を受けるよ。だから、無理は出来ないよ』

『さうだね……。そしてあたりを見廻した時に、何んなものが一番先に眼についたね？』

『さア』

私はかう言はずにはゐられなかつた。私はその時、一番先に何を見ただらうか。「時」ではなかつたらうか。「時」の如何ともすべからざることではなかつたらうか。

『え？』

Sは問うた。

『さうだね。「時」だね。「時」が一番先きに見え出して來たね？』

『と言ふと？』

『つまり今までは自分だけだつた。自分が中心だつた。尠くとも自分を中心に太陽が廻つてゐるくらゐに思つて旨進して來た。また、決してその進んで行く先きがかえてゐるとは思つてゐなかつた。何處までも行けると思つてゐた。ところが、さうでなかつた。尠くとも時に來た。もう太陽は自分ばかりを中心にして廻つてはゐなかつた。中心がそこにも此處にもあつた。今までは箇だけだつたのが、箇々の存在となつた……』

『ふむ』

『つまり、自分のやつてゐたことの真相がはつきりと自分の眼にも見えて來たのだね？　そして盲目的に自分のやつたことを好いと思ふことが出來なくなつたのだね。つまり、長い「時」の中の一つの點見たいにしか見えて來なくなつたんだね。だから、あの時分に書いたものには、さうしたことを慨いたやうなものが多かつたよ。「時」といふことが非常に問題になつたよ。「時は過ぎ行く」などもその時分に出來たんだからね？』

『さうかね？』

『時といふことから考へて見ると、人間なんて小さなもんだからな……。大騒ぎで、夢中になつてやつたことでも何でも、「時」から見ると小さな、何でもないもんだからな。「時」の中には、帝王や英雄の事業でも何でも彼でも陥没して行つて了ふんだからな。それを考へると、自分で平氣で目惚れて、大きなことをしたやうな顔をしてゐることは出來なくなるからな？』

『それがいけないんぢやないか？』

『さうだ、それはいけないんだ。この世の中に生きて行くのには？　活躍して行かうとするには？　しかし、その時には、もはやその對照が世の中ではなくなつて來てゐるんだからね。世の

中とか世間とかいふことでなしに、もつと大きくなつて行つてゐるんだからな？」

『何ういふ風に——』

『世間に成功するとか、事業に成功するとかいふことよりも、もつと考へなければならぬ大切なことが出来て来るんだからね？』

『それは何だね？』

『さうさな、それはちよつと言へないな。気分だからな、感じだからな？』

『生とか死とかいふことぢやないかね？』

『それまたしかにその中の一つだけども、そればかりではないね。さア何つて言つて好いかな？ もつと永遠なことを考へるやうな心持だな？』

『さうすれば、矢張、死とか生とかいふ問題だね？』

『何しろ、いろいろなことがはつきりと分つて来るんだ……。今までは何が何だかわからなかつたものが皆なはつきりと見え出して来るんだ。これはかうだ、あれはあゝだといふ風に——。そしてそのために物事が十分に出来なくなるんだ。また物事に對して興味がなくなつて來

るんだ……。つまり理解、そこから起つて来る氣分のやうなもんだね？』

『ふむ？』

『理解は即ち空だからね？』

『ふむ？』

Sは深く思ひ當るといふ顔の表情をした。

『折角勞を折つて、いろいろなことを研究して理解すると、その向うには、何があると思ふ。空があるんだからね？』

『さうかな』

『だから、佛教でも、法華涅槃の心境に達するには、その前に、大般若六百卷に書いてある心の境を經過しなければならぬとしてある！ その大般若六百卷に書いてあることは何かと言ふと、それは慧と識と空としかそこには書いてないからね。つまり慧で理解して空に達する、これが人生の大きな事實なんだからね？ だからおどろくよ。空には「時」もないからね？』

『ふむ！』

Sは頭を振つた。

『だから、何うもしやうがないよ。誰でも皆なさうなるんだから。何んなに執着のつよい、未練の深いものでも、皆なさうなつて行くんだから。何うもこればかりは爲方がない……。現に、紅葉にしても、二葉亭にしても、鷗外にしても、皆なさうだからな？』

『大きな人生だな！』

『その大きな人生も、空といふ段になると、有ると言つて好いか、無いと言つて好いかわからないやうなものなんだからな。人生すでに然り、人間だつて矢張さうぢやないか。生れたから死があり、人生といふものを認めたから人生があるといふやうなものぢやないか。さう言つて來ると、文學といふものなども、文學をつくるから文學があるので、矢張、元は空だつていふことになる。それが本當ぢやないか。』

あたりを見廻した時に、文壇には何があつたか？ 「時」が一番先きに眼についたさうだが、

その次には何があつたか？ もつと具體的に何があつたか？

つまり私達の後には、白鳥、秋江、小劍の諸氏があつたと同時に、何が私達の對照として見られてゐたか。享樂主義か。否。後期自然主義か？ 否。印象主義か？ 否。矢張、次の新し

い時代と一緒に生れて來た人道主義がその一番はつきりした對照ではなかつたか？

別言すれば、それは若い時代にかへることであつた。四十二三の時代と二十八九の時代との對照であつた。つまり新しい理想主義がさうした若い時代に芽を出し始めたのであつた。私はその時分、頗りに『白樺』を手にしたことを記憶してゐる。

そしてその若い時代は、その若い時代の讀者を帥ひて、若い時代のために、その前の時代と争ふ形を取つた。そしてさういふ人達は、自然主義を單に傍觀主義だと言つた。傍觀でなしに、超越であつたことを知らずに——。また知つてゐてもわざとそれを知らぬ振をして——。次に自然主義を不健全な、不道理な、魂を無視したものとした。不健全どころか、不道理どころか、その理想主義の不健全、不道理を通過した上に起つて來た解剖、觀察であるといふことをも知

らずに——。魂を無視したどころか、魂を磨くことをつとめた主義であつたのに——。しかしそれは理屈ではなかつた。善悪でもなかつた。さうなつて行くべき自然の経路であつた。さうでなければ若い時代はその持つた若い時代を何うすることも出来なかつた。

しかしこの若い時代からは、藝術的に見て何が出来て来たか。武者小路實篤氏も、志賀直哉氏も、有島武郎氏も、里見弴氏も、長與善郎氏もすべてその『白樺』に筆を取つた人達だが、さういふ人達も皆なてんでんばらばらに別の方に出て行く形にはなつて行きはしなかつたか。申でも里見氏と武者小路氏とはことに別な方向を取るやうになりはしなかつたか。否、有島武郎氏も亦全く別な方向を取るやうになりはしなかつたか。志賀直哉氏はそれでもまだ武者小路氏と近い——そこにもとの『白樺』の人道主義があるといふ人もあるかもしれないけれども、しかも新しい村の主人公と『暗夜行路』の作者とでは、その間に抜くべからざる別な感じと気分を持つてゐるはしなかつたか。むしろこの『白樺』の連中は、今までの中流階級——士族階級、準士族階級に對して起つた貴族階級の合同乃至覺醒と言つたやうなものではなかつたか。

あまりに長く中流階級に文壇の樞軸を握られて来たので、そのために、奮ひ起つた一つの運

動ではなかつたか。

それを思ふと、今のプロレタリアの運動なども、興味あることと思はなければならなかつた。これも矢張、勞働階級の覺醒と見て然るべきもので、そこから、さうした作者の生れて來るといふことは、當然でもありまた喜ぶべきことのひとつであらねばならなかつた。『白樺』の貴族階級が大正の一時代を代表したと同じやうに、今度は勞働階級から出た作者達が一時代をつくる時が遠からずしてやつて來さうに私には思はれた。

しかも、人道主義の人達から何が生れたか。何んな藝術が生れたか。それが時代から時代への橋渡しにはなつてゐるけれども、しかも大した作品を残してゐるとは私に思へなかつた。武者小路氏に何があるか。『ある男』などはあれは果して藝術といふことが出来るか。戯曲なども澤山に書くには書かれたやうであるけれども、さう大してすぐれたものが残つてゐるか何うか。それは氏の價值については、別な意味でいろいろなことが言はれ得る。前の時代に於ての徳富蘆花氏や、私達の時代に於いての相馬御風氏などと比べて評して見ても、いろいろに言はれ得る。ことに、あゝした階級から勞働にまゝ出て行つた形、『本當の人間』を生きやうとした

形、そこには尊敬すべきものがたしかにある。しかしあのまゝでは藝術は生れて來ない。實行の方に偏りすぎてゐる。それも島村抱月氏のやうな實行でなしに、實行即藝術の實行でなしに、普通の人達の實行以上にくらも出てゐない。あれでは少しあきたらなく思はれる。

里見弴氏は『白樺』の連中ではあつたけれども、人道主義の群の中の作者とは何うしても思はれなかつた。それは、今では全くそこから離れて來て了つてゐる。かれは別に一派を成してゐる。氏の藝術の中に、鈍花の作が影響してゐるのなども、特に指摘しなければならぬものの一つであつた。

志賀直哉氏も今では人道主義などといふ名目には甘んじてはゐないであらうと思はれた。年を経るにつれて、氏も次第にさうした感傷や理屈や主張から離れて行つてゐるやうに見える。目に出すと、本當のことは遁けて行つて了ふ、黙つてゐるに限る、かう思つてゐるやうに見える。『暗夜行路』の行き方などから押すと、かれも次第に現象主義に近寄つて行く様に見える。

さて、この人道主義の結果に何が生れたか。何ういふ收穫があつたか。私の見たところでは若い時代の若い運動以上にさう大して文學史上を飾るやうな藝術は生れて來なかつたやうであ

る。では、これからは何うか。これからとても、さうした主義からは、矢張大したものは生れて来さうにも思はれなかつた。

五十八

倉田百三氏のもものは、私は二三讀んだゞけであるけれども、あれなどが即ち人道主義の落ちて行つた場所なのだらうか。成ほどさう言へば、その間に多くの連絡がないではないやうに思はれた。

つまらないことに大騒をする形だの、いやに赤く爛れたやうなもの、言ひ方をする形だの、實際には少しも觸れずに、觸れても見ずに、本から得た知識で物を言つてゐる形だの、無闇に魂といふことを高調する形だの、成ほどさう言へば、人道主義によく似たところが澤山にあるのを私は見過さなかつた。

しかし、その藝術は決してすぐれたものではなかつた。あの弱さは？　あの低級さは？　あ

の讀者に媚びた形は？ 自他融合はそれは好いことであるけれども、また自分の心持を他の中に投げ込むことも決してわるいことではないけれども、あゝしたやり方は、心持は、また書き方は、わるく他を誘惑したやうな形に墮ちて行つてはしないか。もつとはつきりあらはすことが必要ではないか。もつと實際に當つて見ることが必要ではないか。もつと強くなる必要ではないか。

作者の感激するのはそれは好い。感激からいつも好いすぐれた作は生れて来る。しかし、その感激にも度数がある。階段がある。高い低いがある。無暗に感激したり感傷したりするのは餘り好いものではない。場合に由つては、却つて他を動かすことが出来ないばかりでなく、反對に他から蔑視を買ふやうな形になるものである。感激の安賣！かう言つてよく馬鹿にされてゐるのを私はあちこちで見た。

それに、説法をする形がある。あれがよくない。宗教的とか、何とか言ふと、すぐさう思ひ上るから好くない。藝術は説法ではない。また宣傳ではない。作者がちかに表面に出て物を言つてゐるのでは、それではすぐれた藝術と言ふことは出来ない。作者はずつと奥の方にかくれ

てゐてさへ、それでさへ、すぐそれを指摘されて何の彼の言はれるのである。作者はあくまでかけにかくれてゐなければいけない。また本當の意味で謙虚でなくてはいけない。思ひ上つてはいけない。倉田氏一派の作品には、さうした缺點がありはしないか。つまり、解剖とか、觀察とか、理解とか、さうしたことを無視した人道主義的傾向を持つたために、そのために無意識にさうした弊に落ちて行つた形ではないか。

それに、それに聯關したと言つて好いかわるいかは知らないけれども、此頃では、いやに宗教的傾向といふことが持ち上げられる形がある。これなども人道主義が齎らして來た弊害のひとつではないかと思はれる。

それも實際に宗教的に作者の頭がなつて行つたのなら、それならまだ好いけれども、さうでなしに、無闇に低級に感激して、やれ親鸞が何うの日蓮が何うのと言つてゐるのは何うしたものか。そして自分一人が大きな発見でもしたやうな顔をしてゐるのは何うしたものか。こんな不真面目な傾向は、此處にわざわざ指摘するほどのこともなく、すぐ流れて行つて了ふであらうけれども、決して好いこととは私には思はれなかつた。

この他、今日まで来る間に、いろいろな傾向も起れば、いろいろな作家も出て、すつた揉んだが随分盛んであつたやうに私には見えた。彼は立つては消え、消えてはまた立つた。

潤一郎、星湖、小劍諸氏以後にも随分いろいろな文壇的颯風が捲き起された。それはたとへて見れば、鼎の沸き返つたやうな形もであつた。てんでに、自己の存在のために必死になつて鎗を削つた。自分の安息所を得るまでは、決して争つたり戦つたりすることをやめなかつた。

そして私達時代にもさうであつたやうに、絶えず外國の思潮をその背景に持ちつゝ進んでゐるのであつた。それは今日では、もはや以前のやうに、それほど多く外國の思潮とかけ離れてゐないので、あの時分のやうに大騒ぎをすることはないであらうけれども、それでも外國の傾向が絶えず此方の文壇にも響いて來た。

ヨオロツバの大戦の後の影響がいつとなしに此方にも響いて來て、人間の心と心とが互ひに

影響し合ふ傾向だの、プロレタリアとブルジョアの争闘意識が次第に色濃くなつて行く形だの、箇人思想と團體思想と何う調和されて行くかといふことだの、さうした形が此方の文壇にもはつきりと色濃く反映して來てゐるのを私は見た。

『あの弱い文藝の流行るのも、そのためかしら？』

『そんなことはないだらう？』

『いや、いくらか、さういふ形もあるのかも知れないね？ この頃では、その證據には、ニイチエだとか、イブセンだとかいふあの傾向はすっかりなくなつて了つたからね？』

『さう言へば、さうだね？』

『何しろ、あのニイチエやイブセンは、何うしたつて、今の自他融合主義の思想とは違ふからね。何うしたつて、軍國主義乃至侵略主義といふやうなところがあるからね。ドイツ系統の思想は、今は全く流行しなくなつたね？』

『しかし、それは一時ではないかしら？ 今は大戰の疲勞で、互ひに平和を唱へるやうな弱い素直な氣分が出來て來てゐるけれども、人間といふものは根本がさうでないんだから、何うし

たつて、己は己といふやうなところがあるんだから、いづれはまたもとに戻るのではないかな……さうだよ。たしかに一時だよ。その證據には、ドイツの學術は非常な勢で盛り返して來てゐるさうだから』

『でも、まア、當分は、イブセンやニイチエは高閣につかねられると思はなければいかんね。他をつきのけて、おほつびらで自分が出て行くやうなことは、今はちよつと出来なくなつてゐる……』

『さうかね……？ それにしては、ゾラは何うした？』

『あれは、同じつむじ曲りにしても、階級的だからね。箇人と言ふよりも、階級的に物を考へてゐるからね。それで、今でも讀まれるんだらうね。僕等の考では、それと正反對で、その點に行くと、イブセンなどの方が面白いと思ふけれども……』

『さうかな、ゾラの讀まれるのは、さういふ形かね？』

『ゾラは昔からさうだよ。あの男は箇人といふことについてよりも、社會とか階級とかいふ方に重きを置いた作者だからね。矢張、ユダヤ系統だよ。ユイスマンスがあとで反抗したのなど

も、さういふ形があるんだね。ユイスマンスは、箇人思想家だからね。社會とか、階級とかいふことよりも、人間——箇人といふことの方に重きを置いてゐる人だからね。後には靈魂に深く入つて行つた人だからね。ゾラとは大分違ふよ』

『つまりさうすると、かういふことになりはしないかね？』

『何う？』

『つまり、社會や階級に重きを置く作者と、箇人に重きを置く作者と、かう二つにわかれて行きはしないかね？』

『さういふ形はあるね。それは、ゾラの中にも、人間はゐるけれども、それは社會や境遇の中に蔽はれた人間で、社會や境遇の上に出て來てゐる人間ではないからね。社會や境遇が人間を驅使してゐるからね。それに比べると、ユイスマンスは全く違ふからな。「大寺院」などを讀むと、全くひとりになつてゐるからな。……ゾラは初めから境遇などに重きを置くやうな作家だつたよ。』

『ふむ！ おもしろいな』

私達はそこから今の階級文學といふものをはつきり飲み込むことが出来るやうな氣がした。社會に蔽はれた作家、境涯や社會が主として人間に影響するとのみ思惟してゐる作家、さういふ作家と一箇人しか目に見ない作家との區別が私達には考へられて來た。何方が好いかといふことは、それは容易に言へないことであるから此處には言はぬとして、さうした二つの大きな潮流が、外國の文壇にも流れてゐることを私達は思はずにはゐられなかつた。

『さうすると、何うしても、階級文學は社會といふもの、人間に及ぼす影響などといふことに重きを置いてゐるといふ形になるんだね？』

『さうだね』

『さうすると、箇人を重んじた作家とは、丸で正反對だね。箇人を重んじた作家は、社會とか境涯とか、乃至は階級とかいふこと以上に箇人をのみ見やうとするからね。従つて前者は心理的にはならないといふ形だね？』

『さうばかりも言へないかもしれない。ドストイエフスキイなどは、階級的作家とも言へるし、心理的作家とも言へる！』

『ドストイエフスキイ程度の心理では、非常にすぐれた心理的と言ふことは出来ない。あの作家も矢張、社會といふことの方を重んじた作家だよ』

『さうかな……？ それでは、モウバツサンなどは？』

『あの人なんかも、社會はつとめて見るやうにした作家には作家だね。しかしゾラと比べるとぐつとエゴイストでそしてサイコロジストだね。全體の調子に、何處か社會や階級を馬鹿にしたやうなところがあるよ』

『成ほどねえ……さういふところがあるね。それから、日本の今の文壇では？』

『さア、日本ではまだ混沌としてゐるね。社會意識とか、階級意識とかいふことは、まだ漠然としてゐるね。従つて作家にも、はつきりとさうした區別はついてゐないやうだね。』

『里見弴はブルジョアの張本人だつていふぢやないか？』

『それは、藝者を書いたり何かするからだらう。しかし、あの人のものは、階級的ではないね。何方かと言へば、心理派の方だね？』

『芥川氏は？』

『あの人がたつてさうだらう。階級的ぢやないだらう。しかし、あの人は里見氏ほど心理派ぢやないね。自己を出さないね。何か物に托した上でなければ、決して自分を出さない人だね？』
『それはさうですね』

『才人には才人だ。文章なんかにも新しい好い匂ひがしてゐる。しかし、今までのものでは、妙くとも「沙羅の花」に収めただけのものでは、才人といふ以上に他に名のつけやうがないやうな氣がするね。階級作家と心理的作家との何方にも屬せしめることが出来ないほどそれほど才人だと思ふね。新潮に「百合」といふ作があつたが、あのあとを書かないが、何でも、苦しんでゐるらしいのは、あの作でもわかるね。あの人の作では、『倫盜』だの、『山嶋』だのが好い方だらうね？』

『菊池君は？』

『僕は菊池君のあの態度はすきだ——他は何と言はうが、僕は僕だと言つたやうなところが好きだ。里見君と論じたのを僕は兩方とも見たが、里見君は何處かキザなところがあるのに反して、菊池君は率直なところがあつて好い。しかし、作としては、何が好いんだらうね？ 讀ん

だ時は面白いにしても、あとまで印象が残つてゐるやうな作はあるかね？ 「藤十郎の戀」思
饗の彼方へ「父歸る」あれなんか好いのかね？ その點に行くと、芥川氏や里見氏のものゝ方
にもつとすぐれたものはありやしないかな？」

『さうですな』

文藝談が出る席上では、こんな話がいつも私の口から出た。皆なすぐれた才能と筆とを持つ
てゐる人達だと私は思つた。里見氏については、『上手すぎるくらゐだね。立派な作家だよ。唯
いつも言ふことだけでも、あれで、あの變な鏡花の影響見たいなものがなくなると、一層好い
と思ふんだけど……。「直輔の夢」なんかは上手だと思ふけども、あの大阪のサンデー毎日
に書いた短篇などは、鏡花かぶれがしてゐて決して好いとは思はなかつたね。「直輔の夢」も、
あれで作者の意圖——幫間とか女將とかいふものを書いて見やうといふ意圖、それが見え透い
てゐないと、猶ほよかつたんだけどもね……惜しいもんだよ』こんなことを私は言つた。一
方、あの年であゝしたものを書いたのは、ちと老成すぎはしないかといふ氣もした。

佐藤春夫氏のものについても、私は常に注意を拂つてゐた。『都會の憂鬱』も處々讀んだ。

好いところがあるとも思つた。しかし、何うしてかイヤに固苦しいところがあるのが氣にかゝつた。またいやに詩人らしく氣取つてゐるところが氣に懸つた。『田園の憂鬱』を私は好いとは思つてゐるけれども、あの蕃薇を書いたところなどは、決して同感することは出来ないものであることを私は思ひ出した。何故、もつと自由に出て行けないのだらうか。何故、もつとテキパキ書くことが出来ないのだらうか。何もそんなに詩人らしく氣取つて見せなくつても好いではないか。詩人らしく氣取るといふことは却つてその詩人の尊嚴を保つ所以でないのを知らないのか。それに、無駄な努力をしてゐる。何うでも好いやうなところに一生懸命に力を浪費してゐる。時には、何もこんなに骨を折らなくつたつて好い。もつと樂に書いた方が好い、その方が却つて効果が出て来る……。こんな風に思つたことも度々あつた。

六十

早稻田から出た人達の中にも、いろいろな作家がゐる。相馬泰三氏だの、廣津和郎氏だの、

吉田紗二郎氏だの、葛西善藏氏だの、數へれば、まだこの他にも澤山に澤山にあつた。

しかし、さういふ人達でも、もはや決して新進作家ではなかつた。あとに一時代も二時代も控へてゐた。さう大して爲事をしない中に、皆な中老の形になつたなどと言はれてゐた。

相馬君にしても、廣津君にしても、皆なすぐれた作家だつた。てんでにその持つた味は違つてゐたけれども、自由な、眞面目な、早稲田らしい感じは互ひに共通してゐた。吉田君などは、もう少し解剖とか觀察とかいふことを勧めたいやうな心持がしたけれども、しかしその持つた境は完成したものだつた。葛西君の藝術味などは、早稲田にはめづらしいものと言はなければならなかつた。

早稲田からも、しかし、をりをり感じの違つた、味の違つた作家が出た。長田幹彦氏が早稲田出身であるなどは、ちよつと誰も思ひかけないところであるに相違なかつた。宇野浩二氏なども矢張そのひとりだつた。

宇野氏は一種特色のある作家と言ふことが出来た。決して私はそこからすぐれた藝術を望みはしなかつたが、またとてもあゝした心持から、眞面目な、正面な、また突詰めた藝術は出来

はしないと思つてはゐるが、しかしユニツクであること——あのスタイルでなければあゝした馬鹿けた味も感じも出て來ないといふことは、不思議な感じを私に誘はずには置かなかつた。私は思つた。あれはあれで好いのである。何も言ふ必要はないのである。あれに向つて、やれ現象主義が何うの、人道主義が何うの、表現主義が何うと言つたところで、それは問題にも何にもならないのである。かう私は思つた。私は始めは氏は近松秋江氏あたりから脈を引いて出て來て、男と女のことにかけては、かなり深く入ることの出來る作者と思つてゐたが、次第に、あゝいふスタイルでは、あゝいふ感じでは、あゝいふ味では、とても深い男女の問題の奥まで入つて行くことなどは出來ないと思はれ出して來た。氏の筆にかゝつては、何んなに眞面目なことでも、一種わきに外れた、それとは丸で別なものに對したやうな感じを味はせられずにはゐられなかつた。氏の閱歷を書いたやうなものでも、丸で別なことが書かれてあるやうにしか感じられなかつた。それに、氏は早稻田派とは言へなかつたかも知れなかつた。唯、一時、早稻田に籍を置いたくらゐなものかも知れなかつた。

長田幹彦氏は、今では新聞小説家として、その方で非常に活躍してゐるやうであるが、また

氏としては、その方が自分の本當の爲事の様に言つてゐるが、私としては、あゝいふものよりも、『落』だの『零落』だのを書いた頃の方が本當ではないかと思はれた。しかし、氏の考では、何もあゝしたものはかりが好いといふわけがない。今、やつてゐるやうな小説の中にも、好い本質があるならひとり手にそれが出て來なければならぬ筈である。何も雜誌に出る小説だからとか、新聞に載る小説だからといふ區別があるわけはない筈である。かう氏は言つてゐるかも知れないが、しかし私はさうは思はない。藝術といふものは、ちよつとした心の持方で、非常に感 が違つて行くものである。心の震へ方如何で、感じが丸で違つて行くやうなものである。何うしても一度はもつと眞に迫る藝術にもどつて來る必要がありはしないかと思はれる。

新聞小説といふものは、何うもいけない。縛られまい縛られまいと思つても、いつか通俗に捉えられて行つて了ふものである。それに、新聞の標準といふものが第一義的でない。社會も社會、ぐつと下の、低級な、平凡な社會を目安にしてゐるといふ形がある。第二義的、第三義的に面白くさへあれば好いと思つてゐる。いくら進んだ新聞だと言つてもさうである。従つて新聞に小説を載せるといふことも、またそれに書くといふことも、決してしつくりはまつたこ

とは言ふことは出来ない。出来ることなら、作者は單行本としてその書いたものを發表すべきであらう。

早稲田では、作家の他に、金子筑水氏があつた。また長谷川誠也氏があつた。共に明治大正の文壇に深い大きな貢獻をされた人達であつた。またこれについてやゝ新しく片上、吉江兩氏があつた。いろいろな意味に於て俱に近代の小説に深いその感化を與へつゝあるといふことが出来た。今日では、兩氏のあるがために、早稲田の學風が著しく活氣を帯びてゐるといふことは、争はれない事實であつた。その他、小川未明氏が近年著しくプロレタリアの色を濃くして來たことも、注目すべきことのひとつであつた。

早稲田出身の作者の無邪氣で素樸であるのに反して、慶應から出た人達には豊かなのんきなところのあるのを私は見た。さう言つて了つては、或は斷定すぎるかも知れなかつたけれども、早稲田にはプロレタリアに近い人達が多く、慶應にはブルジョアの家庭に生ひ立つた人達が多いらしかつた。従つて慶應から出た作者には、生活難を問題にしたやうな作は少なかつた。大抵は情緒を重じたり、懸を誇張したりするやうな作家が多かつた。わるく技巧を重んずる作家

などもあつた。

久保田萬太郎氏、水上瀧太郎氏、共にすぐれた才筆を持つた作者であると言つて好かつた。前者には東京の淺草あたりを舞臺にしたものに非常に好いものがあり、後者には外國をシインにしたものにすぐれたものがあつた。その他松本泰だの、南部修太郎だの、佐々木茂索だのと、いふ人達がゐた。賑かな群と言つて好かつた。

これに限らず、私立大學では、皆な文科を置くやうになつたから、これからは、いろいろな「派」といろいろな「群」とが澤山に澤山に出て行くであらうと思はれた。

六十一

此頃の福岡日々新聞に、前田晃氏が『曉霧』といふ作を載せてゐるが、まだ半分くらゐしか出てゐないが、この作者に就いても、私は一言二言言つて見たいと思ふ。

氏が大正の文壇に於て、すぐれた翻譯家であることは誰も知つてゐる。かれは確かしい、誰

も容易に手をつけることを敢てしないゴンクウルの『ジェルミニイ』を譯した。モウバツサンの『ピエル・エ・ジャン』を譯した。チエホフの『短篇集』を譯した。イタリーのアミイチイスの『心』を譯した。

『晩霧』は氏の試みた長篇の二番目の作である。まだ、半分しか出てゐないから、それに對しての本當の批評は言へないけれども、四十を過ぎた主人公の複雑した見方の中に、戀と家庭と人生とをあらはしたさまは、非常に面白いと言はなければならなかつた。そこには人生の半を過ぎた人達の苦みと悶えとを歴々と指すことが出來た。またこのつらい人生の中に孤往獨邁する人達の當然邂逅しなければならぬ苦痛に苦しんでゐるのを指さすことが出來た。そこにはいろいろ問題が細かくこめられてあつた。深く簡められてあつた。戀の問題もあれば、妻と子との問題もあつた。生活に對する苦しみもあつた。それに、それをあらはすについても、回想の形を取りながら、それをお話してなしに、シインとして、光景としてあらはさうとしてつめてゐるさまなどは、技巧の上から言つても面白いものと言はなければならなかつた。

氏は文壇に於ては、何方かと言へば不遇であつたけれど——時にはさうした地位に身を置く

管がないと思はれるほどそれほど不遇であつたけれども、しかし次第にその本質はその光を放つて來た。

『曉霧』は尠くとも近頃讀んでゐるものの中で最も私の心を惹いてゐるものの一つであつた。

六十二

この他に、加藤武雄氏だの、水守龜之助氏だの、中村武羅夫氏などがあつた。

私はかういふ人達について、ことになつかしきを感じずにはゐられなかつた。私はそこに細かい文壇の氣分をまざまざと見るやうな氣がした。また、私達の通つて來た道をもはつきりと指し示されたやうな氣がした。さういふ人達も矢張私達が通つて來たやうにしてこの文壇へと出て行つたのであつた。

少年の時を自然派の渦潮の中に投じたやうな人達！ 好かれ、あしかれ、その潮流の感化を受けたやうな人達！ さういふ人達は、私に取つては、なつかしい限りであつた。たとへ、そ

の人達が丸で違つた方面に自己を發見しやうとも、また自分の好いと思ふ方へと趨つて行かうとも、また、私とは全く違つた反對の方面に向はうとも——否、中には、その自然派の渦潮の中に没つた影響を非常に悪影響として、それを悪魔のやうに罵つたり何かするものがあつたにしても——。

六十三

私は筆を戢めやうとしてゐる。ふと私の胸には、少年時代に讀んだ歐陽修の『徐無黨の南歸するを送るの序』が思ひ出されて來た。

今、こゝにそれを引いて見る。

草木鳥獸之爲物、衆人之爲人、其爲生雖異、而爲死則同、一歸腐壤漸盡泯滅而已、而衆人之中、有聖賢者、固亦生且死於其間、而獨異於草木鳥獸衆人者、雖死而不朽逾遠而彌存也』
其所以爲聖賢者、修之於身、施之於事、見之於言、是三者所以能不朽而存也、修於身者無

所不獲、施於事者有得有不得焉、其見於言者、則又有能有不能也、施於事矣、不見於言可也、自詩書史記所傳、其人豈必皆能言之士哉、修於身矣、而不施於事、不見於言亦可也、孔子弟子、有能政事者矣、有能言語者矣、若顏回者、在陋巷曲肱餓臥而已、其群居則默々終日如愚人、然自當時群弟子皆推尊之、以爲不敢望而及、而後世更百千歲、亦未有能及之者、其不朽而存者、固不待施於事、況於言乎、予讀斑固藝文志、唐四庫書目、見其所列、自三代秦漢以來著書之士、多者至百餘編、少者猶三四十編、其人不可勝數、而散亡磨滅、百不一存焉、予竊悲、其人文章匪矣、言語工矣、無異草木榮華之飄風、鳥獸好音之過耳也、方其用心與力之勞、亦何異衆人之汲々營々而忽焉以死者、雖有邇有速、而卒與三者同歸於泯滅、夫言之不可恃也蓋如此、今之學者莫不慕古聖賢之不朽而勤一世以盡心於文字間者、皆悲也、東陽徐生、少從余學爲文章、稍々見稱於人、既出而與群士試於禮部、得高第、由是知名、其文辭日進、如水涌而出、予欲摧其盛氣而勉其思也、故於其歸、告以是言、然予固亦喜爲文辭者、亦以自警焉、

これを讀むと、私は深い一種の悲哀に撲たれずにはゐられなかつた。實際、この通りではな

いか。何の彼のと云つたところで皆な涙誠に歸して了ふのではないか。いくら文章が旨いとか内容がすぐれてゐると云つたところで、それは春の百花が開いてそして散るやうなものではないか。好い鳥の聲が耳のあたりを掠めて行くやうなものではないか。いくら不朽を望んだところで、斑固の藝文志や唐の四庫書目の中にある人達と同じやうに、皆な忘れられて行つて了ふのではないか。唯僅かにその中の一人二人があとまで残るのだが、それとてたまたま運が好くてあとに残つただけであつて、いつまで續くかはわからないではないか。本當にこの作者の言ふやうに、皆な悲しむべきものではないか。それを考へると、悠々とした人生が顧みられるだけではないか。否、これを言つた人が既に千年近くになつてゐることを考へると、私は何とも言はれないやうな氣がした。

そればかりではなかつた。この中に、既に立派に、『實行と藝術』のことが暗示されてあるではないか。身に修め、事に施すといふのは、即ち實行をさしてゐるのではないか。之を文に現はすといふのは、即ち藝術を折してゐるのではないか。そして藝術ばかりが生命があるのではない、また實行ばかりが生命があるのではない、人間にはもつと大切なことがあるといふこと

をその文章の背景にほのめかしてゐるではないか。顔淵の無爲が、それが即ち人生であるとは言つてゐないまでも、さういふ一生もまた無意味でないことを示してゐるではないか。私達が深く深く考へなければならぬことがその中にかくされてあるではないか。



大正十二年二月十五日印刷
 大正十二年二月十八日發行
 大正十二年二月廿三日再版
 大正十二年三月一日三版
 大正十三年三月十五日四版

近代の小説

〔定價貳圓四拾錢〕

著者 田山 錄彌

發行者 瀬戸 義直

東京市神田區中橫樂町一七

印刷者 寺田 國太郎

東京市牛久保區早稻田堀巻町三六二

印刷所 早稻田印刷株式會社

東京市牛久保區早稻田堀巻町三六二



發行所 近

東京市神田區中橫樂町一七

代 文 明 社

電話 九段二二五六番
 提替口産 京五八五二六番



(本社發行書目は裏面にあり)

近代文明社發行書目

教育時論
主筆

原田實著

新刊

國際日本の教育

四六判二七〇頁
布裝上製函入
定價一圓九十錢
書留送料十五錢

獨斷的國家至上主義の趨勢は、千九百十四年以後の世界大戰となつて、全人類の上に未曾有の慘禍を齎した。而もその由つて來る所を索ぬれば、各國がそれ〴〵に實施し來つた偏狭な國家的主權支持の教育にその禍因の潜むものが多かつた。

著者は教育評論界の新人である。夙に偏狭なる國家主義的教育説を排して、世界の平和幸福を招來する爲に、國際的全人類的教育の必要なる事を高唱してゐる。最近、吾國に於ても教育關係の有力者によつて國際教育協會が設立せられ、著者も亦その發起人の一人である。更に今年は米國に於て世界的の國際教育會議が開かれ様としてゐる。

今や吾國も偏狭な國家主義的見解を捨て、世界的全人類的の幸福と光明とに滿ち輝く世界を建設すべく、新しき教育方法の立案せられ實施せられねばならぬ秋である。この教育界の黎明期に當つて本書の出現は、極めて意義深きことと言はなければならぬ。

本書に收むる所の「國際日本の教育」以下數十の論説は、皆この著者の生々證々たる新教育主義の現れである。

第六高等
學校教授

山宮允編

新刊

日本近代詩書綜覽

四六判六〇頁美裝
定價三十五錢
送料二錢

奮動たる新日本の精神と、新たに移入された歐米の詩とに刺戟されて、在來の歌俳句と全然その趣を異にする新しい「詩」が吾邦に生れてから、四十年になる。然して今や詩壇は普て見ざる活氣を呈し、多様性を帯びるに到つた。かゝる興隆の機運に際し、詩の進展に參與する新人にとつて、古き詩の傳統を温ね、新しき世界への進路を定むは極めて肝要のことである。本書は過去四十年間に於る吾邦詩書史であつて、頗る至便なものである。

日夏耿之介序 最上純之介著

新刊

孟夏飛霜

大判一〇〇頁四號活字組
全部木炭紙刷美裝
定價二圓五十錢
送料十七錢

齡十五を越したばかりの年少天才詩人の處女詩集である。逸才の世を恣にするこゝに臻りて夫れ美なる哉。雨か風か雪か嵐か、あゝゆく雲をして行かしめよ。と、日夏氏をして讚嘆せしめたるものである。限定版のことであるから、萬一再版するとしても同裝の書は再び手に入れ難い。詩の愛好者に切に割覽を乞ふ。

水谷まさる著 武井武雄装幀

五版 抒情詩集 青みゆく月

四六判一八〇頁 石版刷表紙
背絹天金函入美装 定價金一圓
五十錢 書留送料十五錢

かの大空高くいよ／＼青みゆく月のそれにも比すべき純一濁りなき詩境に立ちて、優しき言葉に深き魅力を與へつゝ、歌ひ出でたる著者の抒情小曲集である。今や新しく抒情詩に蘇らんとする現代の欣求に最も適へるものといふべきである。一面婦人と少女の間に多くの讀者を持てる著者は、此集がそれらの人々の間にも讀まれるべき事を望み且信じて居る。

水谷まさる著 中山晋平、宮原禎次作曲、角山次郎装畫

再版 童謡集 神さまのお手

四六判一二〇頁石版刷表紙函入
美装、作曲五篇、色紙刷挿畫入
定價金一圓卅錢書留送料十三錢

詩と夢と空想とに富める子供の生活を巧みに歌ひ出でた水谷氏の童謡は亦詩壇の一異彩である。その如何に優れて居るかは一度之を子供に讀み聞かせた人ならば直ぐ解る。中山宮原兩氏の作曲もとり／＼に面白く、音樂に興味ある人を喜ばせるであらう。

東京音樂學校
講師

牛山 充譯 (ヨーゼフ・ホフマン著)

版五 ピアノの弾き方

現今世界一流のピアニストたるホフマン氏の原著で、著者は偉大なる藝術的技能を有すると同時に教授の方面にも獨特の才を持てる人であるから、本書の如きは實に教師にも學習者にも必要缺くべからざるものである。前半に於ては弾き方に關する重要な心得を述べ、後半に於ては實際に學習者から受けた數十の質問に對して深切明快な解答を與へて居る。現今ピアノの手引で本書の右に出づる物は絶對にない。

四六判三四〇頁美裝天金函入
弾き方姿勢寫眞入
定價金二圓三十錢書留送料十七錢

版三 獨唱の仕方

本書は聲樂法に於て東西のオーソリテイとされて居るリリイ・レーマン夫人の「如何に歌ふべきか」を牛山氏が平明に翻譯したもので、發聲法に關する圖面五十餘を挿入し、説く所深切丁寧を極めて居る。専門家は勿論ながら、苟くも聲樂に興味を持つ者は必ず一讀して眞の歌ひ方を會得すべきである。

四六判三〇〇頁美裝天金函入
發聲に關する挿圖五十餘
定價金二圓六十錢書留送料十七錢

山田わか著

再版 家庭の社會的意義

四六判五〇〇頁洋布裝函入
美本 定價金二圓八十錢
書留 送料 十八錢

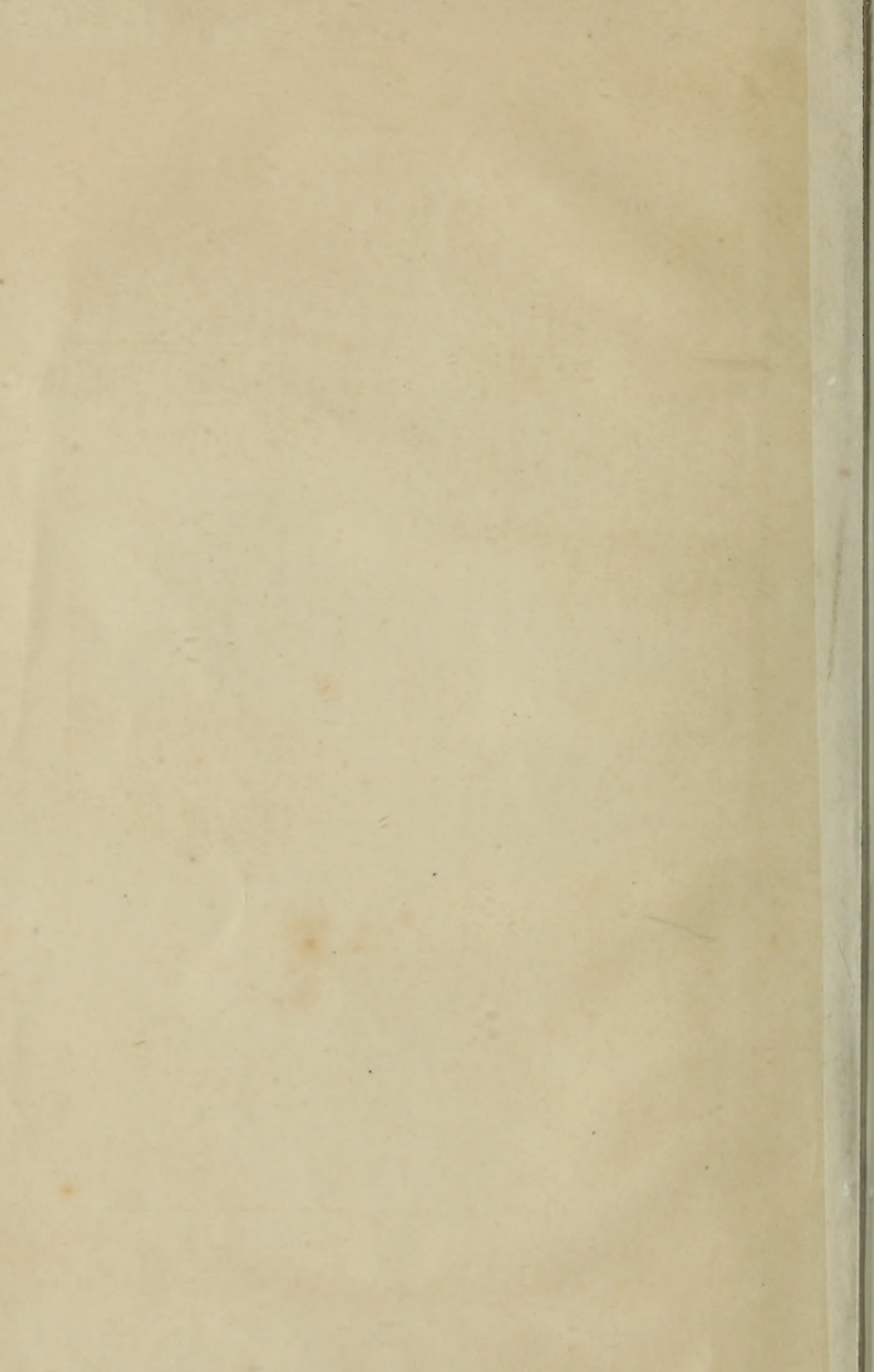
徒らに文字の技巧を弄せず、優しい言葉を以て、諄々として人間性の發揮を主張して居
わが山田女史は、現今婦人論客中の第一人である。豊富な科學的知識と、その貴い過去の
體驗とを以て立論した女史の説には寸分の隙がない。本書は十篇四十一章に分つて、婦人
生活のあらゆる事象と社會組織との關係交渉を解剖し、目下の社會改造が婦人と家庭に如
何なる地位を與ふる事によつて行はれるかを詳論してある。

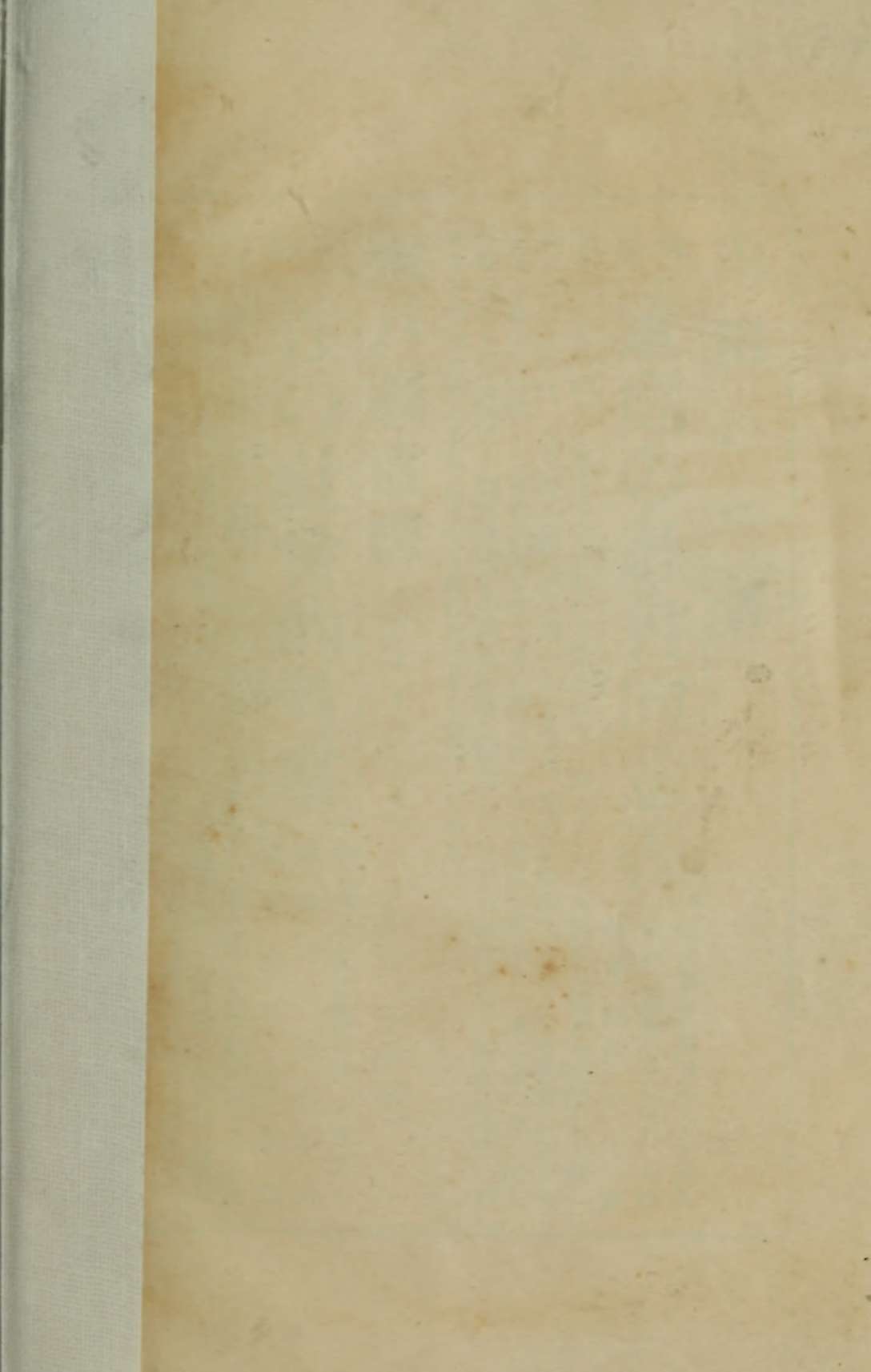
瀬戸義直譯 (ウイリアム・フィールディング著)

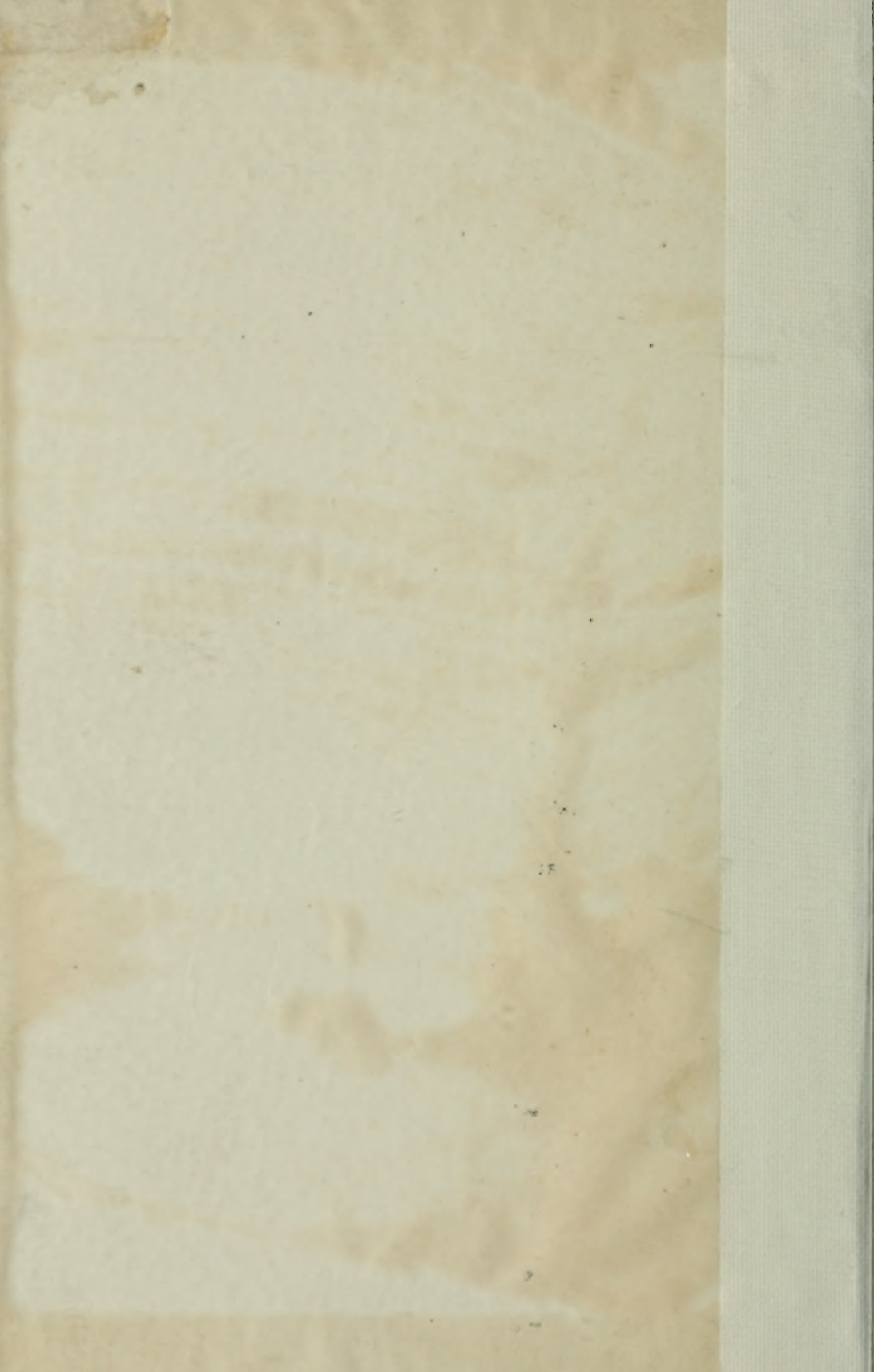
再版 性の社會的考察

四六判三五〇頁洋布裝上製函入
定價金 二圓 三十錢
書留 送料 十五錢

最近教育家の會議に於て性教育が頻りに論議されて居るが、これは性の問題が我々の家庭
乃至社會生活に如何に重大な意義を持つものであるか、又我々がそれに對して周到慎重な
態度をとる事が如何に必要であるかを物語るものである。本書は諸種の事實を基礎として
廣く社會的見地から性の問題を取扱つたもので、教育家經世家等の必讀書である。







EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 02953 9087